
ダメ男依存症候群～俺は彼女に中毒症状～

霧谷香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメ男依存症候群 ～俺は彼女に中毒症状～

【Zコード】

Z9186B

【作者名】

霧谷香住

【あらすじ】

『ダメ男依存症候群』の旬視点のサイドストーリー。奈津美と旬の出会いの詳細や初デートのエピソード、そして前作の話の裏での旬の心情など……。旬の一人称でお送りします。前作『ダメ男』をお読みになつてない方は、そつちを先に読んだ方が話が分かると思います。

1 人生の転機

それは、俺が高二……それも卒業間近の時のこと。全てはここから始まつた（と思つ）。

「よつしゃ！ 受かつた！」

「俺もあつた！」

「俺も！ よかつたー！」

大学の合格発表の掲示板の前で喜びガツツポーズをする俺の友達たち。

その中に、俺は入れなかつた。

「おい、匂。お前はどうだつたんだよ？」

「落ちた」

俺が即答すると、その場の空気が凍つた。

まさか、落ちるとは思つてなかつたんだろう。

確かに、俺が受けた学部の学科は、倍率が一・五倍で、受験者の半分以上は受かる、それぐらいの確率だつた。

実際、俺の番号の前後十人ぐらいは、抜けることなく続いている。周りの雰囲気も、受かつて喜んでいる奴が多い。そんな状態だつ

た。

「でも結果は分かつてたようなもんだって。入試も全然手応えなかつたし」

「ま、まあ、お前滑り止めも受けたんだり？ そつちはまだ分かんねえしな」

俺を励ますためか、そういう風に周りは言った。

滑り止めも、全く自信ないけど、これ以上気を遣わせるのもなんだから、とりあえず何も言わなかつた。

「旬！」

そう呼ばれた方を向いてみると、

「あ、ミキー！」

俺の彼女がいた。

ミキも同じ大学を受けた。

学部は違うから、また別の所で合格発表を見てきたはずだ。

「ミキ、どうだった？」

ミキのもとに行つて、結果を聞いた。するとミキは、笑顔で

「受かつたよ！」

と言つた。

「おー！ よかつたな！ おめでとー！」

俺は心から嬉しくて、ミキにさつ話した。

ミキが受けたのは、この大学で一番偏差値が高くて一番人気がある、倍率も五倍近くある、難しい学部の学科だった。

ミキは本当にこの大学に行きたがっていて、夏から予備校に通つたり、遊ぶのも我慢して頑張っていたのは知ってるから、俺は自分のことのように嬉しかったんだ。

「ありがとう。……それで、旬は?」

嬉しそうな顔から、少し深刻な顔になつてミキは俺を見上げる。

「ダメだった

ミキにも氣を遣わせないよう、俺は明るく笑顔で言った。

でもやっぱり、ミキの表情は暗くなる。

「そつか……あ、でも、もう一つ受けた方があるもんね」

ミキも皆と同じようにさうやって笑顔で言つ。

「うん」

ミキには尚更、手応えがなかつたなんて言えなくて、俺は頷いておいた。

その後、友達とは別れて、ミキと一緒に帰つた。手を繋いで歩いていた。

「ミキとは、高二の夏に告白されで付き合い始めた。

「私の学年一可愛くて、性格がよくて、スタイルがよくて（特に）カップのおっぱいは素晴らしい）モテるミキ。」

お互い受験生だし、周りには受験が原因で別れた奴ら多かったけど、俺達は順調にやつてきた。

そして、それはこれからも続していくんだと思っていた。

「ミキ、マジでよかつたなー。俺、何か自分のことみたいに嬉しい俺はその時の気持ちを素直に、ミキに言つた。

「うん……ありがと」

ミキはそういうながら、複雑な顔をしていた。

やつぱり、俺がダメだったから、喜びにくらいのだろうか。

「これからどうする？　あ、どつか店入つてミキの合格祝いしよー。」
思い付いたことを、俺はそのまま言つた。

でも、ミキは黙つて首を横に振つた。

「ううん……今日は、親がお祝いするから、すぐ帰つてきてって言われたの……」

「あ……そっか」

その言葉が、少し残念ではあったけど、俺はしおうがないとすぐ

に思い直した。

ミキの親だつて、ミキのことを応援してたはずだから、今日は、家族水入らずでお祝いしてほしいのも、本心だ。

「旬の合格決まつたら……一人でお祝いしようね」

「うん」

ミキが笑つてそう言つてくれたから、俺は全く自信ないのにも関わらず、はつきりと頷いてしまった。

そして、数日後。

郵送で大学の合否通知が届いた。

薄っぺらいハガキで一枚。

『本学の入学試験の結果、あなたは不合格と判定されました』

素っ気なくたつたそれだけ書かれていた。

この前と同じように、特にショックではなかつた。結果は分かつたし、元々滑り止めのことは、担任に受けておいた方がいいと言われて受けただけで、行きたかったわけではない。

そして、俺は不合格だったという結果をミキに電話で伝えた。

「……そつか」

ミキはただそれだけ呟いた。

電話越しにでも、気まずい雰囲気が伝わってくる。

「それで……句はどうするの？」
深刻な様子でミキは聞いてくる。

といつても、実はそういう氣づいたのは、後になつてからのことだ。
この時の俺は、世界一のバカだったから、とても脳天気に、言葉
を発してしまつていた。

「まあ、とりあえず専門（学校）行くかなー。別にそつちでも興味
あることできるし、資格も取れるし」

「……後期試験は受けないの？」

「そんなん無理に決まつてんじやん！ 後期だつたら倍率がハンパ
なく上がるし。やっぱ、ハナから俺が大学受験なんて無理だつたん
だよ」

そう言って、俺は笑い飛ばした。

このこと、後になつて本当にバカなことをしたつて思い知る。

「ミキとは……学校離れちゃうけど、それでも会えないわけじゃないんだし、それよりもミキが一番行きたかったとこに受かってよかつたよ」

「何それ……句、勝手すぎ」

ミキの声の様子が、いつもと違つた。

「え？」

「旬は……大学落ちて当たり前だよ。勉強してなかつたんだからこんな風に、ミキに厳しく言われたのは、初めてだつた。

「旬は元々大学希望じゃなかつたもんね。大学受けて落ちても、専門学校行けばいいって言つてたし。初めからそつやつて安全な道を決めて、必死に頑張つたりしなかつたんだよね」

ため息混じりに、そう言われた。

「え……でもそれはミキと一緒に大学行きたかったから…」

「本当に？ それなら何で勉強しなかつたの？ それどころか、教習所行つたりバイト増やしたりしてたよね。普通あり得ないよ。受験生なのに」

返せる言葉はなかつた。全部、ミキの言ひ通りだ。

「私……旬が私と同じ大学行きたいって言つてくれたの、本当に嬉しかつた。わざわざ、進路変えてまで私と一緒に大学行きたいって言つてくれて……でも、結局、旬は口ばっかりだよ……」

最後の方は、涙声に聞こえた。

「もう別れよ……私、これから旬と今まで通り付き合える自信ない」

そうやって、突然別れの言葉切り出され……俺達は終わった。

本当は、何かを言つべきだったのかもしれないけど、ミキの言つ

ことがあまりにも正し過ぎて、俺が言うことなんて間違いだらけの
ような気がして、『ごめん』以外特に何も言えなかつた。

ただ思つたのは、俺はどうしていればよかつたのか……それだけ
だつた。

ミキの言つとおり、俺は元々専門学校志望で、大学を受験しよう
と思つたのは、夏休み頃……ミキが大学志望で、ミキが行きたいと
言つた大学のパンフレットを見ていたら、俺の興味ある資格が取れ
ると言つことを知つた。それに俺と同じクラスの数人が受けれるとい
う学科だつたから、俺も受験することにした。

ミキと同じ大学に行きたいと言つた俺を、ミキは止めたのに、そ
れでもミキと一緒にいいから頑張ると言つたのは俺の方だ。

それで夏休みまでは、受験勉強らしい勉強をしていくけど、俺は
十八になる秋から教習所に行き始めて、免許を取つた。

そして、冬には教習所でなくなつた金を稼ぐために、バイトを増
やした。

普通、大学を受験する奴には有り得ない。

他の受験生が真剣に勉強してる時に、俺は全く違うことをしてい
た。

ミキも心配してくれて、勉強のことを注意してくれていたのに、
俺は気楽に考えて、結局はちゃんと勉強しなかつた。

でも、言い訳のようになるかもしれないけど、免許を早く取りた
かったのは、受験が終わつて卒業したら車でミキと色々なところに遊
びに行つたりしたかつたからで、バイトを増やしたのは、金がな

つたら、ミキと遊べないし、三月にミキの誕生日があるから、その時にプレゼントとか買いたかったからだ。

これをミキに言えば、別れることはなかつたのだろうか……

それとも、結果は同じように不合格になつていても、形だけでも勉強を少しでも頑張つていればよかつたのだろうか……

最初から、いい加減に大学受験を決めないで、そのまま専門学校希望でいればよかつたのか……

色々考えたけど、もう遅い。ここまで気付かないなんて、やっぱり俺はバカだ。

ミキのためにじたつもりのことは、結構ミキの望むようになつていなかつた。

それだけがショックだった。

ミキと別れて一週間。

俺は毎日バイトを入れて、働いているうちに、段々と立ち直つてきた。

ショックでなくなつたとか、そういうわけではないけど、確かにミキとのまま付き合つていても、これからミキは大学生、俺は専門学校生なわけで、そのうち溝ができてしまつてしまつていたんじゃないかなと思つよくなつた。

今日は、六時から居酒屋でのバイトだ。

こここのバイトは、少し時間が遅いけど、時給はそれなりにいいから気に入っている。

「いらっしゃいませー」

やつてきた客に、俺は声をかけた。

入ってきたのは、オレっぽい感じの女の人がだった。

その人は、きれいな人だつたけど、何だか暗い顔をしていて、黙つてカウンターの空いていた席に座つた。

その時は、特に何も思わなかつた。

まさか、この人の出会いが、俺の人生を左右することになるなんて、知る由もなかつたんだ。

2 最悪な出会い方（前書き）

一話目で伝え忘れていたのですが……この話は句が主人公の句の一人称なので、不意に下ネタ的発言が飛び出すことが多々あります。（何せ句ですので……）

そういうものが苦手な方は予めご注意下さい。

2 最悪な出会い方

彼女の前に、次々と空のジョッキが増えていく。

もう一時間も飲みっぱなしだ。

「大丈夫なんすかね、あの人……」

俺はカウンターの奥で肉じゃがを盛っている店長に言った。

「あの人？ 誰だ？」

「あのカウンターで飲んでる女人です。もう大分飲んでるみたい
ですけど……」

「ああ、あの娘か」

俺が指した方を見て、店長はそう言った。

「知ってるんすか？」

「いや、知ってるつうか、常連だよ。よく来るんだ。いつもは誰
かしらツレと一緒になんだが……今日は一人か。確かにいつもより飲
んでるなあ」

店長も彼女を見て、少し気にかけた様子だった。
でもすぐに、

「まあ、あんまりひどくなるよつなら止めてやつてくれ。……ほら、
持つてけ。一番テーブル」

そう言って、俺の前に器を置いた。

確かに、無茶な飲み方をする姫なんてたくさんいるから、いちいち気にもしれられない。

逆に、絡まることがあるから、苦手だ。

なのに俺は、やたらと彼女のことが気になつて、バイト中何度も彼女のことを見た。

なんか、やけ酒っぽいな。しばらく見ていてそう思った。

仕事が上手くいくとか、嫌なことあつたとか……？
いや、見る限りそんなキャリアウーマン的な雰囲気でもないし……
やっぱ、女人人が一人でやけ酒つていつたら、失恋とかかな。

と、俺はよく考えれば失礼なことまで考えていた。

でも、もし失恋つていうなら……少し親近感がわくかも……

「ビールおかわり！ あと焼酎も持ってきてー！」

彼女はまた酒ばっかりをカウンターに向かつて注文している。

彼女の前には、明らかにわざまでより大量の空きグラスやビンが置かれて、彼女の両隣の席まで広がっていた。

流石にもうヤバそうな気がする。

そう思つて、俺は彼女に近付いた。

「……グラスお下げしまーす」

「へへ、なんでもいいなり注意ができないで、とつあえずかわづこ
ながら彼女を盗み見る。

彼女は、グラスに日本酒を注ぎ、それを一気に飲み干した。

見てみると、本当につまりも料理もなく、ただ酒だけを胃に入れ
てこるよつだった。

「お酒をさ……ちょっと飲みすぎじゃないですか？」

見かねて俺は控えめにそう言った。

すると、彼女は俺の方を向いて、

「何。密に文句つける気ーー？」

そう言つて睨んだ。

俺は一瞬で後悔した。

「何よ。一人で飲んで淋しい女って思つたんでしょう？」

うわー……絡まれた。

「え……いや、そんなことは……」「

密の手前、俺はそつぱつしかなー。

「思つたんでしょう。正直に言こなさこよー。」
彼女はそつぱつして俺を解放しようとはしない。

『正直に言こなさこ』つい……

「まあ……少しだけ……」

そりや、一人で飲むのが好きそうな人じゃないし……淋しそうつて言われればそつぽいし……

そう思つて俺は頷いた。

その次の瞬間、俺は彼女に腕を掴まれた。

「ちよつと座つてー。」

もう言われ何故か無理矢理隣に座らせられた。

「あたしだつて好きで一人で飲んでるんじゃないわよ。昨日、男と別れて、しかもこついう時に限つて友達皆『デートだし……飲まなきややつてらんないつてのー!』

「はあ……」

何か……いきなり愚痴られてるみたいだつた。

「でも……酒に頼るのはよくないですよ」

「何よー……お金払つてるんだからあたしがこいつ飲もうと勝手でしょー！」

注意したのも、また睨みで返された。

「あーもひー……お金つて言つたらあの男のこいつ酔に出したじやないー……どうしてくれんのよー。」

「えつ……」

それつて言いがかりじや……

「何よあいつ！一一流だか超一流だか知らないけど、どうせ親の口
ネで会社入ったんでしょ！結局は親のお金なんでしょ！」

「はあ……」

何かよく分からぬけれど、口にほいない誰かに対しての文句が
炸裂している。

多分元彼なんだろうことは、すぐに分かった。

「もう最悪！男なんて皆女のことバカにしてんのよー。自分の方
が立場上だつて勝手に思つてるんだからー！」

「いや、決してそんなことは……」

「何様のつもりなのよー。あいつー！」

聞こいてない……。よつぱり頭にきてるみたいだ。

それから暫くの間、俺は彼女の愚痴を聞くはめになつた。

気づけば十一時をとっくに過ぎていた。

今日は十時上がりなのに、俺が席を立とうとするのを彼女は許し
てくれない。

「だつて……一ヶ月ぐらい前から何もしてこなくなつたのよ？家
に泊まりに行つても、夜、隣で寝ても『今日は疲れてるから』とか
言つて相手してくれないのよ？何かおかしいって思うじゃない。
だから昨日会つた時、最近冷たくない？ってそれとなく言つたの。

そしたらなんて言ったと思ひへ。」

「ああ……」

さつきから「んな調子で、俺にも話しがけてくるけど、何を言え
ばいいか分からなくて適当に相槌を打つていた。

「『何か、君じゅ何も感じないんだよね。もしかして、不感症?』『

うわー……元彼、言つちやつたんだ……

「はあ!? 何好き勝手言つてんのよー。いつちだつてあんまり氣
持ちよくなかったわよー。でもそれはアンタが下手だからでしょー
!』

確かに、女人にそれはひどすぎだ。俺なら絶対言わない。

「それ言つたの?』

俺は、彼女が客だといふことも忘れて（本当ならとつべバイト
終わつてるから関係ないのかもしれないけど）、自然とタメ口にな
つていた。

「言つてない

彼女は別に氣にもならなかつたらしく、そう答えて口を尖らす。

「言えよかつたのに

「言われた時はそこまで頭回らなかつたのよー。いつこうのつて後
からくるからムカツくー!』

俺の言葉に、彼女は再び憤慨して、今度は俺の腕を掴んで激しく
揺さぶつた。思いつきり揺さ振つた。

揺さぶられて、俺の体が左右に動く。

そして、彼女の方に体が傾いた時、腕が柔らかいものに当たった。

それは考えるまでもなく、彼女のおっぱいだった。

そこで初めて気付いた。彼女の、その一つの膨らみの大きさに……

自他共に認めるおっぱい星人の俺は、見るだけで女人の胸のサイズが分かる。（これちょっと血膿）

そして、彼女はE^{カッタ}は固い。

俺としたことが、迂闊だつた。目の前にこんないいモノがあつて気づかないなんて……

ちくしょりつ……もつと早くから見とけばよかつた。

「もうそれだけが心残りなの！ 絶対忘れられないわよ、あの男～！」

俺が考えてることに気付きもせずに、彼女はまだ何か言つている。

「お客さん、そろそろ看板なんだけどね。そいつもそろそろ解放してやつてくれないか」

カウンターから店長が俺達に声をかけてきた。

助け舟だらうけど……もう少し遅くなつてもよかつたのに。

「悪かつたな。今日の分、給料に上乗せしとくからよ

俺を見て店長はそう言って、調理場の方に戻つて行つた。

「マジっすか？ もう儲けた

前言撤回で俺は喜んだ。

何気に仕事してないし、しかもおっぱい大きいお姉さんと一緒にいて得した。

「んじゃ、お姉さん。お勘定……」

俺は少し気分よくそう言つて立ち上がつた。

でも、彼女の手は、俺の腕を掴んだままだった。見ると下を向いている。

「……ない」

そのまま、彼女は何かを言った。

「え？」

俺にはそれが聞き取れず、屈んで顔を覗き込んでみた。

「」

彼女は、何だか機嫌が悪そうな顔でそう言った。

「え……ちすがこちよつとそれな困ひで、お姉さん

卷之三

「いや、お姉さん！」の状態で帰るのは、惜しい……いや心配なことだけだ。

「だつて……帰つたら一人で急に現実に戻されて……絶対に自己嫌

悪じいや「つもん」

意外にも、そんな理由で俺は驚いた。

「だったら飲まなきやいいのに」「酔いながらそこまで考えて、どうなるかが分かっているのに、どうしてこんなに飲むのか、俺には分からぬ。」

「分かつてゐわよーでも飲まなきややつてらんないんだからしうがないでしょー！」

彼女は少し声を荒げて、グラスに少し残っていた焼酎を飲み干した。

ある意味、羨ましいと思つた。

失恋して、直接ではないけど、自分の思つてこることを、素直にぶつけができることができる……

俺は直接でも、別の何かにでも、そういう風にはできなかつた。

「分かつた。一人になりたくないなら、ホテル行く？　俺と……」

口が勝手に、そう言つていた。

2 最悪な出会い方（後書き）

『ダメ男依存症候群』俺は彼女に中毒症状』を読んでいただき、ありがとうございます。

執筆し始めて思ったのですが、旬って単純なようで難しい！（汗）前作は奈津美メインで書いていたので気付かなかつたのですが（仮にも作者なのに…）旬は意外と設定が多いんですね……それについて少しずつ触れようとしたら、前作より長くなつてしまいそうです（苦笑）

何かと忙しいので、更新が滞りがちになるかも知れませんが、是非とも最後までお付き合いで願います。

3 始まりは下心（前書き）

描写は控えめにしたのでR指定とこうほじではないと思いますが、エッチなシーンがあるので、苦手な人は「注意下さい。」

3 始まりは下心

『ホテル行く？ 僕と……』

なんでそんなことを言ったのか、俺自身よく分からない。

下心と言えば確かにそうだ。

田の前でめちゃくちゃスタイル（胸）がよくて、しかも顔も俺のストライクゾーンだし、そんな彼女が帰りたくないとか言い出すから、男として何も言わずに帰せるわけはない。

ミキと別れて欲求不満というのもある。

でも、店員として、客である彼女が酔つて帰りたくないとか言い出すから、いふと言えば流石に冷静になるだろ?とか、思つたのも確かだ。

何にせよ、まさか彼女が素直に頷くとは思わなかつたんだ。

「ねえ、どこのホテル行く？」

店を出て、フフフフと歩きながら大きな声で彼女は言った。

「向こうの裏道行つたらラブホいつぱーあるよー」

何気に詳しいらしい。

よっぽど酔つてゐるだけなのか、意外と乗り気なのか、彼女は自分からそう言つて俺の腕を掴んで引っ張る。

俺を誘導するみたいに引っ張つてはいるけど、千鳥足で歩き方が真つ直ぐでなく、すぐによろめいて、転びそうになつた。

「大丈夫ですか？」

俺は彼女の体を支える。

「うふふつ。だーい丈夫ー」

さつきまで酔つて怒つていたのに、今度は笑つてゐる。

面白い人だなあつて、この時は思つた。

「うふふつ。早く行ーーー

彼女は笑いながら俺の腕にしがみつくよつとして体をくつつけ歩き出した。

そうすると……おっぱこめちゃくちゃ当たつてますけど、いいんですか！？

裏道を抜けると、彼女の行つた通り、所謂ホテル街に出た。

「どこ行こつかあ

彼女がキヨロキヨロ辺りを見回して言つたのも、今の俺には左から右に抜けていく。

そんなことより、俺の腕に密着状態の感触にばかり神経が集中してしまった。

「あ、あのホテル可愛いーー！」

そう言って彼女がま指差したホテルの看板には、

『ホテル キヤツツ』

その下には、スマートな黒猫の絵もかかれている。

洒落たデザインの看板だけど、やっぱりホテルがホテルなだけに、いやりしく見えるのは気のせいだろうか。

「キヤツツって、一ヤン一ヤンするからなのかなあ？」
そう言って彼女は俺を見上げる。

さうひと下ネタ言つたな、この人……

「そりなんすかね」

俺は答えて、彼女を見た。

俺を見上げる彼女の顔は、予想以上に可愛いくて、不意を衝かれて余計にドキリとしました。

「じゃあ行こーー」

そして引つ張つて行かれ、俺らは『ホテル キヤツツ』に入つた。

キャッツといつが前のくせに、他のホテルと大して変わりなく、名前なんて関係ない雰囲気だった。

「ホテルつて久々。ベッド大きいーー！」

部屋に入つて、彼女はやたらとテンション高くて、中央にあるベッドにダイブした。

その瞬間、彼女のスカートの裾が捲れた。

ピンクに白レース……

見せちゃつてもいいんすか！？

「ん~……」

彼女は、ベッドの上でじろじろ寝返りを打つて俺に背中を見せる。

見るからに、無防備なその姿……（おまけで太ももの際どいラインのチラリズム付き）

俺は、ベッドに片膝をそつとついて、彼女に近づき、手を伸ばした。

「あ

突然彼女の体が起き上がり、俺は驚いてはねのいた。

「シャワー浴びないと。あたし先に浴びていいく？」
俺に振り返り、彼女はそう言った。

「うへ、あへ、ハイ！」

俺は狼狽えて言葉を噛み、声を裏返しながら頷いた。

「じゃあ行つて来まーす」

彼女は、ベッドから下りて、鼻歌混じりに風呂場に向かった。

彼女が居なくなつて、俺は頭を抱えた。

俺……今、普通に何しようとした？　ていうか、何でここまで来ちゃつたんだ？

いや、でもあんな風におつきでおつかしくつけて引っ張られて、ふりほどけるか？

無防備でもじゅう血肉にびびり的にパンツとか足とか見せられてい、手が伸びないなんて有り得るか？

男なら、それも健全な男子なら、じつもへーだ。そのはずだ、多分。

て、ことは、だ。

ひつなからには、欲情するのが当たり前だ。それが自然の理！　何も恐れることはない（はず）！

「おまえがいたい、やめないとまづかない。

しかも、相手も「承してゐみたいだし……」ソレやうなきや男が廢るつてか！？

……と、考へていると風呂場のドアが開く音がした。

そつちの方を向くと、バスローブに濡れ髪で、さつきまで着ていた服を持っている（ちらりと下着類も見えたから、多少下はマップだ）彼女が現れた。

「お先に出たよ」

髪を拭きながら彼女は俺に向かって言つ。

化粧がシャワーで全部落ちて、彼女はスッピンだった。でも、『誰！？』と言つぽどの大差はなくて、印象が少し幼くなつたつて感じだ。

それもまた何か可愛くて、またもや俺はドキッとしてしまつた。

「あ、シャワー浴びて来る？」

「え！？ …… あっ、はい。浴びます」

俺は必要もないのにやたら畏まつて、敬語で頷いて、風呂場へと行つた。

頭から熱いお湯を浴びながら、俺はうなだれた。

何か俺……やたらと緊張してる。

まるで、初めて彼女が出来た時みたいに、初めて彼女とキスするときみたいに、初めて彼女とセックスする時みたいに……

でも、言こぬよれば、こんなことだつて初めてだ。

俺は、ラブホなんて付き合つてゐる彼女としか来たことがない。（普通そただけど）もちろん、セックスもするのは彼女とだけ。付き合つてもない女の子と、一晩きり、一度きりの関係なんて持つたことはない。

なのに今こゝに一緒に来てしまつたのは、今日初めて会つた女人で、しかもバイト先の常連さんだ。

普段ならまだ理性がきくのに、今晚に限つてやたら興奮してゐるみたいだ。

どうしてなのか、全く分からない。

体をさつと洗い、俺は風呂場を出た。
脱衣所にあつたバスローブを着て部屋に戻ると、彼女はさつきと回じみつて俺に背中を向けてベッドに横たわつていた。

寝ちゃつたのか……？

俺が出たのに全く反応を示さないので、俺は初めそう思つた。

俺は、さつとベッドに乗り、彼女のそばに寄つた。

もし寝てしまつたなら、間違が起きる前でよかつたと思つたけど、残念がつてゐる自分がいるのも確かだ。

本当にどうかしてゐる……

彼女を覗き込んでみると、田をつぶしていく、やつぱり寝ているようだった。

胸元が少し開いていて、谷間が見える。裾からは、白い足がむき出し状態になつてゐる。

無防備全開の、その姿を見て、俺はもう生殺し状態……着々と、体の方の準備ができきつゝある。

無意識に……言い訳じゃないけど、本当無意識に、俺の手は彼女の方に伸びていた。

男としての悲しい性……やつぱり、俺はこんな状況で我慢出来るほど、大人でも紳士でもない。

俺は彼女の腰のあたりから、体のラインをなぞつた。

ウエストはキュウツとしまつていて、それでいてやつぱつおつぱいとか、お尻の方は柔らかそうに膨らんでる……

理想的な女の人の体型……

「ん……」

俺が触つてゐるのに気付いてなのか、彼女はゆっくりと田を開いた。

一瞬ヤバいと思つた。それぐらい、俺はやましいことをしているんだ。もし、彼女が我に返つて冷静になつていたら……

しかし、彼女は仰向けになつてトロンとした目で俺を見ると、とても優しく微笑んだ。

もう我慢の限界です。

俺は、バスローブの上から彼女の胸を触った。

彼女の体は、ほんの少し反応したけれど、抵抗はされなかつた。

そのまま俺は彼女に覆い被さつて、彼女にがつついてしまつた。

おっぱいは俺の手でも余るくらいの大きさで、肌が綺麗ですべすべしていくて、揉むとマシコマロみたいに柔らかかつた。

すぐに乳首は固くなつて、それを指で触るたびに、彼女から小さな声が聞こえた。

そういうえば、元彼に不感症つて言われたつて言つてたけど本当にそうなのかな……

変に興味がわいて、俺は彼女の下半身に片手を伸ばした。

「あっ……」

内ももに手が当たつただけで、彼女の体がピクリと動いた。

俺はそのまま手を滑らせて、女人のアソコに触れた。もうそこ

はじつとつとしていて、手を動かすとビニール濡れてくる。

「や……ダメ……あつ……」

彼女から、一際大きな声が出る。彼女の一番弱い所を見つけた。

「いやつ……んつ……」

彼女は眉間に皺を寄せ、唇を噛み締めて俺の下で体をくねらせている。

その顔が、その動きが、とてもセクシーで、それだけで俺の臨界点は突破してしまった。

俺は、彼女と一つになつて、情けないくらいにあつといつ間に果ててしまつた。

一通りのことが終わつた後、ほぼ同時に果てた彼女の荒い呼吸が、俺の耳元で聞こえる。

俺が彼女の上で動いていると彼女の腕が俺の首に回つて、必死にすがりつくように抱き締められた。

すぐに果ててしまつたのは、その状態で耳元で色っぽい喘ぎ声を聞いていたから、余計に興奮してしまつたものもあると思つ。

そして今も、彼女の腕は俺を離さず、まるで恋人同士のようにタリとくつづいている。

耳に彼女の熱い息がかかつて、俺はまたも興奮して、その気にな

れば、もう一回出来そうだ。

本当じどうかしてる。

俺は、いくらタイプの女人の人でも、彼女じゃない女人には欲情したことなんてなかったのに……いくら今は彼女が居ないからと言つても……どうして今日は、こんなに興奮して、やつちやつたんだらうひ……

俺はそつと彼女の腕を解くよひにして、体を起しやうとした。

彼女の腕は、いとも簡単に解けたけど、今度は彼女の手が、俺の首から滑つて顔へ行く。

そのまま俺の顔を、彼女の両手が挟むよひ、するりと撫でられた。

今度は一体何なんだろうか。

わけも分からず、そのを外そとも出来ないで、俺は彼女を見下ろした。

え……？

そう思つた時には、彼女の顔が近付いてきて、俺の唇を塞いでいた。

しかもそれは、とても濃厚なもので、彼女が積極的に舌を俺の口の中に入れて、動かしている。

口の中の隅々まで、彼女の舌が舐めまわして、舌を絡められて、音を立てて唇を吸われた。

俺は、まさかそんなことをされるとは思わなくて、呆然と固まって、彼女にし返すこととか出来なくて、されるがままになってしまった。

しばらくそうされた後、彼女はゆっくりと唇を離した。彼女の唇は、濡れて光っている。

思わず見とれていると、彼女の唇はゆっくりと開いた。

「ねえ……名前、なんていつの？」

一瞬何を聞かれたか、分からなかつた。

「え……」

「あなたの名前……何？」

「え……あ……匂。沖田匂」

自分の名前を言つだけなのに、ビヨリもつてしまつた。

俺の名前を聞くと、彼女再び、微笑んで、

「匂……匂……」

そう言って、俺の頬を撫でた。

「匂が……あたしの彼氏だつたらよかつたのになあ……」

ポツリと呟いたその言葉に、胸の奥がわくわくと締め付けられた。

「あっ……あなたは……」

ちゃんとした言葉で、彼女の名前を聞き返したいのに、もじかしごくろいに、上手く話すことができない。

でも、彼女は分かつてくれたみたいで、ゆくべつと口を開く。

「あたしはね……ナシ!!」

彼女の目が段々とトロソントしてきて、声も小さかった。

だけど俺は、聞き逃さなかつた。

「ナシ!! セニ?」

「ん……」

ナシ!! セニは、返事をしてくれたかどうか微妙な声を出して、目を閉じてしまった。

俺の頬からもするりと手が滑つて落ちた。

「ナシ!! セニ?」

返ってきたのは、ゆうくじとした寝息だった。表情も無防備なほどに優しくて穏やかだった。

ヤバい……

気付けば俺は、目の前のこの彼女に、恋に落ちてしまっていた。

4 運命の人

おかしいって思つんなら、勝手に思つておけばいい。
俺だつておかしいと思ひ。

だつて、ミキと別れてそんなに経つてないのに、こんなにすぐこの
好きな人ができるなんて、思いもしなかつた。
しかも、その相手は、今日初めて会つて話をして、お互の名前
を知る前にホテルでヤッちやつた人だ。

それに今だつて、彼女は『ナツ』としか言わなかつたからフル
ネームは知らない。

それでも俺は、彼女に恋してしまつた。

別に、ヤッちやつたのが先だつたからつて、体当つてわけじ
やない。

そりや、スタイルはめちゃくちや俺好みではあるけど。

でも、顔とか、スタイルだけではなく、ナツの存在そのもの
が、悉く俺のツボにハマつていた。

今まで、彼女以外の女の子とやるなんて、無意味としか思えなか
つたのに、ナツさんは最後までできたのは、俺自身気付かない
ままに、ナツさんに惹かれていたからだと思ひ。

ぶつちやけ、一田惚れ？ いや、一田ではないか。

でも、ナツミさんは俺の『ストライクゾーン』なんじゃなくて、『超じストライク』。

野球で言つなら、ノーヒットノーラン。ワールドゲームで完封勝利。

ボーリングで言つなら、パーフェクト。

それぐらいだ。自分で言つて意味分かんないけど。

とにかく、ナツミさん以上の人には、俺のこの十八年間の人生に現れなかつたし、これからも現れないと、直感的に思つたんだ。

この気持ちに気付いたのは、あの瞬間。

『旬が……あたしの彼氏だつたらよかつたのになあ……』

そう言われたのか、単純に嬉しかつた。

あの言葉は、俺を受け入れて俺を必要としてくれたものだつたか
んや……

そういう風に、誰かに必要とされることがこんなにも嬉しいこと
なんて、思いもしなかつた。

そして、それ以上に、あの瞬間から俺にとって彼女が必要な存在
となつてしまつた。

欲しくて欲しくて、たまらないよ。ナツミさん……

「ナツミさん、起きた?」

翌朝、田を覚ますと、ナシ//さんのが先に起きていたので、俺は体を起こしながら声を掛けた。

やつぱつ、昨夜久々にやつたせいでの体がだるい。

「何で名前知ってるの……？」 ていうか、誰？」

ナシ//さんは、シーツで裸の体の前を隠そとしながらやつぱつた。

別に隠さなくとも、昨夜全部見たのに。

それよりも。

「ナシ//さんから聞こてきたのに？」 もしかして俺の名前覚えてないの？」

やつ聞いたら、ナシ//さんは黙つて頷いた。

軽くショックだった。

やつぱり、ナシ//さんは酔つてたし、覚えてないのか……

あの嬉しい言葉を听つてくれたのも……覚えてないことが……

でも、昨夜は余裕なくかつてしゃべった感じだから、よかつたっていえばよかつたかも……

「…………てこうか、私達…………やつひやつたの？」

俺は、昨夜のことと思つて出す。

「うん」

思い出すと、自分でも分かるぐら、いやになってしまった。

「すっごー良かつたよ。ナシ//さん、めりもへりもスタイルいいし、感度最高だし。不感性とか言つた男、バカたなあ」

本当、バカだよ。不感症はお前じやん。
ナシ//さんは、お前が思つてるより、ずっと魅力的な人なんだか
う。

「ナシ//さんも気持ち良さそうだったし、やっぱ下手だったんだよ。
元彼と別れて正解じやん」

「うう……うんなさいー。」

「わなり、ナシ//さん」謝られた。

「なんか酔つて迷惑かけちゃつて……」

そう言いながら、ナシ//さんをベッドの下の方にあつたバスローブ羽織つた。

「う、料金は払つから……本当に」「うんなさいー。」

「待つて」

ベッドから降つてひとしきり手首を、俺は掴んでいた。

「え……？」

「ナシ//さん。俺と付き合つて」

俺は、考える前にそう言っていた。

多分、本能的にここで言わないといつて思つて、口が動いたんだ。

「え？？」

ナシ//せさま、元々せつせつしてゐ田を、更に大きく見開いていた。

「順番逆になつたけど……でもそのおかげで惚れたりこうか。だから俺と付き合つて」

『惚れた』とか、めつたに口に出したりしないから、ちゅうと変な感じだつた。

でも、俺の気持ちは、その言葉通りのもので、この言ひ方が一番しつづける。

「何言つて……」「

ナシ//せさまは固まつていた。

そりや確かに、わざとナシ//せまことつては、こんな状況で、初対面同然の男にこきなり告られても、困るだけだと思つ。

それでも、ナシ//せまに俺の気持ちをちゃんと伝えたかった。軽い気持ちじやなくて、真剣なんだつて、分かつて欲しかつた。

「俺と付き合つて下わーーー お願ひします」

俺は、きちんと正座して、ナシ//せまに頭を下げた。

俺なりに考えた、誠意の込め方、……ナシ//せまに伝わつて欲しいところ、そんな気持ちだった。

「ちよつ……やめて。顔上げて……」

ナシ//せまの言葉にも、俺はそのままでいた。

「やだ。ナツ//わざがいいつて黙つままで」のままではいる

後で思つたことだけど、『れじや あ誠意を表すつてこりより、た
だの迷惑行為だったかも……』

その時は、そんなことを考える余裕なんてなくて、必死だつただ
けだけど。

「そんなこと言われても……ねえ、とつあえず一回顔上げて?」

何を言われて、肩を揺すられたりしても、俺は頭を上げなかつた。
俺が待つてるのは、『『いい』つていう言葉だけ。

『『いい』つていう……

「ねえ、もうこいから

俺はすぐさま反応して、頭を上げた。

「いいの?」

本当に、ナツ//わんと付き合はるの……?

ナツ//わざが、俺の彼女……?

「やつた――――!」

どうしようもないくらい嬉しくて、俺はナツ//わざに抱きついた。
勢い余つて、倒れ込んでしまつたけど、気にしない

「あやー。やだ。やべりやなくて……つんー。」

ナツニアが何か言っているのも、俺には聞こえてなくて、俺は夢中でナツニアにキスをした。

「すうー嬉しいー。ナツニアさんが俺の彼女になるなんて、口離を離してそう言つと、何だか違和感があつた。

「あ、付き合つんだつたらナツニアさん付けてやなくていいか。ナツニア。なあ、ナツア呼んでいい?」

付き合つさなら、呼びやすいように呼びたい。俺は愛称を考つてじうほひねりないけどえた。

「うん……」
ナツニア……いや、ナツは頷いてくれた。

「ナツー

嬉しさとナツへの愛情（何か恥ずかしつ）を込めて、俺はナツの口とか、おでことか、ほっぺたに、たくさんキスをした。

今、俺の下にいる人が、俺の好きな人だと、それが彼女だと思つたら、とても變しく思える。

昨日の今日でそうななるなんて、不思議だ。

「のままナツを抱き締めて、また、一つになりたい。そう思った。

「あー。」

ナツはこきなり叫んで、勢いよく起き上がった。その拍子に、俺の体が離れる。

「今何時！？」

ナツはベッドの側に付いていた時計を見る。

八時三分だった。

「嘘つ……もうこんな時間なの！？ 仕事行かないといつ……」

ナツは慌てた様子でベッドを降りた。

「あたしの服どこー？ とか、あつ、どうしよう、スッピンだ〜…とか言いながら、ナツは部屋を駆け回っている。

俺は拍子抜けして、呆然とその様子を見ていた。

「『めんねつ……お金ここに置いておくから……』

急いで着替え終わったナツは、電話台の上に万札を置いて、部屋を出て行った。

俺は一瞬お金の意味が分からなくて、でもすぐにホテル代のことだと理解した。

止める隙もなかつた……なんか、いきなり現実戻されたよつだ。

「あ……」

俺は、重大なことに気付いた。

一番大事なことを、忘れていた。

俺は、彼女の連絡先を知らない。

5 僕の彼女

忘れてたつていうか、聞く暇がなかつたといつか……何にせよ、失敗だ。

普通、有り得るか？付き合つ始めた彼女の連絡先を知らないで別れるなんて……
有り得ねーつての。

マジでどうしよう。これじゃあ、もしかしてもう会えないんじや……

ウソだろ……？

ちょっと待てよ。何、付き合つて始めて五分ちょいで自然消滅？
短すぎだろ。いや、長さの問題じやなくて……

これつて、結構危機的な問題なんじや……

どうしよう……

とりあえず、そろそろ終つて時間になるから、俺はベッドから下りて服を着よつとした。

ふと電話台の方に目をやると、彼女が置いて行つたお金に目が行つた。

一万円も置いて行つてゐる。俺も出すから、こんなこいつないの

ていうか、ナツもこうのまじっかりしてること、連絡先のこととかは全然頭になかったのかな……

やっぱり、付き合ってくれるのは、しょうがなく、なのかな……

俺は、ため息をついて、下を向いた。すると、そこにあるものを見つけた。

それは、白い携帯電話だった。

これってもしかして……ナツのケータイ？
お金出す時に落として、気づかずに行っちゃったとか？

俺は、とりあえずそのケータイを開いてみて、このケータイの個人ナンバーを出してみた。

『柏原奈津美』

その名前が表示される。

やっぱり、ナツのケータイだ。

ていうか……名字柏原っていうのか。名前も漢字で書くとこういう字なのか……。

うん。結構イメージぴったりかも。
あ、登録しどこ

俺は赤外線で（勝手に）ナツの番号とメアドを俺のケータイに送

つて、ナツのケータイにも（勝手に）俺の番号とメアドを登録しておいた。

……て、登録したところで結局は連絡の取りよづなこじやん。

ホテルを出で、とりあえず家に帰りながら、俺は今更なことに気が付いた。

いや、でもナツだつてケータイなかつたら困るだろ？ 俺が持つてたらまだ会える可能性はあるだろ。

「ただいまー」

家に着いた俺は、玄関で靴を脱ぎながら、いつもの面倒でそつ言う。

「あら、匂。今帰つたの？」

ちよつど母親が廊下掃除をしていて、俺に声をかけてきた。

「遅くなるのはいいけど、電話の一つでもいれなさいよ

俺は適当に返事をしながら家に上がった。

「へいへい

つちは基本的には自由だから、朝帰りなんしても全然平氣だ。何も言わなくてもこの程度だし、『今日は帰らない』とかだけでも

ちやんと連絡したら本当に何も言われない。

「あ、匂。あんた専門学校の願書とかちやんと書いてるの? ギリギリになつて忘れてたなんてやめてよ」

言われてその現実的なことを思い出した。
すっかり忘れてた。

「うん。大丈夫だつて」
そう言って、俺はリビングへ行き、朝飯に菓子パンを二つ持つて、自分の部屋に行つた。

現実的なことで言えども、今俺の中で一番大事なのはこいつだ。

ベッドの上にナツのケータイを置き、パンを頬張りながらそれを見つめる。

また会える可能性はあっても、問題はそのきっかけがないんだよなあ。

やっぱこいつからには連絡の取りようがないわけだし。

「あーあ……やっぱ待つしかねえのかなあ……」

独り言を言いながら、俺はケータイの隣に寝こんだ。

すると、ちよつと腹も満たされたこともあって、俺はすぐに眠り込んでしまつた。

次に目が覚めたのは、時間はいつか分からなかつたけど、ケータイが鳴る音でだつた。

鳴つてもそのままにしていても、なかなか鳴り止まないから、ケータイのようだ。

俺は、目を閉じたまま手探りでケータイを取つて、開いて通話ボタンを押して、耳に当てた。

「はい？」

いつもと違う着信音に、いつもと微妙に違う勝手で、何かおかしいとは思つたけど、寝ぼけていたせいで、それに気付いたのは電話の向いの相手の声を聞いた後だつた。

「あの……その携帯を落とした者なんんですけど……」

一瞬で目が覚めた。

俺は体を起こし、電話を耳から離して見た。俺が出たのは、ナツのケータイだ。画面の着信は、『三枝カオル』になつている。

でも、電話の向いの声は、間違いなくそのナツ本人のものだつた。

「もしもし……もしもし……？」

「あっ……『めん、ナツ』

俺は慌ててケータイを耳に戻す。

「え……？　えっと、誰ですか？」

ナツの混乱したような声が聞こえる。
あ、そうだ。ナツには俺だって分かつてないんだ。

「俺。匂だよ」

「え……あ……朝、の？」

ナツの声は探り探りな様子だった。
やつぱりまだ付き合い始めだし、しょうがないか。

「うん。やつぱり落としてたんだ……ビームに落ちてたの？」

俺は、とにかくナツとまた話せたのが嬉しくて、口が勝手に動く
ぐらいの勢いで、ナツに話し掛けた。

「あ、やつぱり落としてたんだ……ビームに落ちてたの？」

ナツが俺の言つたことに食いつくような反応でそれだけで嬉しか
った。

自分のケータイのことだから、当たり前だけビ。

「ホテルの部屋の電話台」と。多分、ナツが財布出した時にでも
落ちたんだよ」

「そつか……」

「なあ、ナツ。今ビームにいるへー」

「え……会社だけど……」

「どうの？　俺、届けに行くよ」

もうらん、これはナツに会いたいってだけの口実だ。
まあ、どうちこむる余がないといけないし。

「え……いいよっ！　一応まだ仕事中だし……」

「じゃあナツの仕事終わったぐらいに行べよ」

「でも……」

「氣を遣つてるとか、ナツはなかなかうんと言つてくれない。

「いいつて、全然。俺、暇だし。ていつか、俺が会いに行きたいんだ。ナツに。それじゃダメ？」

正直、ケータイを届けるつてことより、そつちの方が重要だから、
俺は素直にそう言った。

「えっ……」

ナツは驚いたような声だった。

「だめ？」

「さうこうわけじや……」

「じゃあ、いい？」

「う……うそ」

「やつたー。んじゃどう行けばいい？」

「えっと……会社は つてと。××町のところなんだけ分か
るへ。」

××町……あのへんか。家からそんな遠くないな。

「うふ。分かつたー。何時頃終わる?」

「五時ぐらい……」

「オッケー! んじゃ会社の前で待ってるなー。」

「うふ……あ、そろそろ戻らなこと」

「あ……そっか……」

せっかく連絡できたから、本当まつと話したいけど、我慢しないとしようがない。

「じゃあ、仕事頑張って。また後でな

「うふ。また……」

電話を切つて、時計を見ると一時前だつた。

まだ四時間もある。早く会いたいな。

その時ちょうど、腹の虫が鳴つたから、俺はとつあんぱす丼飯を食べリビングへと行つた。

今、四時二十七分。

俺は、ナツの会社の真ん前にいる。

本当は五時十分前ぐらいにここに着けばようじいぐらいだけど、それまですることができ過ぎて、早くに家を出てしまった。

ていうか、ナツに会いたいと思つたらいてもたってもいられなかつたんだ。

まあ、俺が早く来たってしうがないのは分かつてるけど。

本当に、いつも時の時間が経つのは遅い。さつきから、一分に一度ケータイで時間を見る。

待ちきれなくて、中に入つてみようかと思つたけど、警備員らしき人がいて（しかもかなり顔が恐い）、社員証かなんかがないと入れないっぽいから、近寄るに近寄れない。

そもそも入っちゃいけないのは分かつてるけど。

俺は、会社の前の歩道と車道を区切るガードレールにもたれかかって、時間が過ぎるのを待つた。

俺は目の前のビルを見上げて思った。
それにしても……でかい会社だなあ。

よく考えたら、社つて聞いたことあったかも……俺でもきこ

たことがあるんだな、結構有能つてことだよな。

ナツは「こんなす、『コトコト』で働いてんの？」

「あつ……」

色々考えてるみたいに、やつと時間が過ぎてくれたたらしく。
会社の中に入っているナツを見付けた。

ナツは、早足で歩いて出入り口に向かっている。俺もそれに合わせて、ガードレールから離れて、ビルに近寄った。

「ナツ！」

ナツが出てきたと同時に俺はナツを呼んだ。
ナツは、すぐに反応して俺の方に向いた。

「仕事お疲れ！」

「あ…………うん」

ナツの田の前に立つてやついた俺に対して、ナツは少し緊張した表情だ。

「あ、そうだ。はい。ケータイ」

俺はGパンのポケットからナツのケータイを出して、ナツに差し出した。

「あ、ありがとう」

ナツはケータイを受け取る。

「何か、じめんね？ わざわざ来て貰つたやつ……
ナツは俺の顔を見上げて微笑んだ。

その顔が可愛くて、俺はときめいた。

「ううん……全然……言つたら？ 俺、暇だから
思わず興奮して、声が強くなつてしまつ。

「それよつ、ナツ。今日はもう帰るの？..

「うふ。ナツだナビ……」

「じゃあ、送りへべー

「えつ……そんな……ここよつ……わざわざいろいろ来て貰つてる
のこ、そこまで……」

ナツは首と手を横に振つて断つてきた。

軽くショックを受けた。

一応、付き合つて始めたはずなのに、やつぱつ、ナツはちよつと遠
慮ぎみな感じだ。

それでも、口ひで引いたら負けだ。

「送るよ。もう暗いんだから女人は危ないし。……で、いつか、俺
が送りたいだけだけどさ」

俺は気持ちだけほんの少し強めにそう言つた。

「…………じやあ、うん。お願ひしよつ……かな
ナツは、急に下を向いて、小さくそう答えた。

よし！ と、俺は心中でガツッポーズをした。

俺達は、並んで歩き始めた。
やつと形だけでも恋人っぽくなつた。

「あ、そうだ。ナツのケータイに俺の番号」とメアド入れておいたか
ら

念のため（ていうか、言わないといけないことだけ）俺はナツ
にそう言つておいた。

「え……あ……そつ」

ナツは、微妙な反応をする。（そりやそつか）

「ナツって名字柏原っていうんだな。昨日は下の名前しか聞いてな
かつたから今日初めて知った」

空氣を悪くしないように、俺は必死に取り繕つたように話をした。

「…………うん。ねえ…………あの、匂君？」

ナツが俺の方を見て、話し掛けてきた。

「なに！？ なになになにー？」

俺は嬉しくて、必要以上に食い付いた。

「あの、あたしは……匂君の名字知らないんだけど」

ショック……

俺、昨日フルネームで名乗つたはずなのに……

いや、でもナツは昨日のこと覚えてないっぽいんだった。朝なんか『誰?』だったし……

「沖田だよ。沖田旬」

ショックなことは置いといて、俺は笑つてそう答えた。
今は知らないことの方が多いくんだし、これくらいごめんなさい。これから、知つていつて貰えればいいんだかい。

「沖田、旬君……？」

確認するよついで、ナツは俺を呼んだ。

「うんー。」

俺は頷く。

どうしてだろ?……。

ただ名前を呼んで貰つたってだけなのに、しかも名前を忘れられて、覚え直されただけなのに、それがすごく嬉しい。

「ねえ……旬君って、年いくつなの?」

ナツにそう聞かれた。

ナツの方が俺に興味を持つてくれてるみたいで、それもまた嬉しいかった。

「俺、十八だよ」

思わずにはげながらさう答えると、ナツの表情は固まっていた。

「十八……? つてことは高校生?」

ナツの顔は引きつっていた。

もしかして、年下って引かれてるのかも……

「今はまだそうだけど……でも今月で卒業だから。今年十九になるんだ」

俺も意地で、もう高校生じゃ……子供じやないつてことを少しでもアピールするよつて言つた。

「やつ……」

でもやっぱり、それぐらいのことドナツの俺に対するイメージが変わるものない。

「ナツは？」

俺は、気にしないよつて話を進めた。

「え？」

「ナツはこくつなの？」

女人にこんなことを聞くのは失礼かとも思つたけど、彼女の年を知らない今までいるわけにもいかないと思つてそう聞いた。

「あたしは……今、二十一」

少し声が小さかつたけど、ちゃんと聞こえた。

今二十一つてことは、俺と四つ差か。

うん、全然オッケー。俺的には全然いける。ナツなら俺のこくつ上だらうが下だらうが関係ない。

愛さえあればそんなん関係ない！

「でもナツってすげーよなあ。　社つていつたら結構有名じゅん。

そんなとこで働いてるとかビックリした」

俺は、色々話したいことがたくさんあるから、思いついた順に話す。

「ううん。そんな、すここつて言えるほどのことはないよ。　つて、すごいのは本社だけだから。うちの会社は支社だし……それにあたしだって事務の仕事だから雑用ばっかで全然大したことないの」
ナツは大したことないって言つけど、俺からしてみれば十分すごいと思つ。

一流だろうが二流だろうが、ちゃんと就職して稼ぐなんて、今の世の中じゃ難しいんじゃないかな。

それに、よく見たらナツって服とか、鞄とか……キレイなもんばつかだし……わりと稼いでるんじゃないかな?

ホテル代とかすつと二万も出せるぐらいなんだし

「あつ！」

そこ今まで考えて、俺は重要なことを思つ出す。

「どうしたの？」

いきなり俺が叫んだから、ナツは驚いた顔をしている。

「こんなとこで悪いけど、俺、ナツに金返そうと思つてたんだ」

「お金……？」

ナツは首を傾げる。

「ナツ、今朝一萬も置いてつただる？俺、半分出したから、その
残り」

俺はGパンのポケットから財布を出した。

「あ……ああ……」

ナツは思い出したよひに頷く。

「はい」

「ありがとう」

俺が渡した一万数千円を受け取ると、ナツは鞄から財布を取り出して、金をしまった。

その財布も、俺でも知ってるようなブランド物のものだった。

俺は思わず自分のと見比べる。

俺のは、三年ぐらい使い古してゐる、当然のよひにホームブランドのもの。確か、三千円ぐらいだったと想ひ。

全然違うじゃん。

……もしかして、俺ってナツより大分レベル低い？

ただでさえ、ナツより年下なのに……

ちよつと俺、専門学校とか行つてゐる場合じゃないんじゃ……

働くねえと！

漠然とそう思った。

ナツより稼ぐとか……それは出来なくてもせめてナツに釣り合つ
よつこなんねえと……

「ねえ、旬君」

「何ー?」

ナツが俺を呼んでくれるとこつだナで、俺はすぐさま反応する。

ナツはちょっと皿を丸くしながら、

「旬君は、春から大学生?
そう言つた。

「つうん。働く」

俺は即答する。つこせつき決めたばつかのことだけじ。

「一応受験はしてたんだけど、全部落ちたからそ。浪人とかしてたら金かかるし」

俺はそうナツに言つておぐ。

本当の理由なんて、じつぱずかしくて言えないと。

「そつかあ……」

ナツは俺の言つたことに納得したよつに頷いた。

あ、俺達、普通に会話できんじやん。

ナツの方から結構話ふつてきてくれるし……しかも俺がらみのこ
とだし?

全っ然心配ないじゃん。むしろ、絶好調なくらいだし

「あ……旬君」

早速きた！ 再びきた！ ナツの方から話題くれた！

「なになに？」

俺はまたもや嬉しくて速攻で返事をする。

「あの……変なこと聞くけど……お昼に、あたし電話したじゃない？ あたしのケータイに。その時、あたし友達のケータイからかけたんだけど……何であたしだって分かったの？」

俺は昼間のこと思い出す。

そういえばあの時の着信つて、違う人の名前だつたっけ……

「うん。初めはさ、寝ぼけて自分のケータイが鳴つてると思つてとつたんだよ。俺あの時寝てたから……でも分かるよ。ナツの声だから。あの時、一番聞きたいって思つてた声だったからさ」

自分で言つて、ちょっと照れた。ていうか、恥ずかしつ……

「何言つてるんだろうな、俺……」

さすがに引かれたら困ると思つて、俺は笑つてしまかそつとした。

ナツの反応を見てみると……

「あれ……ナツ？」

ナツの顔は真っ赤になつていた。

「く……変なこと言わないでっ……」

ナツナツと軽く口を開いて恥ずかしそうに下を向いた。

横を向くと、耳まで真っ赤になっているのが分かった。

その様子は、俺のツボに見事に、直撃した。

可愛すぎる……反則技だつて、それは……

今すぐでも、抱きしめたい衝動にかられる。

思いつきつ抱きしめて、頬ずりして、色々なところで回したい……！

「あ、あたし……だから」

俺が自分と闘っていると、ナツがそう立ち止まる。

そこは、マンション……ところが、コーポってこののか。五階建ての建物の前だった。

「……？」

「うそ。ここ三階」

もつ着こなやつたのか……

「船屋まで送るよ」

「ううん。大丈夫。いこよ、いじいで」

俺としては、あと数秒でもナツと一緒に居たかったから言ったのに、ナツは首を横に振った。

「そつか……」

しつこく言ってウザがられるのも嫌だったから、ここは素直に引いておいた。

「あとで電話していい?」

俺的に控えめにそつと、ナツは何でかまた赤くなつて、

「うん」

と頷いた。

理由はわかんないけど、それ可愛すぎですかーー!

「それじゃあ、ね。送ってくれてありがと」

俺がまた抱きしめたい衝動にかられていふと、ナツの方からそう言われた。

「あ、うん。じゃ……またな」

やつぱり少し名残惜しく、言葉を交わすと、ナツは「一ポの中に入つていった。

俺はそれを見届けると、家に向かつて歩き始めた。

ナツは、可愛すがれる。いや、本当に、マジで。

今日一日で、しかも付き合って始めて一日目で、ナツの「ことをほんの少ししかしないことが出来なかつたけど、俺の中のナツへの気持ちは、ものすごく膨らんでいた。

それでもまだ足りないくらいに、俺はナツのことを知りたいと思つていた。

こんな気持ち、初めてだ。

6 新しい彼氏（奈津美サイド）前編（前書き）

旬のサイドストーリー……ではありますが、せつかくなので、奈津美視点の話も書いてみました。（こつちは奈津美の一人称です）長くなってしまったので前後編に分けます。

6 新しい彼氏（奈津美サイド）前編

意味も分からぬ「ひめ」、あたしには新しい彼氏ができてしまつたらしい。

それは、今、あたしの上にいる、名前も知らない男。

彼は嬉しそうに、あたしに何度もキスをしてくる。

普通なら、名前も何も知らない男にこんなことされたら嫌悪感で一杯になるだらうけど、どうしてかこの時は、抵抗しようとか想わなかつたし、嫌な気分にもならなかつた。

それどころか、そうされたことが妙に心地よくて、落ち着いていた。

こういつ風にされるのって久しぶりかも……

あいつ（元彼）は、全然こんなことしなかつたし……

……って、元彼のことを思い出したら、ものすごく嫌な気分になつた。

最悪……もつあんな男のこと思い出したくないのに……

あんな男つ……できるのは仕事ぐらにじやない！

……仕事……？

「あつー！」

あたしは叫んで、体を起こした。

「今何時！？」

あたしはベッドの側に付いていた時計を見た。

八時三分……

「嘘つ……もうこんな時間なの！？ 仕事行かないといつ……」

『仕事』で重要なことを思い出した。
今日は思いつきり平日。出勤しないといけない日。
それに、いつもなら、もうとっくに家を出てる時間だ。

あたしは急いでベッドから降りた。

「あたしの服どこー？」

部屋を駆け回りながら、あたしは自分の服を探した。
昨夜の記憶がないから全く分からない。

でも、幸いすぐにハンガーにかけてあるのを見つけて、あたしは
すぐ着替える。

着替え終わって、ふと近くの鏡を見ると、自分の顔が映った。

「あつ、どうしよう、スッピンだ……」

酔つてたはずなのに、きちんと服をハンガーにかけてたり、肌のために化粧も全部落としてたり、やることはないきちんとしている自分が、この時ばかりはちょっと憎らしかった。

今はとにかく時間がないからしょうがなく、会社に行つてから化粧をしようと思つて、とつあえずあたしは支度を急いだ。

鞄を持つて、ふとお金のことが頭をよぎつて、

「「めんねつ……お金」」に置いておくから……」

それだけ言って、電話台の上に適当にお金を置いて、部屋を出た。

その時はあまりにも急いでいたせいで、うつかり色々なことを忘れていたのに、気づきもしなかつた。

「奈津美、おはよー。今日はいつもより遅いじゃない」

ロッカールームへ行くと、先に来ていたカオルに声をかけられた。

幸い、ホテルが会社とそんなに離れていないところにあったおかげで、タクシーを使って何とか時間ギリギリに「」までこれた。

「うん……ちよつと色々あつて……」

あたし自身よく分からぬ事情を、しかも「」ことだけに、カオルに言えるわけはない。

だけど、カオルは予想以上に耳聴かつた。

「あれ？ 奈津美、昨日と服一緒じゃない？ ……しかもスッピン？」

カオルからの鋭い指摘に、口から心臓が飛び出しつなぐらいに驚いた。

「あ……もしかして……？」

カオルはにんまりと笑う。

何を考えているのか、大体は予想がついた。ていうか、あたしのこの状態はそれしか連想させないから、しじみがないけど……

「なになに～？ 昨日は何があつたの～？」

カオルは、じりじりとあたしに詰め寄つてくる。明らかに、面白がつてる顔だ。

「ナツナについて別に何も……」

声が裏返つてしまい、自分で動搖するのが分かる。

「何もつてことはないでしょ～？」

更に詰め寄られ、背中に汗が流れるのを感じた。

「ちょ……ちよつと、そんなことより化粧させてつ。着替えもまだだし……」

あたしはそう言つて話をそらすとした。

すると、カオルは意外とすぐに引いてくれた。……と、思ったのは間違いだった。

「ま、今は確かに時間ないからいいけど、あとでじっくり聞かせてもらいうから」

カオルはそう言つて小悪魔っぽく笑顔をあたしに見せた。

「じゃ、あたしは先行くからね～」

手を振ってカオルはロッカールームを出て行った。

あの調子じゃ絶対白状させられる……

もう思いながら、あたしは制服に着替えて、簡単に化粧をして、オフィスへ向かった。

「へ～え？」

昼休みあたしは社員食堂でカオルに昨日の出来事を全て話した。というか、予想通り白状させられた。

一人で居酒屋に行つて酔いつぶれて、その居酒屋の店員に愚痴つて、その店員とホテルに行つて、朝氣付いた時には、もう全て終わつた後で……そしてその男に告白されて、付き合つことになつたといふこと……覚えている限りで全部話した。

それを聞いた後、カオルはにんまりと笑つてあたしを見ている。

「なーによお。一昨日男と別れて落ち込んでると思ったら……切り替え早いじゃない」

じついう話題が好きなカオルは、面白そうにうなづく。

「あひ……切り替えなんて……そりこいつもつじやないじー」

そう……全くそのつもつはなかつた。

なのに、何でこんなこと!」……

「それで? 相手ってどんなの?」

カオルに興味津々な聞かれて、あたしはふと今朝の彼を思い出そうとする。

思いだそっとしたんだけど……

「……あんまり覚えてないかも」

「は?」

あたしが呟くと、カオルは素つ頓狂な声を出した。

「覚えてないって……彼氏でしょ?」

カオルに言われて、あたしは返す言葉もない。
でも、覚えてないのは本当だからしううがない。

「本当に覚えてないの? 顔とか……」

あたしは必死に昨日の夜と今朝の記憶を辿りて、思い出をひもとくる。

すると、薄ぼんやりとしていた印象が、段々はっきりしてきた。

「顔は、格好いい方に入ると思ひよつ……ていうかどちらかと言つ
と可愛い系?」

そうだ、確かにそうだ。

男のわりには田舎顔立ちとか、結構整つてて、でも、印象的には、
幼いっていうか、話し方のせいかな……

「へえ？ 年下？ 年上？ 同い年？」

畳みかけるようにカオルは聞いてくる。

それを聞いて考へて、あたしはふと氣付いた。

「あたし……知らない」

「え？」

「その人のこと、全然知らない……年どころか、名前も……」

あたしは、急いでいたとはいえ、あの男に何も聞かずにホテルを出てきてしまった。

「え……もう一回言ひなさい、彼氏でしょ？」

「かつ……彼氏って言つても、あたしは別に付き合おうわけじや……相手のことだつて、好きどころか知らないし！」

あたしは、まるでカオルに弁解するように必死になつてそり言つた。

あたしは別に、あの人と付き合つてもいいつて思ったわけじゃない。

「冗談じやない。何で酔つた勢いで一回ヤつちやつた相手といいち付き合わないといけないの。」

「でも告られたんだしょ？」

「それは……元はといえば勘違いで……」

「その誤解も解かないでもう付合の方に向で考えてるんじやないの？」

それを言われたら、ぐうの音も出ない。

確かにあたしは、告白されて、勘違いされて、それからでも弁解すればいいものを、相手がもう付き合つ前提で言つてきた言葉に思わず勢いで頷いてしまって……

それでしようがなく、付き合つみたいになつて……

「でもつ……あの場では頷くしかなかつたんだつてば！」

そう……あんな嬉しそうな顔をされたら、後になつて勘違いなんて言う方が悪い気がして……言えるわけがない。

「ふーん。奈津美つてそんなに押しに弱いんだ。断れないような状態だったら、誰にでもOKしちゃうの」

「違つわよ！ そんな人聞きの悪いこと言わないでよー。」
あたしは、カオルの言つことに猛否定した。

そりや確かに、押しに弱いことは認めるけど……

「だつたら何？」

「何つて……その、あたしは連絡先とかも知らないわけで……」

そう言つと、カオルにため息をつかれた。

「奈津美……百歩譲つて断れないにしても普通でも、相手の名前と連絡先くらい聞くでしょ」

カオルの言ひことは尤もだ。尤もすぎる。

「でも……一回聞いたのに名乗らなかつたのは向ひひだし（昨夜聞いたらしいのに忘れてるのはあたしだけど）、向ひひだつて連絡先とか聞いてこなかつたし……」

言い訳かもしないけど、これだつて事実。あたしだけが悪いんじゃない。

「それもやうかもしないけど……びりすんの？」

「びりひて……びりじよつもないし……」

「あ、居酒屋の店員なんでしょう？ そこに行つたら会えるんじやない？」

「いつ嫌！ 絶つ対、嫌！」

カオルの発言にて、あたしは首を思い切り横に振つた。

「あたし昨日、酷い酔いつぶれ方したのよ！？ 他の店員とかにも覚えられてるだろ？ 店長なんか顔見知りなのよ！？ 行けるわけないじゃない！」

あの店には、もう一度と行かない。そう決めたのに……わざわざ行きたくなんてない。

「じゃあ、どうすんの？」

もう何度もかのカオルの問い……

やつぱつ、あたしの口から出る言葉はない。

だつて、本当じうじよつもなー。

そりや、あたしが意地を張らないで店に行けば早い話だけ……
正直、そこまで執着してゐわけでもない。恥を忍んでまで、行きた
くなんてない。

「もう忘れる！ 犬に噛まれたと思つて忘れる！」
あたしはそう断言した。

そうだ。くよくよ考へるからじうじよつもなへなるのよ。

「ふーん」

カオルは訝しげな顔になつた。

言いたいことは痛いほどに云わつてへる。

あたしは手持ち無沙汰になつて、椅子の後ろに置いていた鞄を膝
の上に置いて中身を漁つた。

「何か相手の人カワイソーー」

カオルは横から色々と言つてきたけど、あたしは気にしないフリ
をして鞄の中をいじる。

「あれ……？」

特に意識もせずに鞄を漁つていたけれど、途中で何かたりないこ
とに気が付いた。

財布に、ポーチでしょ？ 手帳に、鍵もあつて……あれ？

いつもあるはずのものが、見当たらぬ。

あたしは、行儀が悪いとも思いながら、テーブルの上に鞄の中身を出していく。

「どうしたの？」

突然のあたしの行動に、カオルは首を傾げている。

あたしは鞄の中身を全部出して、頭の血が引くのを感じた。

「……ない！ どうしよう……携帯なくした！」

中身を全部出した鞄の中に、あるはずの携帯はなかった。

「落としたの？」

「多分……どこか分からぬけど……」

あたしは焦って記憶を辿る。

最後に携帯出したのいつだっけ……

昨日……居酒屋入った時まではあつたはず。そこから、記憶ないし……

落としたとしたら、居酒屋の中？ ……ホテル？ 朝のタクシー？ それともどこか道の途中かもしれないし……

「どうしよう……」

何にしても、あたしは途方に暮れるしかなかつた。

「かけてみたら？　あたしの携帯貸すから。誰かいい人が拾つてたらどうかに届いてるでしょ」

カオルがそう言って携帯を差し出してくれた。

「あ、ありがとう」

「あたし的には拾つたのが相手の人っていうのを願つてるけどね。それか、居酒屋に落としたのが届いてるか」

携帯を受け取ると、カオルは嫌なことを言った。

「……電話したくなるような」と言わないで

そう言いながらも、結局携帯がないと困るだけだから、少し緊張しながら、あたしは自分の携帯にかけた。

「はい？」

三回目のメール音が鳴つたとほぼ同時に、相手が出た。ちよつと太い感じの、男の声だった。

「あの……その携帯を落とした者なんんですけど……」

誰か分からない相手にさう告げると、何の返事もない。

「もしもし……もしもし……？」

「あ……『めん、ナツ』

「え……？」

やつと声が返ってきたと思つたら、馴れ馴れしくあだ名で呼ばれた。

何となく、聞こ覚えのあるよつな……

「えつと、誰ですか？」

失礼だとも思いながらそう尋ねた。

「俺。シユンだよ」

「え……」

あたしの知り合いに、シユンなんて男は居ない。

その時、頭に過ぎたのは、朝の出来事だった。

「あ……朝、の？」

あたしは一か八かでそう尋ねてみる。

「うん、そう。で、ナツ。ケータイ落として行つただろ~」

なんて偶然なんだら……

あたしの携帯を拾ってくれたのが朝の人で安心したような、そういうような……

ていうか、カオルの言つた通りになつてるし……

「あ、やつぱり落としてたんだ……ビームに落ちてたの？」

頭の片隅では少し違つことを考えながら、あたしは彼に尋ねた。

「ホテルの部屋の電話台んと」。多分、ナツが財布出した時にでも落ちたんだよ」

「そつか……」

あの時か……

急いでたから気づかなかつたんだ。

「なあ、ナツ。今ビームでいる?」

「え……会社だけど……」

いきなり聞かれ、あたしはとつとつ答える。

「ビーム?俺、届けに行くよ」

そのこきなりの発言、あたしは驚いた。

「え……こよつー一応まだ仕事中だし……」

まさかそこまで言われるとは思わなくて、あたしは何故か焦りながらそう言った。

電話だから別に必要もないのに、首も思い切り横に振っていた。

「じゃあナツの仕事終わったぐらいに行くよ

「でも……」

「んなこきなつ会うなんて、何となく会こわいこと言つか、なん
といつか……

「いいつて、全然。俺、暇だし。ていつか、俺が会いに行きたいん
だ。ナツに。それじやだめ?」

「えつ……」

さらりと言われた言葉に、あたしは言葉を失つた。

『俺が会いに行きたいんだ』

頭の中でローブーストし、顔が熱くなるのを感じた。

「だめ?」

「やつこいつわけじや……」
思わずやつ言つていた。

「じゃあ、こい?」

「う……うそ」

頷いてしまつた。

「どうか、この状況もまた、朝と同じように頷くしかできない。

「やつた! んじやどこ行けばいい?」

あたしが頷いただけで、ショーン君は朝のように喜んでいる。

「えつと……会社は つてとい。××町のところなんだけど分か

「…」

あたしは自分が分からな。どうしていつまで流れまくらの
か…

「うん。分かったー。何時頃終わる?」

「五時ぐら…」

「オッケーー! んじゃ会社の前で待ってるなー。」

「うん」

ふと食堂の時計を見ると、もうすぐ休みが終わる頃だった。

「……あ、そろそろ戻らな…」

「あ……そっか……じゅあ、仕事頑張つて。また後でな

「うん。また…」

電話を切つてあたしはしばらく画面を見つめたままでいた。

本当に、何て偶然なんだろう。

まさか、もう一度と会うことないだらうっていう状況で、こんなふうに同じ人間に繋がるとは思わなかつた。

……そう言えば、あたし今カオルの携帯からかけたのに、何であたしだつて分かつたんだろ…

色々考えながらふとカオルを見ると、カオルはにんまりと笑つてあたしを見ていた。

「で？」

カオルは身を乗り出すようにして、そのにんまり顔をあたしに近付けてきた。

「で？　って……何」

あたしはなんだか心の中を見透かされているような気がしたがら、必死に平静を装つた。

「何つてことはないでしょ。昨日の人だつたんでしょ？」

本当に見透かされてる……

「何で分かるの？」

「顔見てたら何となくね。だって奈津美、電話で話してる時、表情違つたもん」

「え……」

「ほり、また赤くなつてる~」

「なつなつてないし！」

からかうカオルに、ムキになつてそう言つたけど、顔を押さえると本当に熱かつた。

「もういいでしょ！　そろそろ戻る！」

あたしはその場から逃げるよつに席を立つた。

「ふうん？ 別にあたしはいいけど。後でまとめて話聞いた方が。
ねえ？」

一体カオルの中ではどれくらい話が進んでいるんだろ？……

後で無理矢理白状させられると想つたら、気が気じやなかつた。

……ていうか、こんなんだつたら、会いづらいよ……

7 新しい彼氏（奈津美サイド）後編

何でいつもこの時は時間が過ぎるのが早く感じるんだ？……いつもはやたらと長く感じるのに。

時計を見ると、五時六分。もつ来てるんだろ？な……

エレベーターで一階に降りながら、あたしは数え切れなくなるため息をついた。

カオルに、これから会うのだと言つたら、『何そんなにのんびりしてるので』と、急かされた。

そして、ロッカールームを出る時に『しっかりね！』と、激励（？）された。

一体何をどうしてしっかりすればいいのか……それを教えて欲しかった。

でも何にしても、あたしの携帯を持つてるのは向こうだから、いずれ会わないといけない。

……そうだ。別に携帯を受け取るだけなんだから、こんなに憂鬱になる必要なんてないんじゃない。

別に相手を意識しなければ大丈夫。気まずいのは我慢すればいい。

そう思いながらあたしはエレベーターを降り、正面玄関に向かつた。

「ナツー。」

外に出たのと同時に、その声が聞こえた。
朝に、そして毎に電話で聞いた声……
あたしは背のした方に向いた。

「仕事お疲れ！」

予想通りの声の主、ショーン君は、あたしの田の前に駆け寄ってきた。

「あ……うん」

ちゃんと気合いは入れたものの、やっぱり緊張して、あたしはただ頷く」としかできなかつた。

「あ、そうだ。はい。ケータイ」
すぐにショーン君はそう言つて携帯を取り出して、あたしに差し出してくれた。

「あ、ありがとう」

あたしは、それを受け取りながらお礼を言つた。

「何か、じめんね？ わざわざ来て貰つたりやつて……」

そう言いながら、ショーン君を見上げてみると、意外と背が高いことに気がついた。

「ううん！ 全然！ 言つたら？ 僕、暇だから。それより、ナツ。今日はもう帰るの？」

「うん。うだけど……」
何故だかテンション高めなシュン君に聞かれ、あたしは頷く。

「じゃあ、送つてくよ」

笑顔で、とても自然に言われ、あたしは一瞬何を言われたか分からなくなつた。

「えつ……」

帰るの？ 一人で？

「そんな……いいよつ！ わざわざいこまで来て貰つてるのに、そこまで……」

ただでさえ会つことに躊躇してたのに、いきなり一人でなんて、どう接して何を話したりしたらいのか分からない。

正直言つたら悪いけど、勘弁してほしい。

「送るよ。もう暗いんだから女人人は危ないし。……ていうか、僕が送りたいだけだけどさ」

なのにシュン君は、少しさにかんだ表情でそう言つた。

あたしは何だか恥ずかしくて、下を向いた。

どうしよう……あたし、一瞬『キュン』つてしまつた。
だつてちょっと可愛かつたし……

でも、これじゃあ……

「じゃあ……うん。お願ひしようつ……かな
じゅうせんて頷くしかないじゃなー……」

ああ……あたし、本当に流れればなし……

ちゅうと泣きたこ気持ちになつた。

そしてあたし達は、並んで歩き始めた。

「あ、そうだ。ナツのケータイに俺の番号とメアド入れておいたか
う」

先に話しだしたのはショーン君の方で、そんな内容のことだった。

「え……あ……そつ」

せりふと言つた彼に、あたしは呆気にとられた。

入れといたつて……どんだけ勝手なこといつらの、この人。
て、直接は言えないけど……

「ナツって名字柏原つていうんだな。昨日は下の名前しか聞いてなかつたから今日初めて知つた」
ショーン君は、笑顔で楽しそうに話してくる。

やつはね……

「……うん。ねえ……あの、ショーン君？」

あたしが、ちょっとショーン君の方を向いて声をかけると

「なに！？ なになになにー？」

ショーン君が何故か勢いよく反応してきて少し驚いた。

「あの、あたしは……ショーン君の名字知らないんだけど」

もしかしたら昨日聞いていたのかもしないのに、こんな聞き方はすごく失礼なのかもだけど、知らないのだから、結局こう聞くしかなかつた。

「オキタだよ。オキタショーン」

ショーン君はすぐに笑ってそう答えてくれた。

「オキタ、ショーン君……？」

この期に及んで聞き間違いとかがあったら怖いから、あたしは確認のために繰り返した。

「うん！」

ショーン君は元気よく頷いた。

なんか、幼稚園児でも相手してくるような気分になってきた。
ちょっと、ショーン君って思つたより幼そうな感じかも。

「ねえ……旬君つて、年いくつなの？」
思い切つて聞いてみた。

居酒屋に結構遅くまでいたし……多分二十歳は越えてるよね？

「俺、十八だよ」

ショーン君はまたすゞしく愛らしく笑いながら、せつ答えた。

十八……十八……！？

「十八……？ ってことは高校生？」

自分でも顔が引きつるのが分かつた。

「今はまだそうだけど……でも今月で卒業だから。今年十九になるんだ」

「そつ……」

高校生……いくらもつすぐ卒業でも、高校生……
ていうか、未成年。

あたし……未成年とやつちやつたの？ 覚えてないけど……でも、
それって淫行？ 犯罪？

あ、でも多分合意のはずだし、大丈夫よね？

ていうか、いくら高校生じゃないからって……未成年じゃないか
らって……年下には変わりないじゃない！

あたしは、今更になつてそんなことに気付いた。

ちょっと待つてよ……あたし、年下となんて付き合つたことない
んだつてば！

「 は？」

ショーン君の声で、あたしは戻った。

「え？」

何も聞いてなかつたあたしは聞き返す。

「ナツはこくつなの？」

え……聞くの？ それ……

「おの話の流れで、自分の年なんて言いたくない。

ちよつと躊躇つばかり、あたしは声を小さくして答える。

「あたしは……今、二十一」

そう言つて、あたしはショーン君みたいに今年二十三になるとせざ
わなかつた。

先に若い年を言わると、いちが余計老けてこむよつと思える。

ていうか、年上だからって引いたりしないかな……

「でもナツですかーよなあ。 社つてこつたら結構有名じやん。
そんな感じで働いてるとかビックリした」

あたしの思つてゐることをよそに、ショーン君は違ひ話題を口にします
る。

別に年のことは何も思つてないみたいで、あたしはほつとしながら
ショーン君が言つたこと口答える。

「ううん。 そんな、すこして聞える声のことはないよ。

っ

て、すゞの会社は本社だから。うちの会社は支社だしどうか。それにあたしだって事務の仕事だから雑用ばっかで全然大したことないの」

確かに、うちの会社はネームバリューはあるみたいだけど、給料は月並みだし、他は知らないけど、仕事の内容だって、誰だってできるようなことだし……

「あつー！」

そこでこきなりシユン君が叫んであたしは驚いた。

「どうしたの？」

「こなんところで悪いけど、俺、ナツに金返そつと思つてたんだ」

「お金……？」

返す……？

何のことか分からなくてあたしは首を傾げた。

「ナツ、今朝一一万も置いてつただり？ 俺、半分出したから、その残り」

シユン君は財布を取り出しながらいついついついた。

「あ……ああ……」

それが。そういうえばあたし、適当にお金置いて来たんだった。まさか、一万も置いて行つてたなんて……

「はい」

「ありがとう」

あたしはシユン君に渡されたお金を受け取つて鞄の中から財布を

取り出した。

正直、朝にタクシー使ったおかげで少しピンチだったから、返してもらえて助かった。

そう言えば……

財布にお金をしまいながら、あたしはまたあることが頭に浮かぶ。

「ねえ、ショーン君」

「何！？」

何故かショーン君の食いつきはやたらと早くて、ちょっとびっくりする。

「ショーン君は、春から大学生？」

頭に浮かんだその疑問をショーン君に言つと

「ううん。働く」

即答で返つてきた。

「一応受験はしてたんだけど、全部落ちたからさ。浪人とかしてたら金かかるし」

ショーン君は続けてそう言つた。

「そつかあ……」

もう四年も前のことだけど、あたしが高校生の時も確かにそういう人が何人かいた気がする。

進路指導の時も、先生がそんなことを言つていた。

浪人しても、よくて今の学力キープが精一杯で、それで予備校の授業料とかで、結局は大学の約一年分の授業料がかかるつて……

「あ……旬君」

あたしはふとしたことと思い出し、再びシユン君に話し掛けた。

「なになに？」

今度の食い付きは、慣れさせいか驚かなかつた。

「あの……変なこと聞くけど……お昼に、あたし電話したじゃない？ あたしのケータイに。その時、あたし友達のケータイからかけたんだけど……何であたしだつて分かつたの？」

お昼から、少し気になつていたことだ。あの時、何の躊躇いもなく、シユン君はあたしの名前を呼んだ。
初めて電話を通して話したはずなのに……

「うん。初めはさ、寝ぼけて自分のケータイが鳴つてると思つてとつたんだよ。俺あの時寝てたから」

シユン君は、笑顔を絶やさないでそう話す。

「でも分かるよ。ナツの声だから。あの時、一番聞きたいって思つてた声だつたから」

シユン君の顔が、より一層綻んだ。

それはとても優しくて、純粹で……

そんな顔でそんなこと言われたら……

「何言つてゐんだらうな、俺……」

ハハツ……と軽く笑いながら、シュン君はあたしの方を見た。

「あれ……ナツ?」

顔が熱くなつてゐるのは自分でも分かつたけど、あたしはその顔を隠すこともできないで、固まつていた。

「く……変なこと言わないでつ……」

もう言つのが精一杯で、あたしは下を向いた。
きつと、思いつきり見られたに違ひない。

でも……面と向かつてそういう風に言われたのって、初めてだし……それに、表情とかでそれが嘘じゃないつて、本気だつてことが、伝わってきたから……そうすると、赤くならずになんて、無理だつた。

気がつくと、もう家の近くまで来ていた。

「あ、あたしにひだから」

「一ボの前に着くとあたしは立ち止まつてシュン君に言つた。

「いい?」

シュン君も立ち止まつて、一ボを見上げる。

「うふ。いいの三階」

無事に（へ）（へ）まで帰つていれたこと、あたしは安心してい
た。

でも、心の奥片隅では、もう着いちゃったのかと、ビックリが残念がつてゐる自分がいるのも、確かだつた。

「部屋まで送るよ」

「ううん。大丈夫。いいよ、こいで」
シュン君の親切を、あたしは首を横に振つて断つた。

これ以上シュン君と居たらあたしの心臓がもたない。

「そつか……」

シュン君は、まるで捨て犬のような顔をしていて、ほんの少し、あたしの良心が痛む。

「あとで電話していい?」

その捨て犬の表情で小首を傾げ、あたしをじっと見つめてくる。

「うん」

また顔が熱くなるのを感じて、あたしは頷くことで應ぜつとした。

「それじゃあ、ね。送つてくれてありがとう」
そうやって誤魔化すようにあたしは言つた。

「あ、うん。じゃ……またな」
シュン君の声が寂しそうに聞こえたのは、多分あたしの氣のせいだ。

あたしは、逃げるよつて口一ぱの中に入つていつた。

階段で一階まで上がつていったが、自然とため息が出た。

結局、何もなかつたけど……むしろほとんど初対面のわりに話せてたのつてどうなの？

でも……あのショーン君つて人は、結構喋りやすいってことが分かつた。

全然悪い人じゃないうことかも……

それに、じうじうふうに言つたら自意識過剰なかもしれないけど、ショーン君があたしに……好意を持ってくれてるのは、物凄く伝わってきた。

昨日の今日で何で？ とは思う。

あたしは昨日のことを覚えてないからよく分からぬけど、でもかなり酷い状態だったはずなのに、そんな女に好意を持つなんて、どれだけ物好きなんだろう。

あたしはもう一度大きなため息をついた。

何にしても、これから大丈夫なのかな……

7 新しい彼氏（奈津美サイド）後編（後書き）

奈津美視点のストーリーはいかがでしたでしょうか。

旬の話の裏側を、思い付いたから書いたといつも満足的な話（苦笑）ですが、前作の序章として読んで頂けたらと思います。

さて、次回は初デート編になります。これからも旬視点と奈津美視点で、一回か二回ぐらいでお送りしたいと思います。
お楽しみに

8 初テート（前書き）

お待たせしました！ 初テート編です！ 前後編に分けよつかとも
思つたのですが、それも微妙だったので、一話にしました。なので
ちょっと長いです。

8 初デート

九時三十一分。
約束まであと三十分だ。

俺は、待ち合わせの時計場所で、一人落ち着かなかつた。
落ち着かないのは無理ない。ていうか、落ち着けつていう方が無理。

なぜなら、今日はナツとの初デートの日だから！

ナツを家まで送った日、そのあとのこと。

俺は家に帰つてから、言った通りにナツに電話した。

「……はい」

電話を鳴らして十秒ぐらいでナツが出た。

「あ、ナツー？ 俺、匂。家着いた？」

「もうとっくに着いてるよ。だつて三階なんてすぐじゃない
電話の向こうのナツは小さく吹き出していた。

「あ、そつか。へへつ。俺は今帰つてきたの
俺も笑いながらそう言つた。

「そつ……」

ナツ、声だけでも可愛い！

俺は、まだ一言一言のナツの言葉だけでそう感じた。

やばいな、俺……自分で思つた以上にハマりまくっている。

さつき別れたらばっかなのに、もつ会こたい……

あ、そうだ。

「なあ、ナツ。今度の土曜、ヒマ？」

俺は思こつしままで口にした。

「え……土曜？……特に予定はないけど

「じゃ、どうか行こ！ ナツと一緒にデートしたい」

会こたいなら、会えぱこ。付き合つなり、デートは基本だ。

「え……うん。いい、けど……」

ナツは小ちな声で言つた。

よつしやー デート決定！

「じゃあどう行く？ ナツ、どうか行きたいことじふある？」

「あたしは……特に……」

そつか、そづきたか。
実を言つと俺もない。

「んじゃ、俺考へとく。でも、ナツが土曜日まで行きたい」と田てきたいら囁つてくれな！」

「うん……分かつた」

それで今日が約束の土曜日。

十時にこいつて約束だつたけど……俺はまたしても早く来すぎてしまつた。

だつて早くナツに会いたいし……（俺だけ早く来ても早く来すがていつて分かつてるけど……）

でも流石に九時に着いたのは早すぎた。
時計を見ると、今、やつと四十五分。

「旬君」

俺を呼ぶ声が聞こえた。

「Jの声は……！」

声がした方を向くと、思つた通り、ナツが小走りでこいつをひっしゃりて來た。

「ナツ！ おはよ！」

ナツを見ただけで俺のテンションは上がつた。

「Jめんつ……遅れちやつた？ 約束、十時だと思つてたんだけど

.....

ナツは慌てた様子でそう言った。

「え……？　ああ、違うよ。俺が早く来すぎただけ。ナツは時間より早く来てくれたんだよ」

「なんだ…… そうなの……」

ナツはまつとしたように呟いた。

ちょっと勘違いしちゃったナツが可愛いー！

ていうか、今日のナツ、前に会った時とちょっと違う。

この間会った時は、背中までの長さの髪はまっすぐだったけど、今日は少し巻いてある。それに化粧も、瞼の辺りとかがピンク色で、前と違うのはすぐ分かった。

服も、この前はシンプルな『ザイン』で『キレイな』『しゃら』って感じだったけど、今日は、ふわっとしてるスカートとか、キラキラ光るネックレスをしてることとか、ちょっと雰囲気が違った。

今日は『可愛いくてキレイな女人』って雰囲気だった。

「ナツ……すつづー可愛いー……」

ほぼ無意識に俺は言っていた。

「えつ……」

「髪巻いてる？　化粧も前と違つ？」

「あ……うん。今日は休みの日だから、ちょっとね」

「すつーー似合つー」

勿論、今日のナツの格好がそつだけど、それよりも、俺と会つのにそつやつていつもよりお洒落したのかなつて想つと、すこしく嬉しかつた。

「あ……ありがとう」

ナツはほんの少し頬を赤くして、恥ずかしそつに俯いてそつ言つた。

何、この可愛いの！？ ギュッとしたくなるじやん！

俺は今すぐにでも叫びたい。それで周りの人達に教えたい。

『この可愛くてキレイな人は、俺の彼女です！』つて。

「旬君……それで、今日はどこ行くの？
ナツが俺を見上げる。

「んー……買い物とかしよつかなーって。ナツ、何か欲しいものとかある？ 服とか」

俺も行くところを色々考えたけど、特にこれっていうのが浮かばなかつた。

映画とかも、今はイマイチ面白そつなのはやつてないし、ドライブしようかとも思つたけど、俺の家の車は父さんが今日使つと言つて無理だつた。

それで浮かんだのが、買い物がてらのんびり街を歩いつつていう

プラン。

俺は特に買ひるものとかないけど、ナツが行きたい店に会わせて付
き合おうって寸法だ。

「え……あたし、丁度先週に買い物に行つたから、特に必要なもの
なんてないんだけど……」

…………うつそ！？

まさかそうくるとは……

そんな偶然に先週行つたばっかり……

あ、だから特に行きたいところはないって言つてたのか……
今そんなことに気付くなんて、俺ってバカ……

「旬君？」

ナツは首を傾げて俺を見ている。

「あ……じゃあ、ナツ。俺に付き合つてくれない？」
俺はとりあえずそう言つた。

「うん。いいよ

「じゃあ、行こう

俺はナツの横に立つて、歩き始めた。

「買い物つて、服とか？」
歩きながら、ナツが聞いてくる。

「うん。しばりへ買ひに行つてなかつたから見てみよつかなーって
思つて」

「そっか……」

正直、苦し紛れだ。しばらく服買っていないのは本当だけど、俺が買い物する予定はなかったからちょっと焦っている。

でも、考えとくつて言った手前、行くところにいつて言つわけにはいかないし……それじゃあ何のためにナツを誘つて、バイトも代わつて貰つてしまで休んだんだ。

とかく、途中で話しながら、考えよつ。

……こつか、手……繫ぎたいなあ。

俺は横田で右側にいるナツのことを見た。

さり気なく、ナツの左手を……と思つて狙いを定めた。……が。ナツの左手にはすでに鞄が握られている。

繫げないじやん……

こういう場合、男の方から『手、繫げ』って言つのは、恥ずかしくて言つてられない。こりらへていつか言えない。

かと言つて、ナツの方から言つてくれるのを待つのも、情けない。

でも、まだ付き合つて一週間も経たなこいつの、四回のデートだもんな。今日はまだそんな段階じゃないよな。

俺はまるで初めて彼女のできた中学生のよつに、健全な考え方で自分を納得させた。

十八にもなつて……て感じだけど、それだけ大事にしたいのも本音だ。

俺達は、俺がいつも服を買つてゐる店に行つた。

「何買ひの?」

店に入つてすぐになつに聞かれた。

「えーっと……Gパンとか

俺は店を見回しながら適当に答える。

本当、何買おう……

とりあえず、俺は自分で言つた通りにGパンの棚に行つた。ナツもその横についてくれて、一緒にGパンを眺める。

「…………めんな? 付き合わせて。ナツ、暇だよな。すぐ終わらすから

こじは男物の店だから、特にすることのないナツは退屈に決まつてる。

思いつきで買い物に付き合つてとか言つんじやなかつた。

「へへへ。しばらく買い物してなかつたんでしょ? それならゆっくり見ていいよ」

優しいナツの言葉に、俺は感激する。

やつぱりナツはイイ！ 最つ高！

でも、そんなナツに罪悪感を感じる。何か俺のわがままドアートしてゐつていうか……

俺が考へてることをよそこ、ふとナツを見ると、ナツの顔は田の前のGパンとは違つと向ひに向ひていた。

「ナツ、どしたの？ 何かあんの？」

あんまりじつと見てるから、俺は声をかけてみる。

「うさ。ダウンが安くなつてゐなーつと思つて」

ナツの見ていた方向には、ダウンジャケットの棚があった。ナツの言つ通り、セールで三割引になつていて。

「時期的に冬物は安くなるけど、まだ寒いからじばらくは着れるし、今買った方が得なのよね」

ナツはまるで独り言のようこゑつた。

そうか、そうだよな。と、俺は納得した。

今までそんな意識してなかつたけど、確かにダウンとかジャケットとか、高いのは安くなつてから買う方が得だよな。ビッグセールも着るんだし。

「買おつかな……」

俺は、弓を寄せりやるよつてダーウンのところに行つた。

「買ひの?」

ナツも俺の後ろからついてくる。

「うん。これ、もう袖とかボロボロだし、そろそろ替えよつかと思つて。ちよつと安いし」

今着てるカーキのダーウンは、去年買ったやつだけど、俺の着方が悪いのか、袖はボロボロだし内側に穴が開いてたりしてる。普段の俺なら、別に気にしないで結構平氣で着てたりするけど、何でか今日は、急に欲しくなつた。多分、ナツが言つたからだ。

「じゃあ、どれにするの?」

嬉しことに、ナツが率先して見てくれている。

「どひじよつかなー」

田の前にあるダーウンは、全部テザインは一緒で色は、黒、カーキ、茶色、紺があつた。

「今のとこ違う方がいいんじゃない?」

「やつぱねつだよなー。ナツはどうがいいと思ひ?」
「ぶつちやけ、どれでもいい俺は、ナツに聞いてみる。」

「んー……」

ナツは、首を傾げて考えるよつた仕草をすると、ダウンを一着ずつ手に取つて俺に合わせていく。

合わせてはうーん、と唸つて首を傾げ、それを戻して、違うのを取りて合わせて……それを繰り返している。真剣そのものの表情だ。

なんかいいー！ ハーフのーすりーにトートっぽいー（いや、）
データだけども

ていうか、ナツが俺のために考えて選んでくれてるっていうのがすっげー嬉しい！

「紺かなあ……」

しばりへ悩んだ後、ナツは言つた。

「じゃあ、紺にする」

俺はすぐ決めた。

「えつ……いいの？」

ナツは目を丸くしている。

「うん。紺がいい」

ていうか、ナツが選んだ色がいい。

「そつ……？」

さつきまではどれも一緒に見えたのに、ナツが選んだ途端に、紺色のダウンが他とは違つて輝いて見えた。

「このダウンは絶対大事にする！」

結局、俺のダウンだけを買つて、店を出た。

すると一度よく腹が減ってきた。

「ナツ、どうか飯食いに行かない? 俺、腹減った」

「そうね。もうお腹時だし」

ナツは店の中の時計を見ながら頷いた。

「どう行く? 何か食べたいのある?」

「何でもいいよ。この辺って何があるの? あたし、あんまりこの飯食べには来たことないから」

「色々あるよ。歩きながら探す?」

「うん」

ナツが頷いて、俺達は歩き出した。

あ~……マジでここなあ、こりひーの……

ただ並んで喋りながら歩くとこいつだけが、特別に感じた。

この雰囲気だったら、ナツも俺のこと、彼氏だつて思ってくれてるつて思つていいのかな……

俺にはそれが不安だった。

よく考えたら（考へなくてもだけど）告つたのは俺からで、好きになつたのも俺からだ。これまでの展開だと、ナツが俺のこと好きになつてくれてるとは思えない。ていうか、好きじゃないと思つ。一応付き合つことになつたのは、俺が無理矢理なことを言つたからで、ナツの意志じやない。

でも、もし俺のことが嫌なら、とつべに拒否られるよな？ 休みの日にわざわざドートしてくれないよな？

それに……

『旬が……あたしの彼氏だつたらよかつたのになあ……』

俺にはあの時あの言葉がある。

いくらナツが酔つてた時の言葉でも、ナツが覚えてなくとも、あやつて言つてくれたということは、俺のことを好きになつてくれる見込みがあるつてことだ（と思つ）。

まだまだ先は長い。ゆつくりでも、頑張ろ。

俺は一人で気合いを入れた後、昼飯の場所を探す。

そこで目に入つたのは、入り口に美味しいそうなケーキの写真の看板が立てかけてある店だった。

ケーキバイキングの店らしい。

行きてえ……

甘いもんが好物な俺はその看板に釘付けになる。

いや、でも今探してるのは昼飯の店だし。流石にケーキはちゅうと、な。それに、男の方から誘つのも……引かれたら困るしそう。ああ、でもじばりく行つてねえからなあ。

俺は心中で葛藤した。

店の前を通る時も、視線は釘付けのままで、通り過ぎたあとも、なかなか離れない。

我慢だ、俺！ 耐えるんだ！

「旬君」

ナツに話しかけられて、俺は我に返つた。

「なつ何？」

やつと店から田をそらしてナツを見た。

「もしかして、そこがいいの？」

ナツはそう言つて店を指差した。俺が見ていたケーキバイキングの店……

「え、何で？」

内心ドキドキしながら、聞き返してみる。

「だつて……すゞこ見てたから。甘いもの好きなの？」

「うん……まあ」

聞かれると、答えるのが恥ずかしかった。

店をずっと見てたのを見られたのも、少し恥ずかしかった。
本当に、引かれたらいだつじよいつ。昔付き合っていた彼女に、引か
れることあるから怖かった。

「じゃあ、行く?」

ナツから出たのは、予想外の言葉だった。

「え……」

俺は驚いて、すごい間抜けな顔になつていていたと思つ。

「お皿、皿といじよつか

ナツはせつめいとほ違つ言葉で、皿じいとを言つた。

「いいの? てか、昼飯だし、ケーキは……」

内心は物凄く嬉しかったけど、俺は何でかそんなことを言つてい
た。

「いいよ。いいでケーキだけじゃなくて軽食も置いてるし。それ
にあたしもひとつ甘いもの食べたいから

「いいの……?」

「うん」

ナツは笑つて頷いてくれた。

やつた――――――――!

嬉しかつた。本当にう嬉しかつた。

毎時で店の中は混んでいたけど、すぐに入ることができた。

店員に席に案内されて荷物を置いてから、俺らはバイキングに向かつた。

「え……旬君、いきなりケーキ?」

軽食のあるほうに行こうとしていたナツに、皿を丸くして言われた。

「うん!」

頷いて、俺は皿の前のケーキを皿に乗るだけ乗せた。

久々のケーキバイキングに、俺はテンションが上がりまくった。た。

「いただきまーす」

席に戻ると、俺は早速フォークを持ってケーキに食らいついた。

ショートケーキを一口食べて、口の中のクリームが広がる感じに幸せな気分になれた。

「あれ? ナツ、食わねえの?」

俺はもう一つ皿のチョコレートケーキを食べ始めてるのに、ナツはまだ自分の皿に手をつけていなかった。

ナツの皿には、パスタとサンドイッチが一つ乗っていた。

「ううん……美味しそうに食べるなあって思つて」

「うん。本当に美味しいよ」

俺は何でナツがそういう風に言つのか分からなかつたけど、思つたままの感想を言つた。

「うん……そうよね」

ナツは笑顔でそう言つて、自分の皿のパスタを食べ始めた。

その笑い方が、自然なのにくすぐつたりぐらにすゞく優しくて、俺も笑つた。

ケーキを食べながら、すぐ目の前にはナツ。今まで一番幸せな状況かもしれない。

「旬君、飲み物ココアにしたの？」

ナツは俺のカップを見て言つた。

「ケーキだつたら普通コーヒーか紅茶じゃない？」

そういうナツのカップには、紅茶が入つていた。

（）の飲み物は、ドリンクバーになつていて、あつたかい飲み物はコーヒーと紅茶とココアがあつた。それで俺はココアを選んだ。

「俺、ココア好きだから。ケーキの時でも普通にこれだよ」
ケーキとココアは、俺には当たり前の組合せだ。他の人はあんまりしないみたいだけど。

「それに俺、紅茶はともかくコーヒーは飲めねえの」

「やうなの？ 苦いからダメとか？」

「それもあるけど、飲んだら腹壊すから。多分、呑わねえんだな。
飲むんなら、砂糖三つと半分以上牛乳入れないと無理」

「えー？ そんなのもうコーヒーじゃないよ」
そう言いながらナツは笑つた。

「本当に甘いの好きなんだ。珍しいね。男の子でそんなに甘いもの
好きって」

「みたいだよな。俺の周りも嫌いなヤツ多くてさあ。男同士ではこ
ういうとこつてめったに来れねえし、今めちゃくちゃ嬉しいんだ」
ナツも一緒に。と心の中で付け足した。

「そつかあ。でも、そんなに甘いのはつかりだつたら体に悪くない
？」

「全然！ それよく言われるけど、俺、虫歯ですか一回もなつたこ
とねえの。病氣も全然したことねえし」

「へえ……すごいね」

「これは本当に血漫だ。生まれてから一度も風邪だつてひいたこと
がない。

バカだからひかないって周りによく言われるんだ。

「でも次はメシ系取つてこよっかな。ナツは何のヤツ食べてんの?」

俺の皿の上のケーキはあと一つになっていた。ナツの皿を見ながら聞いた。

「カルボナーラと……パスタは他にも色々あつたよ。それと、ハムサンド」

「ハムサンド? いいなつ。俺ハム好きなんだ。あとで取りに行こ

好きなものだらけで、俺のテンションはさらに上上がる。俺は皿の上の最後の一個のケーキをフォークで刺した。

「サンドイッチはなくなつてたよ。あたしが取つたのが最後だったから。また違うのに変わつてたよ」

「えつ! ?」

ナツの言葉に、俺はショックを受けた。

はたからすれば、そんなこと……つて感じだろうけど、俺には結構重要なことだ。

ないのか……やつか……

「……はい

ナツが、サンドイッチを俺の皿に置いた。

「え……」

「旬君、食べていよい。あたし、また他の取つてくるから」

「いいの?」

「うん。好きなんでしょう?」

ナツの優しさに、俺はものすごく感動した。

「ナツ、ありがと! いただきまーす!」

俺はすぐにそのサンドイッチに食いついた。

特になんでもない、どこにでもあるような普通のサンドイッチだつたけど、ナツがくれたというだけで、今まで食べたことのないくらい美味しく感じた。

それから、俺達はケーキやメシを食べながら、色々な話をした。

「ナツは食べもんで何が好き?」

「ん……特にこれが好きっていうのはないかなあ。その時の気分で変わるから……あっさり系が食べたい時は和食だし、じっくりしたのが食べたい時は中華とか……」

「へー。俺は「じっくり系が好き」

そんな風に、ラーメンでは俺は豚骨、ナツは醤油が好きで、焼き肉は俺がカルビ、ナツはタン塩、カレーは一人とも辛い方がいい……

…と、何故だか食べ物のことばっかだったけど、俺達はたくさん話した。

話していく間、ナツはたくさん笑っていて、それを見て、俺はすぐ嬉しくて、樂しくなった。

そんな感じの雰囲気を、ケータイ着メロがぶち壊した。

「あ……俺だ」

Gパンのポケットの中で震えていたからすぐに分かった。

「」の着メロは、電話の方だ。

「」こんな時に誰だよ……と思いつながら、俺はケータイを取り出して、サブ画面を見た。

表示されているのは、バイト先カブトの先輩だった。今日、ナツとのデートのために、俺と口にちを変えてもらつた人だ。

「「」めん、出でいい？ バイト先の先輩からなんだ」

「」めんがなくナツにそう聞いた。

「うふ

「「」めんな

頷いたナツに、もう一度謝つてから、俺は電話に出た。

「もしもし？」

「沖田か？ 悪いけど、今日はバイト無理になつた」

「えつー？」

先輩の言葉に俺は思わずでかい声をだしてしまつた。

「だからお前行け。店長にもやつて聞いたから」

「そんな……先輩！ 俺だつて無理ですよ！」

俺は必死に言い返した。

「今、ナツとめちゃくちゃいい感じになつてるのでバイトなんて[冗談じやない！ 絶対に嫌だ！」

「無理じやねえだろ。元はと言えばなあ、お前がシフトも確認せずに彼女と約束したとか勝手なこと言つたんだろ。それをお前が俺に『このデートに懸けてる』とか言つて土下座までしたからこっちだつて出来る限りで予定変えてやろうとしたんだろうが。それが無理なんだからしようがねえだろ」

返す言葉がなかつた。全部本當のことだ。

でも、それだけ本當にナツとのデートに懸けてたし、それに、こつちから誘つておこして勝手に無理になつたとか言えないと……

「もうこいつわけだから。いやんに行なよー。じゃあな」

「ちゅうと……待つ……

耳に返つてきたのは、ツー、ツーとこつ音だつた。

“えへっす……

ケータイで時間を見てみると、一時前だった。バイクは二時からだ。あと一時間ちょっと。

誰か他の人に頼もうにも、今からだつたら流石に無理に決まつて。ていうか、絶対に無理だ。この前も、全員に頼んで、全滅で、それだから必死になんとかなつそうなつさつきの先輩に頼んだんだがう……

「じつしたの？」

ナツが首を傾げて聞いてくる。

むづ諦めるしかない。

「ナツ、じめん……バイク入っちゃった」

「本ッジ！」ぬんー、じゅぢから誘つとこで……マジで！「ぬんなー！」

店を出で、ナツを家まで送りながら、俺は何度もナツに謝つた。

「いいよ、そんなに謝らなくても
謝るたびに、ナツはそつ言つて首を横に振つた。

「だつて、バイトでしょ？ それならじょうがなによ

ナツの優しさが田に染みるへりこだつた。

本当は違う。俺が勝手なことをしたからひつひつたの……

あつとこつ間にナツのロードポ前に着いてしまった。

「じゃあ……バイト前なのに、送りてくれてありがと……

「ううん。まだ時間あるか?」

本当にあつとこつ間だった。

「いや、デートで一時半解散とか有り得ねえだろ。(いや、俺のせいだけ)

もつと、ナツと一緒に居たかったけど……今日はじょうがない。

「ナツ、あのセ……」

ナツに話しかけると、ナツは俺を見上げるみじかにして見る。

「今日、付き合つてくれてありがとう。俺、すっげー楽しかった

今日は、買い物も食事も、全部ナツが俺に合わせてくれたんだ。ナツは、笑ってくれてはいたけど、もしかしたらつまらないと思つたかもしれない。

それでも俺は、ナツのおかげで今日は楽しかつたんだ。

「あ……あたしもっ」

ナツは、そう声にしてから俯いた。

「あたしも……今日、楽しかつた、よ……」

俯いたまま、恥ずかしそうに小さな声で、そう続いた。

その言葉とその様子が、とても可愛くて、とても嬉しかった。

ナツも、俺との時間を、楽しいと言つてくれた。たつたそれだけなのに、もうこのまま死ぬんじゃないからって、嬉しかった。

「また……また行こうなー。今度、ちゃんと埋め合わせするからー。」
俺がやつぱり、ナツは顔を上げて、笑つて、

「うん」と、頷いた。

それだけでまた幸せになつた。

「それじゃ、終わつたらまた電話するな

「うん。待つてる。……旬君、バイト頑張つてね」

さり気なく、俺からの電話を『待つてる』と言つてくれたこと、ナツが『頑張つてね』と言つてくれたこと。それだけが俺のやる気になつた。

「あ

頭の中で、ナツのセリフを繰り返して、一つだけ引っ掛けた。

「ナツ。俺のこと、次からは旬つて呼んで

ナツは、ずっと俺のことを君づけで呼んでいた。あの日の夜は、

呼び捨てだったのに、その時のことを覚えてないからか、ずっと呼んでくれそうにはなかつた。

本当は、もつと近い感じで呼んで欲しかつたんだ。

「えつ……」

ナツは田を丸くしていろ。

「呼んでみて」

「いつ今!？」

「うん。今」

ナツの顔が、赤くなつていた。

「…………し」

発音するかしないかのところで、ナツは固まつた。口は旬の『しゅ』の形だ。

ナツは、じんどん真つ赤になつて、もつねでダコとそんなに変わらないうらつこだ。

「…………やつぱり今は無理!」

ナツはやつぱり言つて俯いてしまつた。

でも、名前を呼ぶぐらいで恥ずかしがつてゐるナツは……

「可愛いから許す!」

俺は思ったことを素直に口にした。

「なつ何言つてゐの? ……」

狼狽えてるナツが可愛くて俺は笑った。

「もつーー早くバイト行かないといけないんでしょ!」

「はーはー」

見え見えの照れ隠しに俺は笑いながら頷いた。

「じゃあまたなー!」

「うん。またね」

俺が手を振ると、ナツも小さく振り返してくれた。

そうしてくれただけで、俺も今からのバイトを頑張りついと想えて、歩き出す一歩が軽かつた。

今日のデートで、確かに俺とナツの距離が縮まつたと想つていいか、むしろ絶好調。

今日も、俺はナツのことを知つて、もっとナツのことを好きになつた。

それと同じように、ナツも、ほんの少しでも、分からぬくらいでもいいから、俺のこと考えて、好きになつていってほしい。

簡単に上手くいくとはないのは分かっているけど、俺はそんな風に思っていた。

8 初テート（後書き）

次回は初テート・奈津美サイドです。次回もちょっと長く予定なので、更新が遅くなるかもしません（汗）

9 初デート（奈津美サイド）

明日、何着て行けばいいんだろ。

あたしは、ベッドの上にクローゼットの中の服を広げて悩んだ。
パンツかスカートだつたら、絶対スカートよね。あ、先週買った
やつにしよう。トップも何枚か買つたやつで合わせて……後はブー
ツ出しどかなこと。

よし！

悩みに悩んで完成した服を見て、あたしは一人で頷いた。

……て、何気合に入っちゃつてるのよ、あたし！？

自分でも驚くほど完璧にしているのに、あたしは愕然とした。

こんな、『デートじゃあるまいし……こや、『デートらしきナビ……

旬君に「一歩まで送つて貰つた日……

部屋に着いてから、化粧を落として、一度一息ついた時、鞄の中で携帯が鳴つた。

鞄から出して見てみると、電話で、着信は『沖田旬』。

ここで初めて彼の名前を漢字で知つた。

そう言えども、電話するって言われてたんだっけ。思い出しながらあたしは電話に出た。

「……はー」

「あ、ナツー？ 僕、旬。家着いた？」

出るなり、電話の向こうの声はハイテンションだった。

「もうとっくに着いてるよ。だって三階なんですがじゃない」とおバカな発言で、あたしは思わず吹き出してしまった。

「あ、そっか。へへっ。俺は今帰ってきたの」
旬君も、笑ってそう言った。

「ナツー……」

今着いたところだと、旬君の家はそんなに遠くないところとか。

そんな風に考えながら、あたしは向こうの言葉を待つた。

電話するって言われても、昨日の今日の出来事であたし達には話すような話題がない。少なくとも、あたしにはない。

「なあ、ナツ。今度の土曜、ヒマ？」
唐突に、旬君が言った。

「え……土曜？ ……特に予定はないけど、あたしはそのままの予定を言った。

「じゃ、どうか行くよ。ナツとデートしたい

「
え」

テート……？ テート！？

さらりと言われて、一瞬意味が分からなかつた。

こんないきなり誘われて、断るかそうじやないかと言つたら……

「うん。いい、けど……」
断れないに決まってる。

予定を先に聞かれて、特にないつて言っちゃったのに、断れるわけないでしょ！？

「じゃあどこ行く？」
ナツ、どっか行きたいところある？」

「あたしは……特に……」

「んじゃ、俺考えとく。でも、ナツが土曜日まで行きたいといつてきたり直つてくれなー！」

「うん……分かつた」

どんどん進んでいく話に、あたしはついでいげず、ただ適当に返事をするだけだった。

そして、テート面对。

あたしは鏡の前で髪を巻いていた。丁寧に、丁寧に……

巻き終えた髪を、横を向いたりして確認する。

巻けてないところはないか、変になつているところはないか……

……て、何また氣合いで入りまくらみたいになつてんのよ？

鏡の中の真剣な顔と田が合って、あたしはうなだれた。

顔を上げて、鏡の中の自分をもう一度見てみる。

上下ともあるしたての服に、ネックレスなんか付けて、髪は緩く
だけど、完璧な巻き髪。化粧だって、平日のベージュ系のナチュラルメイクじゃなくて、ピンク系のアイシャドウを使って、チークも塗つて……

これじゃ今日が楽しみで楽しみでしようがなかつたみたい。

違うそんなつもりは全然ない。

別に、デート云々って言つ前に、休日に出掛けるんだから、いつも違つて当たり前じゃない。服だって、このためだつて買ったわけじゃないし。あたしが欲しいから買って、あたしが着たいから着るのよ。うん。

あたしはまるで血口暗示のようだし、自分こそが言つて聞かせて頷いた。

せじと、とりあえず待ち合わせになつてゐるから、そろそろ行こうかな。

別にこれだつて仕方なく行くのよ？ 自分でした約束なんだから

……

自分の行動に、いちいち言い訳をしながら、あたしは用意をして家を出た。

待ち合わせ場所の時計広場の近くに来て時間を見てみると、まだ約束の時間の十五分前だった。

ちょっと早く来すぎたかもしない。旬君はまだ来てなさそうだ。何か嫌だな……これこそ気合いで入ってるみたい。

時計広場が見える所まできて、そつちのまつを見てみた。

え……？

あたしの視線の先には、もう既に旬君が居た。

ちょっと……早すぎじゃない？ もしかして、あたしが時間を間違えた？

まさかそんなことはないと想いながら、見てみると、どうも旬君は落ち着かない様子で、時計を見上げている。

「つそ！？」 まさか本当に間違えた！？

あたしはそう思い、焦りながら走って匂君の所へ行つた。

「匂君っ」

あたしは思わず大きな声を出していた。

匂君はすぐに反応してひきに回つた。

「ナツー オはよー」

匂君は、何でか満面の笑みで朝の挨拶をしてきた。

「『』めんつ……遅れちやつた？ 約束、十時だと思つてたんだけど

あたしは、匂君とは対照的に、ものすゝく流れていた。

……

「え……？ ああ、違つよ。俺が早く来すぎただけ。ナツは時間より早く来てくれたんだよ」

匂君はあつさつとそつと言つた。

「なんだ…… そこのの……」

ほつとしたような…… 抱子抜けしたような……

て、これじゃあたし、やつぱりテーーートに張り切つて早くきたみたいになつてる？ ほんの十メートルぐらいだけ、走つて来ちゃつて……

いやでも別に、実際に張り切つてたわけじゃないし、約束に遅れないことをするといつてこいつのは当たり前じやない。

だいたい、この人一体どんだけ早く来てんのよ。

「ナツ……すつげー可愛い……」

その言葉に、あたしは我に返った。

「えつ……」

旬君が、物凄く熱い視線をあたしに向けていた。

「髪巻いてる？ 化粧も前と違つ？」
すぐにそうやって聞かれた。

「あ……うん。今日は休みの日だから、ちよつとね」「あたしは、自分にした言い訳と同じようなことを言つて、誤魔化しながら答えた。

決して「デートだからこんなに気合を入れた格好じゃない」とこいつことを。

「すつげー似合つー。」

旬君は力強く言つた。

褒められてるのはあたしなのに、旬君の方が嬉しそうだった。

あたしは面と向かつてそういう言われるのが恥ずかしくて、下を向いた。

「あ……ありがとう」

それでも、嬉しくないと言つたら嘘だ。
少しだけ、気合い入れてきてよかったですと思つた。

「旬君……それで、今日はどこ行くの?」

あたしは話題を変えて、照れくさいのを誤魔化して、顔を上げた。

「んー……買い物とかしようかなーって。ナツ、何か欲しいものとかある? 服とか」

旬君にそう聞かれ、あたしは困ってしまった。

「え……あたし、丁度先週に買い物に行つたから、特に必要なものなんてないんだけど……」

現に今着てる服は、先週買つたばかりのやつだし。

あたしが答えると、旬君は固まってしまった。

あたし、何か変な」と言つた?

「旬君?」

何も言わない旬君に、あたしは首を傾げて声をかけた。

「あ……じゃあ、ナツ。俺に付き合つてくれない?」

旬君は思ひ出しあがめたりとつた。

「うん。いいよ」

特に異論もなく、あたしは頷く。

「じゃあ、行こう」

旬君はあたしの隣に立つて歩き出し、あたしはそれに付いて行つた。

「買い物つて、服とか?」

歩きながら、あたしは聞いた。

「うふ。 しばらへ置いに行つてなかつたから見てみよつかなーって思つて」

「そつか……」

大学受験したつて言つてたし、ずっと勉強で買い物とか行ける暇なかつたんだろうな……

もう思いながら、あたしは匂君に付いて歩いた。

しばらへ歩いて着いたのは、匂君がいつも行つているところのメンズのショップ。

「何置うの?」

中に入ると、あたしは聞いた。

「えーと…… Gパンとか」

ショップの中を見回しながら、匂君は言つた。

言つた通りのGパンの棚に向かうのに、あたしは付いて行つた。

棚の前で、選んでいるらしくGパンを眺めている匂君の隣で、あたしも同じように棚を眺めた。

「……ごめんな? 付き合わせて。ナツ、暇だよな。すぐ終わらすから」

「氣を使ってくれたのか、匂君が言つた。

「ううん。しばらく買い物してなかつたんでしょう？ それならゆつ
くり見ていいよ」

あたしは首を軽く横に振つて言つた。

確かに、やることはないけど、あたしは別に人の買い物に付き合
うことは嫌いじゃない。むしろ好きだ。

特に、自分の系統じゃない店で、色々と品物を見るのは楽しい。
一人だと、明らかに買う目的はないというのが店員にもバレバレで、
嫌な視線を浴びてしまつけど、誰かの付き添いなら、どれだけ見て
も構わない。

だから、何気にあたしは楽しんでいた。今日は特に、滅多に来な
いメンズのショッピングだから、あたしは物珍しく店内を見回していた。

そこで、目に入ったのは、セールの文字。品物はダウンジャケット
だった。

もう冬物はセールの時期か。そう言えば、先週行つた時も、セ
ールしてたところもあつたつけ。そんなに安くはなつてなかつたけ
ど……

そんな風に考えながらあたしは見ていた。

「ナツ、どしたの？ 何かあんの？」

「うん。ダウンが安くなつてるなーって思つて
旬君に聞かれて、あたしは答えた。

「時期的に冬物は安くなるけど、まだ寒いからしばらくは着れるし、
今買つた方が得なのよね」

流行り廃れがありそつなの躊躇するけど、ダウンなら今買つても来年も着られそうだし。

男物だから、買つもつはないけど、こんなことを考えるのが好きだ。

「買おつかな……」

旬君は恥くよつて言しながら、ダウンの方へ向かつた。

「買つの?」

あたしもそれに付いていく。

「うん。これ、もう袖とかボロボロだし、そろそろ替えよっかと思つて。ちょうど安いし」

旬君のダウンを見てみると、袖口が破れて、ほつれている。確かに、買い換えた方がいいかもしねない。

「じゃあ、どれにするの?」

「にあるのは黒、カーキ、茶色、紺だけだった。もつとあっただろうけど、売れてしまったみたいだ。」

「どひじょっかなー」

「今のとは違う方がいいんじゃない?」

「やつぱりだよなー。ナツはどうがいいと思つ?」

軽く意見を出したら、今度は旬君から意見を求められた。

「んー……」

考えてみても分からないから、あたしはダウンを一着ずつ取つて、匂君に合わせてみる。

黒……は、似合わないことはないけど、今からの時期に着るんだつたらちょっと重たいかな。

茶色……は、ダメだ。この色は、明るすぎるので、匂君の髪の色とも合わない。

紺……は、あ、結構いいかも。寒々しいかとも思ったけど、意外とそうでもない。茶色い髪の色にも不自然なことはないし、何にでも合わせられそうだ。

「紺かなあ……」

この中では紺が一番いい。それがあたしの感想だ。

「じゃあ、紺にする」

一瞬で返事が返ってきた。

「えつ……いいの？」

決断の早さにあたしは驚いた。

選んどいてなんだけど、本当にあたしが言ったのでいいんだろうか。

「うん。紺がいい」

でも、匂君は笑顔でそう言った。

「わづ……？」

まあ、本人がいって言つながらにっか。

旬君は結局、パンは買わずにダウンだけ買つてもうここへ
あたし達はお店を出た。

「ナツ、どうか飯食いに行かない? 僕、腹減った」
お店を出るなり、旬君は言った。

「そうね。もうお腹時だし」「確かに、あたしも空いてきた。お店の中の時計を見てみると、十
一時を過ぎてこる。二つの間にか、こんなに時間が過ぎていたみたいだ。

「どう行く? 何か食べたいのある?」

「何でもいいよ。この辺って何があるの? あたし、あんまり、飯
食べには来たことないから」

「色々あるよ。歩きながら探す?」

「うん」

当たり前のようひたすら葉を交わして、並んで歩く。

何か、デートみたい。……で、そういうば、これってデートじ
や

あたしは今になつて氣づいた。何でことだらけ。何故が今まで、

そんな自覚がなかつた。

ていうか、あたしつてば普通に楽しんでなかつた?
何よ、ここのほのぼの感は。

でも、何ていうか、旬君つて、緊張感を感じさせないっていうか、年下だからかもしれないけど、気を使わなくて済むっていうか……
彼氏つて感じが全くしない。

……あ、そうだ。旬君で、あたしの彼氏つてことになつてるんだ
つけ……

あたしは、またしてもそんな重大なことを忘れていた。さつきから、こんななんばっかだ。

でも、それだけ実感がない。今、あたしの横に居るのが彼氏だなんて……

横目で旬君のことを見ると、旬君の顔は、どこか違う方に向いている。

何があるのかと思つて見てみると、旬君の視線の先には、ケーキバイキングのお店があつた。

もう一度旬君を見て見ると、旬君の顔は張り付いたようにお店の方に向けられたままで、歩いて通り過ぎながらも、顔だけは残つたままになつている。

物つ凄い見てる……

ここのままだと本当に首だけでも行つてしまいそうだつた。

「旬君」

放つておけ^や、「あたしは声をかけた。

「なつ何?」

旬君の首がいりに戻ってきた。

「もしかして、そこがいいの?」

あたしはお店を指差して叫んだ。

「え、何で?」

何でつて……

「だつて……すい」こ見てたから。甘いもの好きなの?」

「うん……まあ

旬君は少し照れくわわつに頷いた。

やつぱり。この様子だと、よつぱり好きなんだろう。

「じゃあ、行く?」

「え……」

旬君は皿を丸くして、きょとんとした顔になつた。

「お皿、いりにじゆつか

いりのではないけど、同じお店に行つたことがある。確か、バイキングはケーキだけじゃなかつたはずだ。

「いいの? てか、昼飯だし、ケーキは……」

遠慮しているみたいにそつと言つた。

「いいよ。」じつでケーキだけじゃなくて軽食も置いてるし。それがあたしもちよつと甘いもの食べたいから

匂君は、明らかに行きたいはずだ。あたしだって甘いものは好きだし、久々に行きたい。

「いいの……？」

「うん」

まだ遠慮がちの匂君に頷くと、匂君は何も言わずに、まるで花が咲いたように満面の笑顔になつた。

それだけで、嬉しいんだなあつてことは、すぐにわかつた。

「え……匂君、いきなりケーキ？」

バイキングに行くなり、匂君はいそいそとケーキの方に向かつていたのに驚いた。

「うん！」

匂君は笑顔のままで頷いて、そのままケーキを取りに行く。

さつきは、お皿ごと飯にケーキは、って言つてたのに……

周りは殆ど女の子だったのに、さつきとした様子でケーキを取る匂君は、何故かその中に違和感を感じさせなかつた。

「いただきまーす」

旬君は元気よくせりひせりとフォークを握ってケーキを食べ始めた。

旬君のお皿の上には、器用なぐいこせりかつて、乗るだけのケーキが乗っていた。

ショートケーキを一口食べただけで、旬君は今までになくぐらぐら顔を緩ませていた。

本当に好きなんだなあ……

「あれ？ ナツ、食わねえの？」

あつと黙つ間に一 つ皿を平らげた旬君は、次のショートケーキを食べながらこつちを見た。

思わず見入ってしまって、自分のことを忘れてた。

「うん。……美味しそうに食べるなあって思つて
あたしは、見たままの素直な感想を言つた。

「うん。本当に美味しいよ」

旬君は少し恥よじんとした顔で、そう言つた。

「うん…… もうよな」

「なんに幸せやつになつてる。聞かなくても、丸分かりだ。

そんな旬君を見ると、思わず顔が緩んだ。

旬君は、『満悦』という表情で、ケーキを食べ続けていて、あたしはそれを見ながら、自分の皿の上のパスタを食べた。

ふと旬君のカップに目が行った。中に入っていたのはココアだ。

「旬君、飲み物ココアにしたの？」
ちょっと驚いてあたしはきいた。

「ケーキだつたら普通コーヒーか紅茶じゃない？」
しかも、一度今食べてるのもチョコレートケーキ……甘過ぎじゃ
ないだろうか。

「俺、ココア好きだから。ケーキの時でも普通にこれだよ」
旬君はなんてこともないといつよいに言つてのけた。

まさか、そこまで甘いもの好きだったなんて……

「それに俺、紅茶はともかくコーヒーは飲めねえの」
旬君はせつせとケーキを食べながらそう続ける。

「そうなの？ 苦いからダメとか？」

「それもあるけど、飲んだら腹壊すから。多分、合わねえんだな。
飲むんなら、砂糖三つと半分以上牛乳入れないと無理」

「えー？ そんなのもうコーヒーじゃないよ」

旬君の言つ味を想像してみて、あたしは笑つた。

多分それはカフェオレにもならない、コーヒー味の甘い牛乳だ。

「本当に甘いの好きなんだ。珍しいね。男の子でそんなに甘いもの

好きって

あたしの周りの男には、いや、女の子にだってこんなに甘いもの好きな人はいなかつた。特に男は、苦手な方が多い。そうじやなくとも、食べれるけど好きじゃないとか、そんな人ばかりのイメージだ。

「みたいだよな。俺の周囲も嫌いなヤツ多くてさあ。男同士ではこうじうとこつてめつたに来れねえし、今めちゃくちゃ嬉しいんだ」本当に嬉しいといふことが、顔だけでなく雰囲気でも十分伝わつてくる。

「そつかあ」

旬君つて、分かりやすい。そう思った。

「でも、そんなんに甘いのはつかりだつたら体に悪くない？」
旬君のこの食べ具合を見ていたら、糖尿病とか（それはまだ若いから大丈夫だろつけど）具合が悪くなりそうだ。

「全然！ それよく言われるけど、俺、虫歯ですら一回もなつたことねえの。病氣も全然したことねえし」

旬君は少し自慢気にそう言った。

「へえ……すごいね」

若いからなのか、そういう体质なのか、とりあえず、そういうことで痛い目を見たことがないから、旬君の甘いもの好きに拍車がかつたのかもしれない。

「でも次はメシ系取つてこよっかな。ナツは何のヤツ食べてんの？」

いつの間にか、あんなにあった匂君のケーキは、もう残り一つになっていた。

あんなに食べて、まだ食べるんだ。

「カルボナーラと……パスタは他にも色々あったよ。それと、ハムサンド」

あたしは、自分の取ってきたものを答えた。

「ハムサンド? いいな。俺ハム好きなんだ。あとで取りに行こ

つ」
匂君はまた嬉しそうに言ひて、お皿の上のケーキをフォークで刺した。

そんな嬉しそうなところで、言ひこへいけど……

「サンドイッチはなくなつてたよ。あたしが取つたのが最後だったから。また違うのに変わつてたよ」

ここでのバイキングは、品切れになつても続けて同じものは並ばない。一度あたしが取つた後に、確かサラダサンドに変わつていた。

「えつー!?

そのリアクションだけで、匂君の心情が分かる。

ハムサンド一つで物凄く落ち込んでる。

たかがハムサンド、されどハムサンド。匂君ひとつではやうなのだろう。

「……はい」

あたしは、匂君のお皿の上に、ハムサンドを置いた。

「え……」

匂君は皿を丸くして、ハムサンドとあたしを交互に見比べた。

「匂君、食べていよい。あたし、また他の取つてくるから」

「いいの?」

「うん。好きなんでしょう?」

そう言ひたと、匂君の表情は再び明るくなつた。

「ナツ、ありがと! いただきまーす!」

匂君は、どこにでもあるような、正直、コソペリにあるのとせん
なに変わらないそのサンドイッチを、嬉しそうにとても美味しそう
に食べていた。

多分あたしは、匂君のその表情を見たくて、匂君にハムサンドを
あげたんだと思つ。

そしてあたし達は、ケーキを食べながら、雑談をした。

「ナツは食べもんで何が好き?」

「んー.....特にこれが好きつていつのはないかなあ。その時の気分
で変わるから.....あつさり系が食べたい時は和食だし、ひつてりし
たのが食べたい時は中華とか.....」

「へー。俺はこいつらが好き。腹減つたら豚骨ラーメンとか、食べたくなる」

「ああ、お腹空いたらなるよね。でも、あたしは豚骨より醤油かな」

何でか知らないけど、食べ物の話だけだった。
初デートで、こんなに砕けた話をしたのは初めてだ。
でも、楽しかった。

今までの彼氏との初デートは、どこか緊張して、控えめにしていた。少なくとも、いきなりラーメンとか焼き肉の話にはならなかつたし、できなかつたと思つ。

でも今、旬君には包み隠したりすることなく、話している。
多分、旬君の雰囲気が、そうさせるんだと思つ。

いきなり、携帯の着メロが聞こえた。

「あ……俺だ」

旬君がすぐに反応して、携帯を取り出した。

ほんの少し不機嫌そうにしながら、着信を確認している。

「「めん、出ていい? バイト先の先輩からなんだ」
申し訳なさそうに旬君が聞いてきた。

「うん」

バイトの先輩……それなら出ないとしょうがない。あたしは頷い

た。

「いめんな

もう一度謝ると、匂君は電話に出た。

「もしもし?えつ! ?」

電話の向こうの言葉を聞いてか、匂君がいきなり大きな声を出して、あたしは驚いた。

「 そんな 先輩! 僕だって無理ですよー。」

匂君は物凄く必死な様子でそう言つてゐる。

何かあつたのかな そう思いながら、見てると、匂君は黙り込んでしまつた。

「 ちょっと 待つ 」

やつと出た言葉がそんな感じで、多分、相手側に無理矢理電話を切られてしまつたのだろう。

匂君は呆然として、携帯を見つめ、何か考えているようだつた。

「どうしたの?」

気になつて、あたしは尋ねた。

匂君は、悲しそうな顔であたしを見て、言つた。

「ナツ、いめん バイト入つちまつた

「本つ当」めん！ いっから誘つとこで……マジで！」めんな！ 「デートが打ち切りになつて、旬君はあたしを家まで送つてくれている。

でも、さつきからこんな調子で謝つてばっかりだ。

「いいよ、そんなに謝らなくても」

謝られても、あたしは別には腹の立てようがない。

「だつて、バイトでしょ？ それならしちゃうがなによ」

そうだ。しあうがない。いきなり入つてしまつたのなら、旬君が悪いわけじゃないんだから。

そうやつて分かつて、別に腹が立つてたりするわけじゃない。でも、あたしは、どうもすつきりしないといつか、沈んだ気持ちでいた。

多分それは、旬君がバイトだと聞いて、あの時間が終わることを思つて、残念に思った自分がいたからだ。

あたし自身も驚いた。

そして今、何でもないフリをしている。

あつとこつ間に、あたしのホームページの前まで来てしまつた。

「じゃあ……バイト前なのに、送つてくれてありがとつ」
あたしは、立ち止まつて、旬君に言つた。

「ううん。まだ時間あるから……」

匂君はやつらのと、少し寂しそうな顔になつた。

「ナツ、あのや……」

口を開いた匂君を、改めて見上げた。

「今日、付き合つてくれてありがとな。俺、すっげー楽しかった」
匂君は、表情を明るくして、笑顔でやつらを眺めた。

そつか
か
樂しかつた、か

「あ……あたしもつ」

知らない間に口をついていた。

「」の先に続く言葉が恥ずかしいと気付いて、あたしは下を向いた。

「あたしも……今日、樂しかつた、よ……」

自然と声が小さくなつたけど、それがあたしの正直な気持ちだつた。

あたしも樂しかつた。

匂君に会つのはまだたつたの三度目で、匂君のことは殆ど知らない。そんな相手と一緒にいてそう感じる」とはないと思つてた。なのに、今日はとても楽しくて、今日が終わるのが寂しいと思つ自分がいる。

「また……また行こつな！ 今度、ちゃんと埋め合わせやねからー。匂君は今日一番の笑顔になつて、そつとつた。

「うん」

あたしもつられて笑って、頷いた。

頷いたのは勢いとか、こいつしかないからじゃなくて、確かにあたしの意思だった。

「それじゃ、終わつたらまた電話するな」

「うん。待つてる。……旬君、バイト頑張つてね」
そうこうとも、自然と言えた。

「あ」

旬君は何かを思い出したように口元に呟いた。

「ナツ。俺の」と、次からは旬つて呼んで

「えつ……」

何の脈絡もなく言われて、あたしの心臓は跳ね上がった。

「呼んでみて」

旬君は、にっこりと笑っている。

「いっ今…？」

「うん。今」

笑顔を崩さずに旬君は頷いた。
そんな笑顔で言われても……

「…………」

呼んでみようと思つても、それが精一杯だった。
どんどん顔が熱くなるのを感じる。

「……やつぱり今は無理！」
恥ずかしくて下を向いた。

何で、名前を呼び捨てにするぐらいで恥ずかしがってるんだろう
……そんな自分が尚更恥ずかしかった。

「可愛いから許す！」

旬君はいきなりそう言つた。

「なつ何言つてるのっ……」

あたしは、自分でも分かるぐらいに田が泳いで、狼狽えてしまつた。

旬君はそんなあたしを見て笑つてゐる。

「もうつー。早くバイト行かないといけないんじょー。」

「はいはい」
必死になつてるあたしに、旬君はまだ少し笑つていたのがちょっと悔しかつた。

「じゃあまたな！」

旬君は最後にそう言つて、大きく手を振りながら歩き出した。

「うん。またね」

あたしも、そう返して、手を振つた。

そして、あたしは離れていく旬君の背中を、見えなくなるまで見つめていた。

今日、旬君と一緒にいて、あたしは旬君のことを好きになつたのか……それは分からない。

ただ一つ、はつきりとしたのは、あたしは旬君のことを、嫌いになることはないだらうということ。何故かは分からぬけど、そんな気がした。

今のおたしは、旬君との『また今度』を楽しみにしていて、今日が始まるまでの自分と違うのは、明らかだった。

だから、大丈夫。これから、ちやんと付き合つてこけると思ひ。
旬君……じゃなかつた。旬、と……

こんな複雑な気持ちを抱えているあたしが、一年後にはどう変わるかなんて、今のあたしには、想像もできることだった。

「沖田。お前、本当にそれでいいのか?」

俺の目の前で、深刻な顔をしている担任。いや、正確には元担任。

「はい。俺的には特に問題ないです。ていうか、むしろひりじやないと嫌なんで」

元担任の深刻な顔とは逆に、俺はいつもの調子でそう答える。

「だがなあ、やつぱり専門学校に行つた方がいいんじゃないかな? 今ならまだ間に合つてしまふ……」

今日は、高校の卒業式の日だ。

といつても、式は一時間前に終わって、最後のH.R.もあつて、間に済んだ。

他の奴らは解放感に浸つていて、俺だけ呼び出しがくらつてしまつた。もう卒業したつてのに。

呼び出されたのは、進路の話で、だ。

昨日、卒業式の事前指導で久々に学校に行つた俺は、担任に専門学校には行かないで働くということを口で伝えた。

その時の焦りようといったらむしろ笑えるぐらいで、放課後に残れと言われたのを、俺は面倒臭くて忘れてしまい、帰つてしまつた。だから今日、終わるなり職員室に連行されたというわけだ。

「だいたい、『両親とはちゃんと話したのか?』

「はい」

「……何も言われなかつたのか？」

「はい」

元担任は、物凄く顔をしかめている。

でも一応嘘じゃない。

専門学校に行かないっていうのは伝えたし、渋々つて感じだったけど、了承はしてくれた。だから問題ないはずだ。

「沖田。どうして今更進路変更なんだ」

元担任は真剣な顔になつた。

「どうしてつて……まあ、今つて就職厳しいじゃないですか。専門行って、資格取つてもそんなに変わんないし。だからもう今のうちから働く方が得策かなーって思つて」

俺は思い付いたことを適当に並べてそれっぽく言つた。

何でつて言つても、ナツと見合つような男になりたいから。それだけしかない。

「沖田。さう言つてことは、就職になんか当てでもあるのか？」

「え、ないっすよ。だから言つたじゃないですか。今、就職厳しいつて。そんな中で当てなんてあるわけないでしょ」「速攻ではつきりそう言つと、担任の顔が引きつった。マズい」と言つたみたいだ。

「ていうか、行きたくないのに専門行つたって、金が勿体無いだけ
だつてことですつて」

俺は無理矢理フォローを入れて担任を誤魔化そうとする。
親にもいひつ言つたら納得された、いわば切り札だ。

「……じゃあ、沖田。お前は本つ本当にそれでいいんだな?」

念押しするように担任は言った。

やつぱり、経済的なことを言われたら何も言えないとらしい。

「はい」

「……つたく、お前は一年間で進路を変えすぎだ。春の進路希望では専門学校。夏前にいきなり大学受験するとか言い出したかと思つたら、今度は就職。俺が受け持つた生徒の中でそこまで変えたやつは沖田が初めてだよ」

元担任がため息をついている。

「んじや、ヤンヤ。もつ帰つていいつてことへ、つつか帰ります」
俺は鞄を持つて椅子を立ち上がつた。

「…………じゃあとりあえず、就職決まつたら連絡しりよ。進路調査に必要なんだか」

「さいならー」

「おい！ 人の話を聞けー！」

なんか喚いてる担任の声なんて、俺には聞こえてなかつた。

「あ、匂。やつと解放されたかー」

「クラスの打ち上げ、六時からカラオケだつてよ」「廊下で同じクラスのダチが俺に声をかけてきた。

「俺、バス！ 予定あるから」

俺は迷うことなく断った。

「え、来ねえの？ 珍し」

「バイトでも入っちゃったのか？」

二人とも不思議そうに俺を見る。

確かに、俺はいつも行事の打ち上げとか、クラスの集まりには参加してたから、最後で最初の、不参加だった。

「バイトじゃないけど、ちょっとヤボ用！ んじゃなー！」

そう言って俺は軽く走って最後の学校を後にした。

今日は、高校卒業よりも、クラスの打ち上げなんかよりも、大事な用がある。

それは、ナツの家に、初泊まりをするということー。

五日前、ナツと電話をしてた時……

「あのさ、ナツ……」

俺は意を決してナツに切り出した。

「何?」

「あの……次の金曜日、俺、卒業式なんだ」

「あ、そっか。まだ式は終わってなかつたのよね」

「うん……それで、その口、や……会える?」「ガラにもなく、めちゃくちや緊張した。

「うん。大丈夫。……あ、でもいいの? 高校最後なんだし、友達とかと遊んだりはしないの?」

俺の緊張をよそに、ナツはそんな気遣いをしてくれた。

「いや……それは特に、ないんだけど……」

まだ知らないけど、俺はいつぱいいつぱいになりながらもいつついた。

「その、もしナツがよければなんだけど……」

この先の言葉が一番緊張する。でも、言いつつて決めたから、言わないと……

「泊まりに行つてもいい? ナツたちに……」

「言つた……! ついに言つた!」

俺とナツは、付き合い始めて、まだ一度も……してない。キスすらしていない。

いや正確に言えば、付き合つことになつてすぐ、俺が嬉しくてキ

スしたけど、それは何か一方的だつたし、何か違つていうか……
そもそも、俺らは付き合つ前にヤつちやつたわけだから、そこから
順番がおかしくなつてるわけだし……

だから、次にナツとセックスするときは、ちゃんとナツが俺のこ
とを好きになつてくれてから。そう決めて我慢していた。

ナツとは初デート以来、お互いに上手なこと命令が合わなくて、
一度も会えてない。

でも、メールか電話は毎日してて、そのナツの俺に対する態度
とかは、日に日に良くなつてるとじやないかと思つ。

ちゃんと俺のことを『匂』って呼んでくれるよになつたし（最
初に電話で呼ばれた時の、ナツの恥ずかしそうな声は物凄く可愛か
つた）、たまにナツの方からメールをくれる。

だから、もうやるそろいにんじやないか。つうか、もうやるそろ
俺の方が我慢できない。

それで、これでも悩みに悩み抜いた後、丁度俺の卒業式が金曜日
だからとこつのもつて、その日を選んだ。

勿論、ナツが良ければだけど……

「え……」

ナツは、電話の向こうで、明らかに困惑してゐようだつた。

ダメ……か？

俺の心臓はかなり速く鼓動していく、無意識に、拳を握り締めていた。

「うか『泊まりに来ない?』ならともかく『泊まりに行つてもいい?』なんて、男として格好がつかなすぎるだ。

でも、俺の家は親居るし、絶対好きにできないから呼べない。

それに、ナツの家に行ってみたいう願望もあったわけ……

「あ……あの、その……」

ナツの一言一言に、俺は神経を通わせて聞いた。

「あたしの家……狭いし何もないから、来てもつまんないかもしけないよ?」

「これは、遠回しに断られてるんだろうか……それとも……

「それでも……匂がいいなら、あたしは、いいけど……」

「て、ことは、いいのか?　いいんだな?

「うん!　全然いい!」

部屋がどうとか、関係ない。ナツさえいれば、それで十分なんだから。

てなわけで、泊まりが決定したんだけ……

泊まりのKTCヒロヒロとま、つまり、夜のあれの方もOKってことだよな？

ナツだってそれぐらい分かってるだろ？……ダメなら、泊まりOKになんてしないよな？

俺が気にしてこらのやつのことだナツだつた。

でも、ダメにしちゃこりにしちゃ、泊まつなら絶対そういう空氣にならんわ……ていうか、絶対そういう空氣にするじ。

その時のことを思いつと、楽しみで楽しみでしようがなかつた。

といつあえず、一度家に帰る。

ナツとは、五時にナツの会社の前で待ち合せとこりのことにいつてゐる。だから、重たいアルバムとか卒業証書を一度置きに戻つたのと、いるものを取りに戻つて來た。

「ただいまー」

そう言つてコビングへ行くと、母さんがワインディングモードで食いついていた。

「あら、おかえり。早かったのね」

母さんはそう言つて、ちらりと俺を見ただけでぐいコビングモードに視線を戻した。

「うん。 またすぐ出るから。 每飯は？」

もうすぐ二時だし、呼び出しをくらったせいで遅くなつて、まだ食べてない。流石に腹が減つてゐる。

「チャーハンが残つてゐるから自分で温めて食べて」

息子のために動いてくれるような気配はないから、俺は言われた通りに自分でやろうと台所に向かつた。

「あ、母さん。俺、今日は泊まりだから」

忘れる前に云えておく。どうせダメだとは言わないだらうし。

「はいはー

案の定の返事が返つてきた。

いつもとは変わらないけど、何か、俺が専門学校に行くのをやめるつて言つてから、軽く見放されてる気がする。
まあ、別に気にしてないけど。

チャーハンを食べたあと、俺は自分の部屋に行き、泊まりの準備を始めた。

着替え……は、いいや。制服で行こう。スウェットだけ持つてへか。

俺は、プリントとか文集やらの冊子とか、鞄の中身を取り出していった。紅白饅頭を見つけたから、それは開けて食べる。

食べながら、空になつた鞄に、その辺に落ちてたスウェット上下

を押し込んだ。

あとは何もいらないか。どうせコンビニ寄るし、そんな時に買えば十分だ。

楽しみだなあ……

時間が経つ度にその気持ちは強くなつていった。

五時五分。

そろそろだな。

時間を見て、俺はナツの会社を見上げた。

今日もまた、三十分も早く来てしまった。でも暇だつたし……途中で寄ったコンビニで少しだけ立ち読みしてたけど、頭の中がナツだらけだつたから、漫画の文字が全く入らなかつた。

それよりは、何もすることができなくとも、いつもしてナツを待つてゐ方が楽しかつた。

好きな人を待つのは、楽しいことだと思つ。

今日は、どんな服を着てるのかな、とか、今どの辺にいるのかな、とか、向こうにも俺のことを考えていてくれてるのかな、とか……好きな人のことだけを、ずっと考えていられる時間だから。

「匂」

はつと気付くと、ナツが出入り口から出てきて、小走りでこっちに向かってきていった。

「ナツ！」

久しぶりにナツの姿を見て、自分でも顔の力が緩むのが分かった。

「ごめんね。待った？」

「ううん！ 全然」

俺は首を横に振った。

ナツとの待ち合わせは、いくらナツが遅れても、全然待つことになんかならない。ていうか、俺が早く来てるだけだし。

「あれ……匂、制服なの？」

ナツは俺を見て言った。

「うん。もう着納めだし。あ、そうだ」

俺は制服を着てきた一番の理由を思い出し、学ランの第一ボタンに手をつけた。

少し強く引っ張るとブチッという音をさせて、ボタンは取れた。

「はい」

俺は、それをナツに手渡す。

「え？」

ナツはきょとんとしている。

「貰つてよ。俺、夢だつたんだ。彼女に第一ボタン渡すの」

これが目的だった。

卒業の定番だけど、中学の時はブレザーだったから、やつたことがなかつた。

高校に入つてから、年上の卒業式の時に、ボタンを貰いにいく女子を見て、初めて知つた。

第一ボタンは、その人の心に一番近いから欲しいものなんだつて。
だから、それなら俺は一番好きな人にそれを渡したいと思つたんだ。

俺の気持ちを、好きな人に……

ナツは、暫くじつと俺を見て、吹き出した。

「え、何？ どうかした？」

吹き出した意味が分からず、俺は首を傾げてナツに聞いた。

「だつて、それ女の子の夢みたい。好きな人の第一ボタンを貰つて」

クスクスと笑いながら、ナツは言った。

確かに普通は女子だけみたいだけどさ……」「うううのに拘るの。

「ナツは、あんまり気にしない？ うううの……」

だとしたら、かなり恥ずかしいことをしたのかもしれない。

「ううん。気にしないっていうか、あたし、初めてだから。中学の時も高校の時も、男子はブレザーだったし、貰えるような人、居なかつたから気にすることもなかったの」

「ここは、俺が初めてってこと?」

「……そつなる、かな? 少なくとも、この風に言われたのは初めて」

そう言つて、笑いながら、手を差し出した。

「貰ってくれんの?」

「だつて、くれるんでしょう?」

ほんの少し唇を尖らせたナツが、可愛くて、俺は笑つた。

「へへっ……はい」

差し出されたナツの手に、俺の第一ボタンを置いた。

「ありがとう」

少し照れくさうになつて、ナツは言つた。

「どういたしまして」

俺はもう満足だった。

ナツが、俺の気持ちを受け取つてくれたといつことだけで。

「あ、そうだ。旬、卒業おめでとう」
ナツは思い出したよつこをついた。

「普通、じつちが先よね

「あ、そっか。忘れてた」
ナツに言わされて、俺も思い出した。

卒業したっていうのは頭でちゃんと分かつてたけど、気持ち的に
はあんまり実感がなかつたっていうか、それがめでたいことなんて
感じはなかつた

「何それ

ちょっと呑れた感じでそつまくしてナツはまた笑つた。

「へへっ

俺も一緒に笑つた。

俺は、ナツと一緒にいると、それだけで笑えるようになつっていた。

11 彼女の部屋で（前編）

ナツが晩飯の材料を買つと言つて、俺達はナツの家の近くのスーパーに寄つた。

「旬、何食べたい？」

買い物力、ゴを持つて俺に尋ねるその姿は、まるで新妻で、物凄く可愛い。

いいなあ。新妻かあ……

「旬？」

「え？ ああ、何でもない。てか、カゴ持つよ」
ナツの声で、俺は妄想の世界から返つてくる。
そしてナツの持つカゴに手を伸ばした。

「いいよ。そんなに買わないだろ？ から大丈夫」

「でも、彼女に荷物持たせて歩くわけにもいかねえもん。俺が持つよ」

男として、彼氏として、ちょっといっこ見せよつと思つて、
俺は言った。

「……じゃあ、ありがとう」

少し照れくさそうにナツは言つて、俺にカゴを渡してくれた。

「それじゃあ、何食べたい？」

改めて、という風にナツは言った。

「俺が決めていいの？」

「うん。だつて、旬の卒業祝いだし」

そんな名目があったのか……

俺は単に、初めてナツの家に行けるのと泊まれると、それぐらいしか考えてなかつた。

でも、それなら、初めてナツの手料理も食べれるわけだ。

俺のための料理があ……

いいなあ、この響き……

「じゃあ、肉食べたい」

ナツの手作りなら何でもいい。でも今は、腹が減つてゐるから、がつつり食いたい。

「肉？ 何の？」

「それは何でもいいよ

「……んー。じゃあ先に肉のところに行こ。時間ちょっと遅いから、なくなっちゃうかも

キビキビと動いて、ナツは俺を肉のパートナーへと連れて行つた。

「あー……やつぱりあんまりないかな。昨日買い物しつかばよかつた」
ガランとしているコーナーを見て、ナツが残念そうに、ちょっと悔しそうに言った。

ポツポツと残ってる肉のトレイを見て、考えている。

「何かナツ、主婦みたい」

俺は思つたままの感想を言った。

「えつ……それっておばさんくさいってこと?」
かなりショックを受けたみたいに、ナツは言った。

「ううん。新妻っぽいってこと。ナツつていに奥さんになりそうだよな」

そう言つと、ナツは赤くなつた。

「なつ何言つてんのつ。……それよりどうじよつか、晩ご飯
明りかに誤魔化そうとする様子でナツは言った。

バレバレな感じが何か可愛い!-

「豚挽き肉と鶏挽き肉ぐらいしかないなあ。合ひ挽きがあればハンバーグでもできるけど……」

「そつだなあ……」

可愛い奥さんのナツを見ながら、俺は相づちを打つた。

ふと、見てみると、隅の方に餃子の皮のパックが置いてあつた。

「ナツ。餃子は？ 餃子って豚だよな？」
餃子の皮を見せながら、ナツに言った。

「え……うそ。もうだけど」

「じゃ、餃子にしてよ。餃子パーティー…」
思いついたままに、俺は提案した。

そう考えると、すいごく餃子が食べたくなった。

「…………いいの？ 包むのとか時間がかかるし、遅くなつたらやめよう。」
ナツは、微妙な表情になつて言つた。

「いいよ。俺も手伝う。あ、もしかしてナツは嫌？」

「嫌つてわけじゃ……その、餃子でもこいんだけど……」

「何？」

俺が聞くと、ナツは物凄く真剣な顔になつて、俺を見上げた。

「その…………にんにく抜きでいい？ 臭い、あつくなつちゃうから」

その表情で何を言つのかと思つたら、そんなことだった。

いや、女人にとっては『そんなこと』ではないか。俺は別に気にしないけど……どうせ同じもん食つんだし……

あ、でも、今日は初泊まりだし、やめといた方がいいかな。に

んにく臭さでムード壊したくないし。

ていうか、俺がナツに臭いって思われたくないし。

「うん。いいよ」

俺は頷くと、ナツはほほとした表情になつた。

「それじゃあ、今日は餃子ね。他の材料も買わないと」

一気に張り切り出したナツは、やつぱり新妻みたいだった。

「じゃあ……もひこるものないかな……」

食材を入れていっぱいになつたカゴの中身を見て、ナツは買いたい忘
れがないか確認している。

「あ、匂。歯ブラシとか買わないと。ついでにペンクとかしか予備
の分ないから……」

「もう買つてるよ。待ち合せの前に、コンビニ寄つたから

「えつ、準備いいね」

「だひー？」

そう言われたけど、「コンビニには歯ブラシを買つに行つたわけじ
やなく、他のものを買つ予定で行つた。

そしたら、偶然歯ブラシが目についたから買つただけだ。

「あ、そうだ。ナツ、酒買おう。」

大事なものを忘れてた。

今日はパーティーだから、パーツとやらないと。

俺は酒売り場を見つけ、カゴを持ったまま向かった。

「ちょっと……匂！ 待って！」

ナツは俺の腕を掴んで引っ張った。

「未成年が堂々とお酒のコーナーに行かない！」

少し強めの口調で注意するように、ナツは言つた。

「何だよー。未成年だから酒はダメって？ 固いこと言つなんお

いや、普通にダメだけだ。（酒は二十歳になつてからー）

「そうじゃなくて！ 匂、今制服でしょ！ 一人で勝手に行かないの！」

怒っているようすで、まるで小さい子供に叱るみたいな口調が可憐い。（それが俺に向けられてるのはちょっと気になるけど）

本当に、ナツは色んな表情するなあ。

「ほら、行くよ」

ナツは、俺の腕を引っ張つたまま、酒のコーナーへ行った。

これって、腕組んでるみたいでちょっとここ感じじゅ……

て、思つたけど、ナツがビールをカゴに入れる時に、その腕は自然と離れてしまった。

買い物を済ませた後は、いよいよナツの家だ。

「匂、大丈夫？　「ごめんね、重い方持つてもらつて……三階だから、ちょっとキツいかもしないけど」
ナツのコートのエントランスを抜け、階段に差し掛かつたところでナツが言った。

「ううん！　俺が持ちたいから持つんだし。それに、全然重くないから大丈夫」

俺は、余裕の笑みを浮かべた。

いつもバイトじゃ瓶ビールが入つたカゴを持ち運んでるし、缶ビール四本が入つてる袋くらい本当に余裕だ。

でもこれで少しはナツにいいとこを見てもらえたかな。

ナツの部屋は、三階に上がつて右に曲がつて、二つ目についた。

「本当に、あんまり期待とかしないでね。一応掃除したけど、本当に狭いし、何もないから……」

部屋の鍵を開けながら、ナツは念を押すように言った。

「そんな言わなくても大丈夫だよ」

ナツの部屋つてだけで、俺には十分だから。心の中でせつ付け足した。

「じゃあ、どうぞ」

ナツがドアを開けて、俺を中に進めてくれた。

「お邪魔しまーす」

さすがにドキドキしながら、俺は部屋に入った。

綺麗に整頓されてる玄関で靴を脱いで、中に入った。そこから短い廊下が伸びていて、部屋に繋がっている。

ナツが部屋に行く後ろについて、俺も部屋に向かった。

ナツは薄暗い部屋に電気を点けて、エアコンをつけた。

「匂。荷物、こっちに持ってきて」

そう言ってナツは台所の方に行く。

俺は、じっと部屋を見回した。

ナツの部屋は十畳ぐらいの1Kだった。

壁際にベッド、真ん中にローテーブル。端の方にテレビ……そんな感じで、ナツは狭いと言つたけど、一人暮らししたら十分なぐらいだ。

それに、建物 자체はそんなに新しくはないけど、それでもナツが綺麗に使つてるのは一目瞭然で、部屋のどこを見てもきちんと整理整頓されてむしろ広く感じた。

俺とは大違ひだ。

「……匂。あんまり見ないで」
ナツが恥ずかしそうに言つた。

「いやー。やつぱり女の人の部屋だなーって思つて。すっげー綺麗
だし」

「そう? よかつた。掃除して……」
ほつとした様子でナツは言つた。

そう言いながらも、ナツのことだから、普段からちゃんとしてそ
うだけビ。

「じゃあ、すぐに準備するからね。あ、包むの手伝ってくれるんだ
つたら、手、洗つといてね。廊下出て右側が洗面所だから」
ナツはスーパーの袋から材料を取り出しながら、そう言つた。

「うん。分かった」

俺は、ナツに言われた通りに、洗面所へ向かつた。

洗面所は、脱衣所と一緒になつてるみたいで、すぐ横には風呂が
あつた。

そこでふと思つた。

今日、泊まりつてことは……もしかして、ナツと一緒に風呂にも
入れちゃつたりするかもしれないのか…?

ここでは、体洗い合つたり、一緒に湯船浸かつたり、あんなことしたり、こんなことまでしけやつたり……

俺の妄想は膨らんでいく。頭の中に、リアルなナツの裸まで浮かんだ。

すっぽー楽しみ！

まだ一緒に入るとは決まってないのに、俺（と俺の下半身）は、張り切りまくっていた。

手を洗つて部屋に戻ると、ナツは台所で挽き肉をこねていた。俺に気づいたのか、すぐこっちを向いた。

「ねえ、旬。餃子なんだけど、そっちでホットプレートで焼く？そっちの方がパーティーっぽいでしょ？」

「コツと笑つてナツはそんな提案をした。

「あ、いいな、それ。そうしよ！」

俺はすぐに頷いた。

「じゃあ、もう少しあと待つてね。すぐ持つてくから。テレビでも見てて」

「うん」

俺は、ローテーブルの横に用意されていた座布団に座つて、テレ

ビをつけた。

ちょうどゴールデンタイムだったから、テレビに映ったのは人気のバラエティーで、俺はそれを見始めた。

でも、タイミングが悪かったのか、すぐにCMに入ってしまった。

何となく、部屋を見回してると、ふとベッドに視線が行った。

白いシーツに、薄いピンクのかけ布団と枕。
シンプルだけど、女人のだとすぐに分かるベッドはシワ一つな
く整ってる。

あと何時間かしたら、俺とナツはそこに居るのかな……

今度は、前にホテルで触れた、リアルなナツの感触まで蘇つてき
た。

ヤバい……ナツの部屋のものって全部（つていっても、風呂とベ
ッドだけど）口に妄想に繋がる。

でも、正直飢えてるから、しょうがない。

「匂」

「うお！？」

後ろからナツの声が聞こえ、俺の心臓が跳ね上がった。

「何？ どうしたの？」

振り返ると、お盆を持ったナツが皿を丸くしていた。

「いや！ 何でも！」

俺は首を横に振つて皿一杯で否定した。

「やう？」

首を傾げながら、ナツはお盆をローテーブルに置いた。

お盆の上には、ボウルが一つと、餃子の皮と、皿が乗っていた。

「この二つって違うの？」

俺はボウルを指さしてナツにきいた。

「うん。 こちちが、二つと白菜ので、こちま、大葉とネギ、ナツは二つずつ指をじて教えてくれた。

「大葉？ 大葉って、シソだよな？」

「うん。 あ……もしかして嫌いだった？」

「ううん。 嫌いじゃないけど……でも、餃子にシソって食つたことない」

「そつの？ これ、やっぱりして美味しいんだよ

「へー……楽しみ
ナツのちゅうと珍しい具材に、俺は興味津々だった。

「じゃあ、旬はそつち詰めてね。あたしはこちやりやるから

そう言つて役割分担を決めて、早速ナツは手際よく詰め始めた。ナツの方は、慣れてるみたいで、綺麗に早く出来上がっていく。

俺の方はどういつと……

「旬、そんなに包んだら皮が破けりやうよ」
ナツに注意を受けていた。

「大丈夫だつて」

俺は笑つて言いながら、皮の上に乗つた山盛りの肉を包んでいく。

破かないように、慎重に伸ばして……

「ほら、できた」

破かずに包めた俺は、それを皿に置いてナツに見せた。

「なんか不細工……」

ナツはちょっと口を尖らせた。

確かに、ナツのに比べたら、丸々と太つてゐるみたいた。

「食つたら一緒だつて」

俺が言つと、ナツは小さく『もうひ』と言つて、笑つていた。

でも結局、俺のデブ餃子は包むのに時間がかかる、さつさと自分の方のを終わらせたナツが半分ぐらい手伝ってくれた。

「……もうそれからかな」

そう言つて、ナツはホットプレートの蓋を取つた。すると白い湯気が立ち上る。

「おおー！」

湯気の中から現れた餃子を見て、俺は声を上げた。

「お目に移すね」

そういうので、カツ丼フライ返しを使つて目に餃子をのせた。

「 いわちが、二ラと白菜で、いわちが大葉とネギね」
二つに分けて皿を置くと、ナツはホットプレートに次の餃子を乗せようとする。

「ナツ。先に乾杯しよ！」

ナツを止めて、俺は缶ビールを持ち上げた。

「あ、そうね」

ナツは手を止めて、缶ビールを手に取った。

「じゃあ、旬。改めて、卒業おめでとう」

「うん。ありがとう」

カツンと缶が当たつて、乾杯をした。

プルタブを開けて、俺は一口ビールを飲んだ。

「あーー！ うまい！」

久々のビールに、声が出た。

「旬、おじさんみたい」

ナツもビールを一口飲んで、笑いながらそう言った。

「だつて、楽しい時の酒つて美味しいじゃん。いつただつきまーす！」

俺は早速箸を持って、シソ入り餃子をつまんだ。

ポン酢とラー油をつけて口に入れた。

「……美味しい！ これ、すっげー美味しいよ、ナツ！」

口の中に広がった味に、俺は絶賛した。

ナツの言つた通りシソの味がさっぱりしていて、それでも物足りないことはない。この組み合わせは絶妙だった。

「ね。スタンダードなのと一緒にたら飽きないでしょ

ナツも、次の餃子を焼きながら、嬉しそうに言つた。

「うん！ つうかこれ、ビールに合ひつなあ」

俺はビールを飲み、餃子を二個三回と食べていった。

「やつぱりおじさんみたい」

ナツが笑つて、俺も笑つた。

それから、俺達は、「ご飯を食べて、酒を飲みながら、色々喋ったり、テレビにつつこんで笑ったり……とにかく楽しい時間を過ごしてた。

気がつけば、もう九時半を回っていた。

「なあ、ナツ。もう一本開けよー」

俺は、一本目の空になつたビールを振つて、ナツに言つた。

「ダメ。未成年がそんなに飲んだら体に悪いでしょ」
ナツはそう言つて、首を横に振つた。

「俺、酒は結構強いから、大丈夫だつて」

「そんなこと言つて、酔つてるじゃない」

「ほろ酔いだからあと一本ぐらい大丈夫〜」

「ダメ」

ナツはなかなか首を縦に振ってくれない。
ていうか、かなり年下扱いされてる気分だ。

「なんだよ〜。ナツは居酒屋で悪酔いするくらい飲むくせに
ちょっといじけて俺はあの日のことを口にした。

「なつ……何言つて……」

「あの時さあー……俺、本当は十時上りだったの、閉店までいることになつたやつたし」

本当はそれほど氣にしてない。
あの日の分は、店長が給料に上乗せしてくれたし、それに何よりも、ナツに出来つことができたから。

しかし、ナツは黙ってしまった。
空気が微妙なものになる。

「じめんり……ちよつとふざけたやうだ……」
俺は慌てて謝った。

ナツにとって、あの時のことは記憶に残らなかったよな……」
ナツは首を横に振つてくれたけど、微妙な空気はそのままだった。
「なあ、ナツ……その、ちゃんとショックだった？ 元彼と別れたこと……」

聞いていいことなのかどうか迷つた。といつかこのタイミングで聞くのはどう考へてもおかしい。

でも、どうしても氣になつてしまつて、しうがなかつた。

ナツが、俺ところの時でも、元彼のことを忘れないんぢやないかつて……

「ショックつていうか……そんなんじゃなくて、やっぱり悔しいの」ナツは下を見ながらそう言つた。

「あたしは、相手にあんな風に思つてもらいたくて付き合つてたわけじゃないのに……あたしなりに、相手のことを考えて付き合つてたのに……」

「ナツ……」

辛そうなナツを見て、俺も何だか胸が痛くなつた。

「それなのに、あんな『デリカシー』のない発言する人だとは思わなかつたの！」

ナツがいきなり声を大きくして俺は驚いた。

『デリカシー』のないつて……あれか。不感症発言。

確かにそれはひどいよな。普通言わないし。つうか、ナツは全然不感症じやないし。

「……やっぱり、付き合い方から間違えたのかな……」

ナツはそう呟いてビールを一口飲んだ。

「付き合い方……？」

「うん……元彼とはね、合コンで知り合つたの。友達に付き合わされて行つたんだけどね。……それで、相手の一人が、友達のことを好きになつて、二人が付き合うことになつたの。あたしの元彼は、その人の友達で、一緒に話してて、お互に友達が付き合うことになつたから、俺達も付き合おうか、って言われて」

「……それで付を今こ始めたの？」

「うそ……あたし、昔つからじとなのばつかりなのよね。相手に流れれるおまになつてゐつてこうか」

ナツはやう言つて苦笑した。

「流されるあたしが悪いのは分かつてゐるが……なんか、ここまでくると男運ないのかなーって思つたやつ」

ナツは笑つてほいるナツ、何だか、寂しそうだった。

俺は、ゆづくとナツに手を伸ばして、ナツの体を引き寄せた。
そして、腕の中にナツを収めて、ぎゅううと抱き締めた。

「え……」

腕の中で、ナツは驚いたような声をあげた。

「匂……どしたの？ いきなつ……」

「ああーつづいたくなつたから。ナツのこと

どうしてかと聞かれたら、ナツのことが愛しくなつたから。
それだけだつた。

愛しつて言葉の意味が、初めてちゃんと分かった気がする。

今、俺の腕の中にいるナツみたいに、温かくて、柔らかくて、優しくて、とても心地いいものなんだ。

俺達の出会い方も、普通じゃない。付き合い方だって俺の方から言つて、ナツは流されただけだったのかもしれない。

でも、俺はそれを後悔させないよ。

絶対にナツを悲しませたりなんかしない。

俺は抱き締めていた腕を緩めて、ナツの髪を触った。
サラサラしてて、気持ちいい。

「ふふっ……くすぐつたいよ」

ナツの首に指が触れた途端、ナツは首を縮めて笑った。

「ナツ、首弱い？」

「匂の触り方がくすぐつたいの」

ナツが俺を見上げた。

思った以上にナツの顔が俺の顔の近くにあった。

俺が頬に触れる、ナツは恥ずかしそうに目を伏せた。

「ナツ……好きだよ」

そして、俺達は、恋人になつて初めてのキスをした。

1.1 彼女の部屋で（前編）（後書き）

プログ始めました！執筆状況などをお知らせしていただきたいと思います。作者紹介ページからHOMEPAGEにリンクしてあります。ぜひ覗きにきてください

12 彼女の部屋で（後編）（前書き）

ほんの少しですが、Hッチなシーンがあります。苦手な方は「」注意下さい。

12 彼女の部屋で（後編）

唇を離して、俺達はお互いの顔を見合つた。

ナツの頬は、ピンク色に染まつてて、温度も少し高かった。

俺は、その頬に軽くキスをして、もう一度、ナツと唇を合わせた。

今度は、そつと舌先でナツの唇を舐めた。

同じものを食べたせいか、あんまり味という味はしなかつた。

ナツは、俺の舌を受け入れてくれて、俺に合わせて、優しく舌を絡めてくる。

「の間みたいに、されるがまだたら嫌だから、俺もナツを、精一杯かき回した。

「んっ……」

ナツが苦しそうに声を漏りりすと、俺は角度を変えて、何度も何度も繰り返した。

ヤバい。興奮してきた。

だんだんと激しくなってきて、俺は理性が飛びそうになっていた。

……この雰囲気なら、飛ばしても大丈夫か？

俺はそつとナツの背中から腰を撫でた。

ナツの体がピクリと動く。

そのまま手を進め、ナツの服の裾から、侵入していく。

「やつ……ダメ！」

ナツが体を後ろに引かれて離した。

俺はびっくりして固まるしかない。

ダメ……？ この状況で……？ しかも、いやつて言った……？

俺の頭が真っ白になる。

ナツに拒否された。

それだけがショックだった。

「さつ……先にお風呂入ろう？ それに、後片付けもしなくちゃ」
ナツは田を泳がせながらそう言った。

その言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

お風呂……？

「あ、そつか」

そういえばそんな楽しみもあったんだ。と、俺は思い出した。

続ければ風呂の中であうことか。
ちよつと想像して、こやけてしまつ。

「じゃあ、お湯溜めるから……溜まつたら、匂、先に入つてね」
ナツは俺の腕の中からするつと抜け、立ち上がりながら言った。

「え！？ 一緒に入んねえの？」

俺は思わず声をあげてしまった。

ナツは皿をぱちくりさせ、顔を少し赤くしている。

「入んないよ。片付け、先にやつちやいたいし」

ナツはテーブルの方に皿をやりながら言った。

「えー。一緒に入るーよ。片付けなんか後でいいじゃん」

俺はナツの手を握つて言った。

せっかく楽しみにしてたのに、おあずけなんてあんまりだ。

「ダメ。お風呂入つた後はゆづくらしたいじゃない

「じゃあ、片付け終わつてから一緒に入る？ 俺も手伝つから

「それだと時間かかるでしょ？ ……匂、一人じゃお風呂に入れな
いの？」

「入れるけど……」

ナツの言い方はずるい。

そんな風に言われて、入れないなんていつたら、彼氏としてか
っこ悪い。

ただでさえ、たまに年下扱いされてるのに……

「じゃあ、先に入つておいてね」
ナツはナツ言つて、風呂場の方へと行つてしまつた。

あーあ……かなり期待してたのに。

脱衣所で服を脱ぎながら、俺はまだ少し納得できぬいでいた。
しかも、ナツの態度つて結構あつさつしてないか?
チューしてる時はかなり激しかつたのに……

ん……？ 待てよ？

（お風呂入つた後はゆつくりしたいじゃない）

あれつて……ゆつくり『したい』つて……

俺の頭の中に、妄想ビジュヨンが溢れ出す……

そういうことか。
そつか。ナツもやつぱりそうだよな……

俺の中の勝手な妄想で、俺は納得できた。

まあ、後でゆつくり楽しめると思えればな！

俺は、こつもよつ念入りに体を洗って、風呂を出た。

スウェットを着て部屋に行へと、ちゅうぢナツも片付けを済ませたところみたいだった。

「あ、匂。出た?」

ナツは盥所から部屋に顔を出して俺に向つた。

「ドライヤー、そこに置いておいたから使つてね」

「あ、うん。ありがと」

「じゃ、あたしも入ります」

そう言つて、ナツは部屋の端にあるチーストから、パジャマヒト下着らしきものを出して、風呂場へ行つた。

ナツって寝る時、パジャマ派なんだ……
パンツとか、ブリジャーは下から一番田か……

ちよつと戻を出しを開けてみたい衝動に駆られたけど、そこままでしたら変態だし（否定はしないけど）やめておいた。

俺はナツが用意しておいてくれたドライヤーで、軽く頭を乾かす。

あ、そうだ。

肝心なことを思い出し、俺はドライヤーを止めて、持ってきた鞄をあさる。

中から出したのは、コンベーの袋。さらにその中から取り出したのは、箱入りのコンビーム。ナツとの待ち合わせの前にコンベーに行つたのは、これを買ったのだ。

それで近くの棚に歯ブラシがあつたから、ついでに買つたというわけだ。

俺は箱を開けて、考える。

何枚いるか……

ちなみにこの箱は十枚入りだ。

何枚必要になるか、まだ分からない。

俺的には何回でも大丈夫な気はするけど、とすがに十回もしないだろうし……

一、二回ぐらいか？ や、でももしかしたら四回かも……

考へても分からぬから、俺はとりあえず五枚を、枕の下に入れてしまつた。あとは、ティッシュとパニ箱を、さづなくベッドに近づけておく。

よし！ こんなもんかな。

俺は、床の準備が整つたこと、一人頷いて満足する。

あ、歯磨いてない。

「コンベリーの袋の中にあつた歯ブラシを見て、今更になつて思い出す。

まだナツは出でこないだろ？ から大丈夫か。

そう思つて、俺は歯ブラシを持つて洗面所へ行つた。

そーっと洗面所を覗いてみると、まだナツが出てないことが分かつた。

チャポンという音が聞こえて風呂の方を見てみると、シルエットでナツが浴槽に浸かつてるのが分かる。

なんか、逆に残念だな。

漫畫みたいなお風呂でばつたりとかあればいいのに……

とか、そんな淡い期待をしていた俺は、ちょっとがっかりする。いいけどさ、別に。

俺はいつもより念入りに歯を磨いて、いつもより念入りにうがいをした。

洗面所に置いてある「ミラープロ」、ナツのピンクの歯ブラシが入れてある。

俺はその中に俺の歯ブラシを入れた。

うん。ピンクと青。ナツと俺。いい感じだ。

何度も角度を変えて見て、頷いた。

その時、力チャツと音がして熱気が漂ってきた。

ふと見ると、風呂場の扉が開いて、白い湯気が流れてくる。

そこから、濡れ髪、濡れ全裸のナツが出てきた。

バチッと一瞬で目が合った。

「…………きやあああーー！」

ナツは顔をひきつらせて、悲鳴を上げ、勢いよく中へ引っ込んだ。

「つおつー？」

俺はその悲鳴に驚いた。

「何でそこに居るのーー？」

風呂の中からナツの声が聞こえた。

「何でつて……歯あ磨いてて……あー 別に覗くつとしてたわけじやねえよーー？」

俺はあらかじめ弁解しておく。

セリヤあわよくばとは思つたけど、確信犯じゃない。そんな誤解
われれるのよ」めんだ。

「……みつ見た！？」

「へ？」

「あ……あたしの……」

ナツの声が恥ずかしさにつぶさくなる。

ああ。裸か。

「大丈夫だよ。一瞬だつたし、見てないから」

俺はそう言つておく。
嘘だけど。

本当は、一瞬だつたけど、上から下まで全部見た。
ナツは油断してたのか、隠してなかつたし。

「じ……じやあ早く出でつて！ あたし、服着るんだからー。」

俺的には別に田の前で着でもうつていいいんだけど。
そもそもすでに一回見てるんだし。それにあとでまた見るんだし。

「はーはー。んじや、出るからなー」

俺は思つてゐる」とは裏腹に、顎きながら、洗面所を出た。

お約束バンザイ！

部屋に戻つてから、俺は一人でガツツポーズをした。

やつぱ生のナツはいいよなあ。

やつとき見たナツの体を、思い浮かべた。

特に、おつぱい。

ベッドに寝じろんで、天井に向かつて手を伸ばした。
そこにはないナツのおつぱいを、掴んでみる。

すつげー柔らかかったよなあ……

あの日、触つた感触を思い出して、手を動かしてみる。やつぱい
そこには何もないけど。

女人つていいよなあ……あんなにいモノついて。

つか、ナツのおつぱいは絶品だしな。

マジでナツが俺の彼女で良かつた。

これからは好きに触つていいわけだし……

あ。……てことは、あのおつぱいは俺のものつてことか！

「わっ！ マジで？ マジでいいの？ これからは俺だけがナツ
のおつぱいにいろいろなことしていいのー？」

「わー……最高峰！」

テニシヨンの上がった俺の頭の中には、ある歌が浮かんだ。
俺は『気分がよくて、口からでもままに歌つた。

「ナツのオッパイいいオッパイ・すいこだへすいこだへ」

某童謡のコズムにのせて、そのタイトルは『ナツのおっぱい』
『田だへこマジヤマロでてきてこる・でかいぞへでかいぞへ』

「できてないから

「うおー？」

突然聞こえてきた匂いの手（？）に俺は驚いて跳ね起きた。
この間にか、ナツがパジャマ姿でそこに立っていた。
ちょっと恥いた感じの目で俺のことを見ている。

「あ……あはつ。聞いてた？」
俺は笑つて、「まかそつとする。

「もつ……なんて歌を歌つてんのよ」

ナツは呆れたように言つて、タオルで髪を拭きながら座布団の上
に座つた。

「ナツのおひばこが最高つて」とを歌った歌

「ナツじやなくて。…… もう。向こうへんのよ
ナツは顔を赤くした。

そして、ドライヤーで髪を乾かし始める。

「おひばこが最高つてんのよ……」

「え？ 何？」

ドライヤーの音で聞こえてなかつたみたいで、ナツは聞きた返して
みる。

「ナツはめぢやくひやいこ女だつて讃めたのー。」

俺が畠つと、ナツは一瞬キヨトンとしてすぐさまつも真つ
赤になつた。

「なつ…… 何で向はそんな恥ずかしいと畠つのー。」

「本当のことなんだから、恥ずかしくなんてなによ。あ、ナツ。も
しかして照れてる？」

「照れてないー。」

そう言つて、ナツは俺に背中を向いた。

ムキになつて…… やっぱり照れている。

そんなナツの背中を俺は横になつてじーっと見ていた。

ドライヤーの音が止み、ナツは「ンセントを抜いて片付け始めた。

「ナツ、終わった？」

俺は待つてましたと言わんばかりに起き上がった。

「うん」

ナツは髪をブラシでとかしながら頷いた。

「おいで！」

俺は両手を広げてナツを待つた。

下心が丸出しだったのは自分でも分かつたけど、隠すよつた余裕なんてなかつた。

「……あたし、犬とか猫じゃないのよ」

口を尖らせながらもナツは俺のそばに寄つてくれる。

「犬とか猫より可愛いよ。ナツは」

俺はナツを抱き締めた。

ナツはすっぽりと俺の腕の中に収まつた。

「もう……また変なこと言ひ」

ナツが俺を見上げる。

その瞬間に、俺はナツの唇にキスをした。

「ナツ……」

俺はナツをベッドに倒して、その上に重なった。

「いい……？」

Jの期に及んで、聞いてしまった。

情けないけど、慎重にいきたかったんだ。
ナツのこと、大事にしたいから……

「…………うん…………」

ナツは、視線を下にして、頬をピンク色にして、小さく頷いた。

「ナツ…………」

俺はもう一度ナツの名前を呼んで、キスをした。

Jの名前だけは、何度も呼びたい。ナツとだけは何度でもキスをして、抱き締めあって、繋がりたい。
心からそう思った。

そつと、ナツのパジャマの上からおっぱいを触った。

やっぱり、柔らかい……布越しでも、それは十分に分かった。

でも……あれ……？
驚きで手が止まった。

「匂……？」

ナツが、不思議そうに俺を見上げてくる。

「……ナツ。もしかして、ノーブラ？」

パジャマ越しの感触は、予想以上に柔らかかった。
そこには、あると思つてたものがなかつたんだ。

「あ……その、お風呂場に持つて行くの忘れちゃつて……ていう
か、いつもは寝るとき着けてないから……」
ナツはしどりもどりになりながら必死に言つて謝しようとしている。

「え……じゃあパンツも?」

「パンツは穿いてます! 何でそうなるのよー。」
ナツは真っ赤になりながら言つた。

そういういやうだ。わざとパンツ出して見たんだつた。

「ま、いいじゃん。脱いだら一緒なんだし」
俺はナツのボタンに手をかけた。

「あ、待つて。電気……」

「消した方がいいの?」

「だつて……恥ずかしいから……」

顔が赤いのを隠すためなのか、ナツは両手で顔を覆つている。

かつわいー!

「んなの気にしなくても大丈夫だよ。一回全部見たんだから
そう言つたけど、俺はナツのために、ベッドからおりて電気を消
した。

オレンジ色の電灯だけで、部屋がぼんやりと薄暗くなる。

「あ……あの時のことは忘れて！　あたしも覚えてないんだから……」

ベッドの上のナツが体を起こしてそう言った。よくは見えないけど、どんな顔をしてるのかは大体分かる。

「無一理。忘れらんないよ」

俺はベッドに床り、ナツを抱き締めて、そのまま倒れた。

「だからナツ……今日は忘れんなよ」

そう言つて、俺はナツの首筋にキスをした。

「ん……うるさいく。

一度肩を震わせてから、ナツは頷いた。

俺は、ナツの首筋に顔を埋めながら、パジャマのボタンを外していく。

弾けるように、大きなおっぱいが生で姿を現した。
暗いけど、白べきれいなのはほっきりと分かる。

手で触つて、掘むよつとして揉んだ。小さく、ナツの声が聞こえる。

「ナツ……」

俺はスウホットの上を脱ぎ捨てて、ナツの上に重なり、キスをし

た。

舌を絡めて、お互いに口の中をまさぐつて……
自然と、ナツの腕が俺の首に回つて、俺達は更に密着した。

ナツの柔らかい肌が、俺の体に擦れて気持ちいい。その中でナツの乳首だけが固くなつて、俺の胸を転がつてくすぐつたい。

俺はゆっくり唇を離しナツの胸に顔を埋めて、そこにたくさんキスをした。

「あ……匂……」

ナツが甘い声で、俺の名前を呟いた。

もう意識がぶつ飛びそうになつた。

そんな風に俺の名前を呼んでくれるつてことは、俺は、ナツの特別になれたつてことなのかな？

俺は、ナツの下半身に手を伸ばした。
パジャマのズボンに指をかけ、ずらしていく。ピンクのパンツが
見えて、思わず生睡を飲み込んだ。

そして、パンツの上から、ナツに触ろうとした。

「あっ……ダメッ」

ナツは腰を引いて、小さく抵抗した。

それに構わず、俺は指をナツに当てる。

「あつ

「ナツが高く、声を上げた。

ナツのそこには、触れただけで分かるぐらいい濡れていた。

俺に感じてくれる……

それが、嬉しい。

俺は、ナツからパンツを抜き取つて、そこそこ顔を埋めた。

「やつ……匂つ！」

ナツが体を半分起こした。

「匂……ダメつ……そこは、いいから……」

ナツはまた腰を引いて逃げようとする。

でも、俺はそれを追いかけた。

「俺がしたいんだ。俺が、ナツをもっと気持ちよくさせたい
そう言つて、俺はそこに舌をつけた。

「あ……」

ナツの起こした体が、ギシッと音を立ててベッドに沈んだ。

ナツのためと言しながら、本当は俺のためだった。

俺が、知つて覚えたかつたんだ。

ナツの色も形も、その温度も感触も、匂いや味も……

ナツの全てを俺の体に刻み込んでおきたくて、俺は、ナツの真ん中に口づけて舌を絡め、指を埋めた。

「……っ！」

甘くて細い声がして、ナツの腰が浮いた。
それと同時に、指を埋めた場所が収縮した。

ナツが、果てたみたいだ。

「ナツ……」

俺は指を引き抜き、ゆつくじと体を起こして、ナツの顔を見た。

ナツは、目をつぶり、眉間に皺を寄せ、肩で息をしている。
うつすらと汗をかいて、おでこに髪がはりついていた。

「ナツ……」

そのナツの姿がきれいで、俺は吸い寄せられるようにナツの唇にキスをした。

「ん……」

ナツの腕が俺の背中に回った。

舌の絡まる音だけが部屋に響いた。

それだけで、俺の気持ちは高ぶっていく。

「ナツ……いい？」

唇を離してそう聞くと、ナツは小さく頷いた。

俺は、枕の下に手を突っ込んで、コンドームを一つ取り出した。ナツが、いつの間に、という顔をしたから、

「準備いいだろ？」

と言つと、ナツは『もつ』と言つて、笑つた。

俺はナツのこの顔が好きだ。

俺も自然と笑顔になれる。

「ナツ……大好き。超好き……」

心からそう言つて、俺は、ゆっくりとナツの中に埋まつた。

ナツの中は、凄く熱くて、でもその熱さは、気持ちよかつた。その感触を噛み締めて、俺は大事に大事に、ナツを抱き締めた。

最後まで終わった後、ナツは俺の腕の中で小さく肩を震わせて、

息をしていた。

「ナツ、大丈夫？ しんどかった？」
髪を撫でながら、俺はナツに聞いた。

ナツは、小さく首を横に振る。

「ううん……大丈夫」

「…………じゃあ、気持ちよかつた？」

そう聞くと、ナツの肩の動きが止まった。

「…………何でそんな恥ずかしい」と囁くのよ

ナツは俺の胸に顔を押し付けて小さな声で言つた。

…………何でそんな可愛いいことがあるのよ。

「だつて…………俺、ナツに気持ちよくなつて欲しいから…………前の彼氏
みたいな風には思つてほしくないし」

そう言つてナツの背中に手を回そうとしたら、ナツは俺の胸から
顔を離して、寝返りをうつて俺に背中を向けた。

「え……ナツ？」

「…………」

もしかして……怒つてる？

ナツの雰囲気は、そんな感じだつた。

「……何で、今そんなこと言つの？」

「え？」

俺は体を起して、ナツの顔を覗き込もうとした。

「す、いい気分だつたのに、思い出しちゃつたじゃない」

俺からは顔を背けるようにして、ナツは言つた。

「あ……」

俺、言ひ切れいけないと言ひ切られたんだ……

いや、普通に考えて、言ひやダメなどじやん。元彼のことなんて……

さつかも話題に出して、すつじこ空氣変わつたつての……つい元彼のことを意識しそぎちやつて……

「ナツ……」めんな

俺はナツを後ろからぎゅっと抱きしめた。

「俺、バカだから、変なことばっか言つて……」

これじゃあ、ナツに最低発言した元彼と、大差ない。

本当に、最悪だ。

「でも、ナツ。俺、バカだけど……バカだけど……絶対、ナツの

こと大事にする。ナツのこと振つたりとか、そんなバカなことだけはしないから……」

俺がナツのこと振るなんて、有り得ない。
それこそバカだ。

「…………もつここよ

ナツの手がそっと俺の腕を触った。

「ちょっとだけ、嫌だっただけ……もつ大丈夫だから」「
そう言つて、ナツはまた寝返りをうつて俺の方に向いてくれた。

「ナツ……」

俺は、今後はちゃんと正面からナツを抱き締めた。
腕の中に収まるナツの小ささと、柔らかさと、匂いに、俺は幸せを感じた。

今までナツと付き合つて別れた男達は皆バカだ。

ナツはこんなにもいい女で、こんなにも幸せにしてくれる存在なんだから。

ふと目を覚ますと体が重い。まぶたも重くて目が開かない。

あ、そうだ。あの後、一回したんだっけ。

昨夜の感覚を思い出して、俺は思わずにやけてしまつ。
そして、俺は隣にいるはずのナツを探りで探し、そばにあった柔らかいものを抱き寄せた。

それをぎゅっと抱き締めて、違和感に気づいた。

あれ……?
ナツにしては、手応えがない……
それに足の方の感触もない。

不思議に思つて細く目を開けると、俺が抱き締めていたのは、枕だった。

「あれ……?」

体を起こして見てみると、ベッドの上にはナツがいなかつた。

何？ もしかして、今までの全部夢？ 夢オチなの？

寝ぼけてそんなことを思いながら俺は部屋を見回す。
間違いなくナツの部屋だ。絶対あれは夢じゃない。

「ナツー？ ……ナーツ」

俺はビビリナツがいるのか、呼んでみた。

台所の方で音がする。

「匂？」

やつぱり、台所の方からナツが顔を出した。

「旬、起きたの？」

ナツがこっちの方にせざてへべる。

「まだ寝てるー」「

俺はもう一度布団に潜つて言つた。

「起きてるんじゃない」

ナツが近寄つてするのが足音と氣配で分かつた。

「旬ー。やんそひひやんと起きーー」「

ナツが俺を揺さぶつてる。

何かこれつて新婚みたいでいいかも。

「もー……旬つば……やー…?」

俺はナツの腕を掴んで、布団の中に引っ張り込んだ。

捕獲完了。

「ちよつと、旬……」

驚いた様子のナツの頭に、俺は自分の頭を押し当てる。

ナツの動きがピタリと止まる。

「……おはよ、ナツ。起きるの早いね」
唇を離して、顔だけ布団から出しながら俺は言った。

「……おはよ。早く起つて面つとも、もう十時過ぎや。やれやれ起きた

ないと」

カヨウと顔を赤らめてナツは言った。

「いいじゃん。休みなんだし、カヨウとベリコウハラハラしても。やれよりや、ナツ」

「何?」

「昨日のこと、覚えてる? また忘れない?」

ナツは皿を丸くしている。そして更に顔を赤くした。

「ねつ……覚えてるに決まってるじゃなー! もうつ、つってば本当に変なことばっかり言い過ぎー!」

「へへへ……」めぐらめぐら。でも、よかつた「ナツがちやんと覚えててくれて。つて言つと、ナツは怒るかな?」

俺は、ぎゅうっとナツを抱き締めた。

すると、ふわっと甘い匂いがした。

「何かナツ、すっげーい匂いする」

俺はナツの胸に顔を埋めて、鼻から息を吸つた。

勿論ナツは元々いい匂いだけど、そのナツの匂いに混じつて、あまいバニラのような匂いが分かる。

「あ……朝ご飯にフレンチトースト焼こいつと混つて、準備してたの。

その匂いかな……？

「へー……フレンチトーストか。楽しみ」「って言つても、今の俺はこの状態でいるだけでお腹いつぱいになれそうだ。

「だつたら……匂。今から焼くから、ちやんと起きて着替えてね」「ナツはそつと俺の腕を解いて体を起こした。

俺はそんなナツを見上げて、思わず息を呑んだ。ナツが、昨日までよりすくくきれいになつてた。

「匂？ 分かつた？」
ナツがそつと俺の顔を触つた。

「う……うん。分かつた」
俺はただ頷いた。

ナツは、優しく微笑んで、台所に戻つていった。

何！？ 今日のナツ！？

いや、ナツはいつも可愛くてきれいでセクシーだけど…

でも今日のナツは、いつも三割増で可愛くて、いつもの六割増できれいで、いつもの九割増でセクシーだった。（当社比）

何でだろう…… 昨夜のナツを見たから？ 俺にそつ見えるだけ？
でもそれでもいいや。

俺だけが、ナツのすっぴーいとこ見れるんだから。

ナツは、フレンチトーストと、ハーフを用意してくれた。ハーフは、わざわざ昨日買っておいてくれたらしい。

「いただきまーす」

俺はフォークを手に取つて、フレンチトーストを口に運んだ。

「んまい！」

甘い味が口に広がつて、幸せな気分も大きくなる。

「匂つて、本当に美味しいもん」

「だつて、本当に美味しいもん」

でも、今日は格別かもしれない。

昨日の最後にナツを見て、今日の朝一番にナツを見て、それで一緒にご飯食べて……

幸せだ。たつたこれだけで、すく幸せだ。

「ナーツちゃん」

「……何？ いきなり」

「」つちを向いたナツの頬に、俺は軽くキスをした。

「へへひ

ナツはちょっととしている。その顔が可愛かった。

「なつ何すんの、いきなり！？」

すぐに真っ赤になつて、ナツは頬を押される。

「ナツが可愛かつたから」

俺は笑いながら答える。

「意味分かんないつ。もうー！」飯中にやめてよね！ しかも砂糖でベタベタじゃない」

そう言いながら、ナツはふきんで頬を拭いた。
ちよつと必要以上に拭いてるけど、充分恥ずかしがつてるだけだ。

……そうだよな？ ……そうこうしておちやおつ。

でも本当にいいな、ひひひの。

ナツと結婚して、一緒に暮らし始めたらい毎日こんな感じにできるのかな……

いや、こんな感じじろか、毎日あんなことやそんなこと……ひんなことまでできちゃうか？

……それって、かなり最高かも！

でも今すぐ結婚つてわけにもいかないし……せめて一緒に暮らしたいけど、それだって無理だろうしだ……

「……あ、そつか

色々考えて、俺はこいつを思い付いた。

「何？ どうしたの？」

ナツは首を傾げて俺のことを見ている。

そんなナツを見つめ返して笑うと、ナツは更に不思議そうな顔になっていた。

「レバーハンドルですか？」

「え……あ、風呂とトイレが一緒になってるからダメです」

「じゃあいいだけ……」

「……築四十年って古くないですか？ それに、××町から少し遠いし」

「では……」

「予算オーバーなんで無理です」

「……お姉さん。本気で部屋探してるんですか？ そんなことを言ってたらこいつまでたつても決まりませんよ」

不動産のおじさんはため息をついて言つた。

今日、俺は不動産に来ていた。

それは、もちろん、物件を探すためだ。

俺は、一人暮らしを始めることにしたのだ。

何でいきなりそう決めたのかといふと、それは、ナツと一緒にいる時間が増やしたいから。

今まで通り、実家で親と住んでるより、俺が一人で暮らした方がいちいち気を使うこともないし、ナツとの時間は増えるんじゃない。そう思った俺は、即決で、微妙な顔した両親を納得させた。

で、今こうして物件を探してるわけなんだけど……なかなかいいところがない。

「だいたい、お密さんの言つ条件だつたら厳しそぎてなかなかありませんって。少しごらい妥協しないと」

「そりっすかねえ」

俺が求めた条件は、家賃八万以内で××町の近くで彼女を呼んでも恥ずかしくない部屋、だ。

家賃があんまり高いと生活が厳しくなる。××町はナツの「一ポーのある場所だ。せつかくだからその近くに住みたい。それでナツを呼ぶんだから、狭いとかボロいとかは却下だ。

でも、やっぱ世の中そりゃない。条件通りにはいかないみたいだ。

「……じゃあ、家賃上げます。八万五千円」

場所と部屋の状態は譲れない。そつなると、妥協できるのは、家賃だけだ。

「五千円ぐらいいじやそう変わりませんよ」
おじさんはファイルを捲りながら言った。

「じゃあ……九万で

「これ以上は無理だ。正直、九万でもかなり厳しい。貯めてたバイ
ト代があるにはあるけど、これから色々使うだらうし、生活が苦し
くなりそうだ。」

でも、ナツのために頑張る！

「あ、これはどうですか？」

おじさんがファイルをめくる手を止めて俺にそこを見せた。

「部屋自体はそんなに広くないんですけど、一人暮らしなら十分なぐ
らいだし、五年前に出来たから新しいし、場所もおじさんの希望通
りだし」

「マジですか？」

おじさんの言葉に俺は食いついた。

見せてくれた物件は、ナツのコーポから十五分ぐらいで着けそ
な場所にあるマンションだった。

写真を見ると、[写つこよゐのかもしけないけど、それでも十
分綺麗だ。

間取りも、ちゃんと風呂とトイレは別になつてるので、別に不具合
はない。

いや強いて言えばナツの部屋より狭そうだけ……ナリはしづつ
がない。妥協する。

「……お願いします。」

と、いうわけで、俺はなんとか一人暮らしのための第一歩を踏み
出すことができたのだった。

そしてその一週間後。

マンションへの引っ越し日。

「おお！ すっげー。思ったよりキレイじゃん」「
部屋の中に入つて、俺は思わず一人でそう言った。

でも、本当に築五年目といつてもあってか、壁は真つ白だし床
はピカピカだし新しい匂いがする。

もしかしたら、この部屋は俺が一番最初に使うのかもしれない。

やつぱり家賃、ギリギリまで上げてよかつたかも。

……て、そんなこと考へてる場合じやなくて。早く荷物運ばねえ
と。

引っ越し業者に頼むと、金がかかる。ってわけで、俺は自分で荷物を運ぶことにしたのだ。

まあかこんなところで家賃のしわ寄せがくるとは……

しかも、自分が引っ越ししたいって言つたんだから、作業は全部自分でしろって言つて、親すら手伝つてくれない。

いいけどさ、別に。その通りだし。

とりあえず、家の車だけは貸してくれたから、荷物はマンションの下まで運んできた。

今後はそれをこの部屋まで運んでこないといけない。

せつとせつて終わらせよ。俺は荷物の運搬作業に取りかかった。

数時間後……

「疲れた……すっげー腹減ったし」

昼過ぎに引っ越し作業を始めて、時間を見るともう六時過ぎだつた。

いくらHスカレーターがついてるとはいえ、この部屋は四階だ。やっぱり一人で荷物を運ぶのは時間がかかるし体力もいる。

それにして、何も食べるもんじゃないし、コンビニ行かねえと。

あ、でもベッド組み立てねえと寝れないし……

一人じゅ思つた以上にやる」ことが多くて苦戦した。

とりあえず俺は、今日はベッドを組み立て、コンビニで食料を調達してそれを食べて、風呂に入つてすぐに寝た。

ピンポーン……

聞き覚えのないインターほんが聞こえる。

あ、そういうえば俺、引っ越ししたんだつけ。このインターほんつてこんな音だったのか。

ピンポーン……

また鳴つた。誰だ、こんな時間。

俺は枕元に置いてあつた携帯で時間を見てみる。
十時ちょっと過ぎ……なんだ、もうこんな時間が。
そう思いながらまた目を閉じた。

ナツの声が聞こえる。

「土曜日引つ越しなの?」

「うだ……ナシと電話で引っ越しのことを話した時だ。

「じめんね。土曜日は用事で実家に帰らないといけないから……でも日曜日は大丈夫だから、日曜に行くね」「ね」

そう言つてた。だから今日来てくれるんだよな。

「じゃあ、十時頃に行くか!」

「ふん。分かったー……………十時ー?」

俺はバチッと田を開けた。

やつべ! 俺としたことがうつかりしてた!

昨夜までは覚えてたはずなのに、アラームのセット忘れてた!

俺は飛び起きて玄関に向かつた。

「いって!」

向かう途中でその辺に置いてあつたダンボール箱に足の小指をぶつけた。

ピンポーン……

もう一度インター ホンが鳴る。

「……ちょっと待つて。今出るー。今出るから……」

痛さで涙目になつて、足を引きずりながら必死に玄関に向かつた。

「はい……！」

俺は必死になりながら玄関のドアを開けた。

そこには素の定、ナツがいた。

「あ、匂。やつと出てきた。まだ寝てたの？」

寝起きにナツはかなりの効果だ。今日も相変わらず輝いてます！

「匂……？」

「あ、うんー。ごめん！ ちょっと寝坊してさ……本当にめんな
現実に戻った俺はとにかくナツに謝つた。

「ううん。いいよ。匂、昨日引つ越しだったから疲れてるんじゃな
い？ ……あ、お蕎麦買って来たの。お昼に食べよ」

ナツはそう言ってスーパーの袋を持ち上げて、笑いかけてくる。

その顔、反則ですから！

「それでも、ここひどうちから本当に近いのね。歩いて二十分
もからなかつたし……それに新しいから綺麗だし。匂、いいとこ
う見つけたね」

「」がナツに好評なのがすぐ嬉しかつた。

やつぱつ、家賃妥協した甲斐があった。

「あ、とつあえず上がつてよ」
「こつまでもこんなとこで立ち話をしてくれるのもなんだ。俺は早速ナツを部屋の中に促した。

「じゃあ、お邪魔しま.....」

中に入ったナツは固まつた。まるで電池切れのおもちゃのようになってしまった。

「ナツ?」

俺はナツに声をかけた。そして、部屋の中を見た。

「あ.....」

俺の部屋は、ナツの部屋と違つて、玄関から廊下はなくすぐで部屋の中が見えるようになつている。

それを俺は今初めて見て、部屋の状態に気づいた。

部屋の中は、俺が思つた以上に.....といつか、引っ越してきて一日だとは思えないほど散らかっていた。

わざわざぶつかったダンボールが倒れまくつてゐし、昨夜食べたコンビニ弁当の容器はそのままだし、タオルとかスウェットとか探しにいくつか箱を開けて中身を全部出したものが散らかつてゐし.....とにかく、彼女を部屋に招くという状態ではなかつた。

「あ.....こやその.....昨日あんまり片付ける暇とかなくてさひ.....」

ちょっと引き気味なナツに俺は必死に言い訳した。

正直、今までの俺の部屋の状態に比べればマシだとは思ひナビ、初めてでこれはないよな……

せめて弁当の「ナツ」を付けておくんだった。

「まあ、しょうがないよね。引っ越しで大変だし。片付けるの手伝うね」

ナツはそう言つて靴を脱いで部屋に上がつた。

荷物を台所に置いて、ナツは散らかっている方にやつてくる。

「匂。服とかはどこに収納するの？」

その辺に落ちてた服を拾い集めながらナツは俺に聞いてくる。

「ああ、クローゼットあるし、今まで使つてきたケース持つてきたからそれでいいかなーって思つて」

「そり。じゃあ、とりあえず服から片付けていった方がいいかな」
ナツは話しながらテキパキと俺の服を畳んでいった。

「匂、服はどこに入れたの？」

「えー……どこ入れたつけ。適当に入れたから覚えてねえかも」
俺は近くにあつたダンボール箱を開けてみる。

「適当つて……ちゃんとしつかないとダメじゃない

「それ、よく言われるんだけどさー……苦手なんだよなあ。あ、こ
れだ」

ちょうど開けたやつに服が入つてた。

「ちょっと……匂。どんな入れ方したのよ、
箱を覗いたナツが眉をひそめた。

「どんなって、適當」

俺はやつたまんまを答える。

「適當にもほどがあるでしょ？ もう……ぐちゅぐちゅじゃない」
ナツは呆れた口調で言った。

「うん。確かにこれはやりすぎたかも。
俺の服は、部屋に散らばつて畳んで置いてあるものはほとんど
なかつた。だからそのまま入るだけ放り込んで持つてきた。
その結果、ダンボールの中身はひどいことに……

「あー……やっぱり絡まつてゐる……」

ナツが服を出せうとしたが、しつと箱の中身全体が出てきた。

「おお。すげー。釣れてる釣れてる」

「もひ……そんな呑気に言える状態じゃないでしょ」

ナツは絡まつた服をほどき出していく。

……バサツ

と音がして、何かが落ちた。

「もひ……何で雑誌が服と一緒に入つて……」
落ひたそれを見て、ナツは固まつた。

「あ……」

俺も固まつた。

箱から出てきたのは、確かに雑誌だった。

でも、それは、ただの雑誌じゃなくて、青少年のバイブル（しかも無修正もの）だった。

落ちた拍子に開いたページでは、巨乳のお姉さんがマッパで隠すべきところをさらけ出していた。

「ち……違う！ ナツ！ これ俺のじゃなくて……友達の！ 俺、工口本は買つ派じゃなくて借りる派だから……」
俺はすぐにそれを回収し、後ろに隠した。

言い訳のつもりがあんまり言い訳になつてなかつた。

「……別にいいよ。どっちでも」

ナツは冷たい目線で俺を見ている。

「ナツ、誤解だつて！ 僕にはナツしかいないからー。ナツと一緒につてからは工口本もAVも一回も見てないしー！」

「だからそんなの言わなくていいってば

「ナツー！ 信じてくれよ」

何だかもう冷え切つた感じのナツに、俺は抱きついて必死に訴えた。

「俺、マジでこんなに浮氣しないからー。妄想と手だけで十分だ

から！ つか、これ借りたの大分前だし

「だから気にしないからいいってば！ 何そこまで言つてんのよー」

ナツは真っ赤になつて俺の腕の中でじたばたしてゐる。

「て……匂。大分前に借りたのにそれが何であるの」
ナツはピタリと止まつて真剣な顔で俺に言つた。

「返したつもりだつたんだけど、今発掘されたんだよ。俺だつて久
しぶりに見た」

「……匂。人に借りたものをそんないい加減にしてたらダメじゃな
い」

呆れたような口調でナツは言つた。

「うん。今度ちゃんと返しとく
でも誰に借りたんだっけ？
そう思いながら俺は頷いた。

ナツはその後エロ本のことには一切触れずに、テキパキと体を動
かして、引っ越しの片付けを手伝つてくれた。

……正確に言つと、ナツがほとんどやつてくれて、余計なことば
つかした俺は怒られてばかりだつた。

でも、昼には大体片付いて、一人でナツが持つてきてくれた蕎麦
を食べた。

「なあ、ナツ」

食べ終わってちょっと休憩して、俺はナツにすり寄った。

「なに？」匂

ナツはテーブルの上を片付けながら返事をした。

「よく考えたらさー、今日は大事なことしてないよな？」

「大事なこと？」

「一回もチューしてない」

首を傾げたナツに、俺は答えた。

「え……」

ナツはきょとんとしている。

俺はそんなナツを抱きしめて、頬にキスをした。

「ちょ……匂つ！ 何考えて……」

ナツは顔を赤くして俺がキスした場所を手で押さえた。

「いいじゃん。二人きりなんだし」

そう言つて俺はナツの顔に俺の顔を近づけた。

「もう……匂つてば」

そう言いながらも、ナツはそつと目を閉じた。

好きだなあ。ナツのこうこううといひ。
そう思いながら、俺はナツに唇を合わせた。

ナツの柔らかい唇が気持ちいい。

俺は堪らなくなつて、そのままナツの唇を割つて舌を入れた。
抵抗はされなかつた。

だから、片腕でそのまま強く抱き締めて、もう片方は俺とナツの
体の隙間に滑り込ませ、おっぱいを触つた。

「ん……！ 待つて……」

ナツが横を向いて、唇が離れた。

「何。この手？」

ナツは真剣な顔で、おっぱいを触つてる俺の手首を掴んだ。

「何してんの。これは」「

「え……スキンシップ？」

「もう……何考えてんの」

ナツは俺の手を引き剥がそうとした。
でも、俺はその前に手に力を込めた。

「あ……」

ナツの口から小さく声が漏れた。

それに俺は火を点けられた。

「ナツ……したい」

ナツの耳元でさつ言つた。

せつかぐ一入きりなんだから、思いつきりナツを感じたい。

この雰囲気だつたら、このまま……

「だつ……ダメー！」

……このままつい思つたのこ、ナツはさつ言つて俺を突き放して後ずさりした。

「何で？」

俺はナツを追いかける。
ナツはせりに後ずさつた。

「だつて……まだ片付け終わつてないし……」

ナツは後ろを向いて、まだ片付いてないダンボール箱が三つ重ねて置いてあるのを見る。

「そんなのすぐ終わるからこいじやん

「ダメよ。先にやつちやわないと……」

「先にやつちやわないと？」

俺は笑つた。勿論、やらしい意味を込めて。

「違う！ もつちく……句……をやつ！？」

一瞬隙ができたのを見逃さず、俺はナツに抱きついた。

「ナツ～」

そのまま俺はナツを押し倒した。

「ちょっ……匂……イタツ！」

倒れた瞬間にガツッと音がした。

ナツが後ろにあつたダンボールの一一番下の箱の角に頭をぶつけてしまった。

「うわっ……ナツ」「めん！ 大丈夫！？」

俺は慌てて体を起こしてナツを見下ろした。

「痛あ……もう！ しゅ……」

顔をしかめていたナツの目がぱちりと見開かれた。

「危な……！」

「え……」

「ゴスツ……

つて感じで頭に衝撃がきた。何が起きたんだ……

「ちょっと……匂！ 変に動かないでよ！」「俺の下でナツが慌てている。

あ、なるほど。ナツがぶつかった拍子に上の一つの箱が倒れてきたのか……
多分それを今、俺の頭で支えてるんだろうな。

「『めん。今直すから……』」「

俺は首に力を入れ、頭と手を使って押し返した。

「もう！ 旬が変なことするから

俺の下でナツが怒つてる。

こんな状況でなんだけど……怒つてもナツは可愛いなあ。

バサリ……

俺が箱から頭を離した瞬間、何かが落ちた。
しかも、ナツの顔の上に……

「あ……」

俺はそれを見て固まってしまった。

ナツの顔の上に、今日見つけられたエロ本が開いた状態で落ちていた。あ、そうだ……その辺にほつたらかしててナツに怒られたから、とりあえずこの箱の上に置いてたんだった。

「ナ……ナツ……」め……

流石にこの状況がかなりヤバいのは俺でも分かる。俺が謝りういたら、ナツはゆっくりと体を起こした。

それと同時にナツの顔から本も落ちた。

開かれたそのページは、さつきの巨乳のお姉さんが裸の男と激しく絡み合っているシーンだった。

「しゅーんー……」

ナツがキツと俺のことを睨んだ。

睨んでも可愛いけど……とか、思つてる場合じゃない。

その後、俺は三十分以上謝り続けて、とりあえず許してもらえた。

ナツと一緒にいる時間を増やしたくて一人暮らし始めたはずなのに、初っぱなからこんな雰囲気になるなんて、災難な一日だった。

ナツと付き合ってはじめて約五ヶ月。
ナツとは順調に付き合つてゐる。……と毎日。

なんで断定できないのか。

それは、最近少し不安だからだ。

ナツが、俺のことを少しでも好きだと思つてくれてゐるのか……
俺のことを彼氏だと思つてくれてゐるのか……

「旬。早く行かないと映画始まつちやう」

「あ、うん」

今日は、ナツと一緒にデートだ。

ナツが映画の前売りを持っていたから、一緒に行かないかと誘わ
れたのだ。

それは何でもいいんだけど……

今こいつを並んで歩いているのに、俺とナツは微妙に離れてる。

手を、繋いでないからだ。

今まで何度もナツとはデートしたり、隣を歩いたりしてゐるのに、手を繋いだことは一度もない。

それっておかしくないか？

デートは勿論、今までお互の家の泊まつたりして、ヤックスだつてしてゐる。

せっかくおめでたしだ。

それで手を繋いだことないなんて。

俺は隣にいるナツを見た。

……繋いでも繋げないし。

ナツはいつも俺と歩くとき、俺側の手で鞄を持つ。俺がナツの右を歩こうが左を歩こうが、悉くさうだ。

これはナツが俺を拒否していると思ったら、思つたってしようがないじゃないか。

「よかつた。いい場所取れ

「そうだなあ」

館内に入つて、真ん中の見やすいところを取れた。
勿論、並んで座る。

映画が始まり、観客は静かになった。

この映画は、洋画のラブコメディーだ。有名なキャストが勢揃いで、話題にもなってる。

「コメディー的な要素が多いから、たまに笑いが起きる。俺も笑つたし、ナツも笑つてた。

クライマックスでは、主役二人の甘いシーンがスクリーンいっぱいに映つた。

俺の隣で……ナツが座つてる方と反対側で、ひそひそとした声が聞こえた。

横目で見てみると、俺の隣もカップルだった。

その二人は、手を繋いで、映画そっちのけでベタベタしてゐる。

ラブコメディーということもあつてか、館内には、カップルが目立つて何組かいた。

まあ、映画館のカップルってこんなもんだよな。

そう思いながらふと別のところへ目をやると、俺の三列ほど前に
もカップルがいて、その二人は、何とキスをしていた。

スクリーン上では、主演一人が激しくキスを交わしていて、それに誘発されたのか、そのカップルも激しかった。

……ていうか、後ろの方ならともかく、そんな前の方だったら丸見えじゃん。なのにあんなに堂々と……

すつづーうらやましいんですけど……

公の場であんな堂々と、カップルしかしない」とできぬことは、すくなくひらやましかった。

俺はナツの方を見た。

ナツは、カップルの方には気付くこともなく、映画のスクリーンをじっと見ていた。

俺達も……キスまではしなくて（いや、俺はしたいけど）手を繋ぐぐらになら……

俺はナツの手を見る。

ナツの手は、膝の上の鞄の上に置いてある。
俺は生睡を飲み込んだ。

さりげなく握れば大丈夫……だよな。

でも、かなり緊張する。心臓がものすごい早さで動いてるのが分かる。

落ち着け俺の心臓！ タリゲなくだ！

俺はナツに分からなつよつて深呼吸をした。

……よしー

そして、俺はナツの手を握りつと、手を伸ばした。

あと五セント……三セント……

あとちゅうひとつて時だった。

「旬」

つおつー？

ナツの顔がいきなり俺の方を向いた。

俺はものすげに勢いで手を引つ込んで、スクリーンの方に向き直つた。

「何？ どうしたの？」

「いやつ…………別に何も…………ナツ…………どうしたの？」

鎮まれ俺の心臓！ 泳ぐな俺の田ー！

「どうしたのつて…………映画終わつたから…………」

「あ……」

ふと気づいたら、いつの間にか、映画は終わって、客がぞろぞろと帰っていくところだった。

「やつか……じゃ、出よいかつ」

俺は慌てまくって、急いで立ち上がった。

「うん」

ナツは不思議そうに首を傾げていたけれど、別に気にしてほいなかつたみたいだった。

「面白かったね、映画」

映画館を出た後、ナツは笑顔でそう言った。

「うん。面白かった」

俺もそつやつて頷きながらも、最後の方はあまり覚えてなかつた。

ていうか、俺のバカヤロー……

何で手え引つ込めたんだよ！？ 何でそんなうるたえてんだよ！？
ナツがこっち向いたからって、そのまま手えぐらい繋げばよかつたのに！

「お腹減ったね。お昼どつする？」

ナツの声の声で俺は我に返った。

「あ、うん。どっか店入るっか」

その時、ふとナツの手を見た。並んで歩いて、俺側にある手を……

いつもは、必ずとこいつにいじめぐらし鞄を持っていく。

でも今は、何もなかつた。

これはチャンスか！？ なかなか手を繋げない俺の為に『えられ
たチャンスなのか！？

だとしたら、繋ぐしかない！
さつきみたいに無駄に躊躇うな！ 一気に行け！

俺は自分に気合いを入れて、手を伸ばした。

「あ」

ナツのその声と同時に、俺の目標としていた手が消えて、俺は空振りしてしまった。

「あのパスタ屋、すごく安くて美味しいの」
ナツは、道の向こうに見える店を指差していた。

そう。俺が掴もつとしていた、その手で。

「お皿、あそこによつ」

「うん……」

神様。これはイジメですか。

俺はもつ泣きたい気持ちだった。

パスタ屋に入つて、メニューを見てみると、本当に安い。一番高いのでも九百円しないほどのものだった。

「旬、どれにする?」

「んー……どれにしよ。ナツは決めた?」

「あたしはたらこクリームにする」

たらこクリーム……六百八十円か。

無意識にメニューで値段をチェックしてしまう。

「じゃあ俺、ツナマヨ」

これは六百五十円で、ナツが頼んだのと同じぐらいだ。

合計千三百三十円。

これなら俺でも払える。丁度昨日給料入つたとこだし。

ナツと手を繋げないということ以外に、ナツが俺のことを彼氏として扱ってくれてるとか不安な要素がある。

それは、いつもやつてナツと食事とかする時で、必ずと云ひほゞナツが俺の分まで払ってしまうことだ。

ナツは、いつも俺が出すつて言つてゐるのに、さつと払ってしまふ。

そうじゃなくても、割り勘だ。

確かに、俺はフリーターだからあんまり金がない。しかも、ナツより年下だし……

でも、そんなことで彼女に払わせるなんて、彼氏として格好がつかない。

ていうかナツに年下扱いしてほしくない。

だから今日は意地でも俺が払う！

「……何？」

「へ？ 何？」

ナツの声で俺は我に返った。

「一人暮らしは大丈夫なのって聞いたの。どうしたの？ 今日、何かいつもよりも変よ？」

ナツは首を傾げている。

「え……そんなことないよ。俺はいつも通り……って、ナツ。今セ
りげなくいつもよりもつて言つた?」

「うん。だつて普段も変だから
あつさりと頷かれた。

「あー。ひつでーの。俺のどこが変なんだよー」

「んー……何か色々」

色々って……流石に傷つくよ、俺だつてそ……

「お待たせしました。たら二クリームとシナマヨネーズになります
店員が皿を二つ持つて俺達のテーブルへやってきた。

パスタは食べてみると、本当に安いのに美味しかった。俺はナツ
に言われたことなんてもう気にしてなかつた。

「それで、どう? 一人暮らし。旬、また部屋散らかしてない?」

ナツに言われて、俺はギクッとした。

「…………うん。まあ、いつも通り

「いつも通りつてことないつも通りなのね

ナツは呆れた顔で言った。

「いや、俺は散らかしてるつもりはないんだけどさ……何か知らな
いうちになるつていうか……」

「これは本物じゃないだ。散らかそうとしてるわけじゃない。でも不思議なことに、部屋はどんどん汚れていく。

「向はね、習慣がないのよ。」ハリはハリ箱、出したものは入つてた
ところにしまつてこい

「あ、そうか」「だ。だから俺の部屋は、いつも散らかるのか。なるほど。だからワロ

「せつかって……納得してゐる場合ぢやないでしょ？」

そうやって何だかんだと話して、三十分ほど経った時……

「アラカルト」

ナツが時間を見てそう言った。

「ああ、うん

あ、セイジ。

俺は頷いて椅子から立ち上がった。

思い出してそれを取りうとした。でも、テーブルの上にはもうすでになかった。

「あ……」

ナツがいつの間にか伝票を持ってレジへと向かっていた。

行動早いよ、ナツ。

俺は急いでナツを追いかけた。

「十三四五六十円になります」

店員がそう言つて、ナツは鞄から財布を出さうとする。

「俺が払う」

ギリギリで言つて、ナツは俺を振り返つた。

「いいよ、これくらいだし

しかしナツはそう言つて、財布を出すとする。

「いいつもだ。俺が出すつて言つてもさつと出してしまつ。

でも、今日はそれはないなー」

「これくらいだから俺が全部払つ
俺はナツの手を押された。

「いいつも。旬、お金ないんでしょ？」

それでもナツはそつひて、俺の手を押しのけようとする。

「今日はあるよ。」昨日給料日だったから「俺は言い返して、手をどかさなかつた。

「でも家賃とか払つたりしたらすぐなくなるって言つてたじやない。
気持ちはすごい嬉しいから。だから手、離して

「やだ」

そう言えば、前にそんな話をした。

家賃のこととか、余計なこと言つんじゃなかつた。
だからナツは俺がいつも金がないとか思つてるんだ。

「……分かつた。じゃあ旬の分だけ払つて？ あたしも自分の分払
うから」

ナツはため息を吐いて言つた。

でも、割り勘なんて意味がない。

「やだ。ナツの分も払つ」

俺が彼氏として、彼女のナツの分も一緒に払わないと、意味がな
いんだ。

「……だから旬の分だけでいいってば
ナツは全く頷いてくれない。

「俺が払う」「だからいいってば」「あ、いいって言った」「そつちのいいじゃない！ もうつ旬！」

ついにはナツにキツと睨まれた。

「…………ふつ」

俺らの目の前で吹き出す声が聞こえた。

店員の女人だった。

「あ、すっすいません！」

店員の女人が謝つて下を向いた。

多分…………ていうか、絶対、俺らのことに笑つたんだ。

ふと気づくと、他の客からも注目を浴びていた。

ナツを見たら、ナツも耳まで真つ赤にしていた。

ナツはそのまま俺の手を振り払つて財布を出し、金額一度を置いてさつさと店から出て行つてしまつた。

「ナツ…………！」

俺もナツを追つて店を出た。

「もつひー、匂のせいですごく恥ずかしかつた！
歩きながら、ナツは何度も同じことを言つていた。

ナツの機嫌を悪くしてしまつた。

こんなつもりじゃなかつたのに……

俺はナツに何も言えなかつた。

「……匂。 そんなに払いたかったの？」
ナツは、呆れたような口調で俺に言つた。

本当に情けない。

ナツを困らせて、ナツに呆れられて……
俺つて、ナツことつて、何なんだろ？……

「ナツ。 俺つてナツの彼氏だよな？」
たまらず俺はそう言つていた。

「何言つてんの？ そりじやないの？」

ナツは更に呆れた口調になつていた。

「だつて……何か違うじゃん。 メシとか、こつもナツが当たり前の
ように払う」

俺が言つと、ナツは田を丸くしていた。

「確かに、俺、金ないけどや。 さつきみたいに俺が出すつて言つて
も、断つて、ナツが払っちゃうし。……それに、デートの時、手も
繋いでくんないし。 今も俺側の手で抱持つてる」

「えつ……

「ナツって、やつこの嫌いなの？」

本当に格好悪い。

男のくせにこんなこと言にして、彼女の前でグチグチ言つて……

これじゃあナツに呆れられてもしようがないかもしれない。

「えつ……あ、別にそういうわけじゃ……今までそういう習慣なかつたから……」

今度のナツは呆れてる様子じゃなかつた。
少し戸惑つた様子で、下を向いている。

「……嫌つてわけじゃない？」

俺はナツの顔を覗いつと見てみる。
よくな見えなかつたけど、ナツの顔は赤いようだつた。

「うん」

ナツは小さく頷く。

「じゅ、繫！」？

やう手を出すと少し照れくさかつた。

改めて「じゅ」と手を繫いだるのは、初めてだつたかもしない。

少し間を置いて、ナツが、そつと手を出しつて、わりとくわく俺の手

を触つて握った。

「へへっ

思わず俺は笑ってしまった。

ナツの手の感触を確かめるように握り返して、指を絡めた。

ほんの少し照れくさくて、でもそれ以上に嬉しかった。

ナツを見て見ると、ナツも少し照れくさそうにはにかんでいた。

手を繋いだだけで、ナツがすぐ近くにいるように感じた。今まで
見ていたナツと違う角度でナツを見れるように感じた。

そしてそのナツは、いつも以上に愛しかった。

ナツと付き合い始めて、早一年。

色々あつたりなかつたりしたけど、ナツとは超絶好調だ。

「ありがとうございましたー！」

今日の俺はテンションが高い。

店を出て行く客にかける声も、自然と明るくなる。

「沖田。今日はテンション高いな」

大川先輩が俺に言う。

大川先輩は、カフェのバイト先の先輩だ。

俺は今日、この大川先輩とシフトを組まれた。

「あ、分かりますー？」

顔の筋肉が緩みっぱなしで、今の俺の表情は、鏡を見なくても分かる。

「ああ……その理由も大体な」

「聞きたいでですか？」

「いや、大体分かるって」

「聞きたくないんですか？」

「どうせ彼女絡みだろ」

「あ、分かります~？」

「……お前キモい。つうかマジうぜえ」

大川先輩は引き寄せみの表情で俺に言った。

でも、キモいとかウザいとか、いくら言われても今日は気にもならなかつた。

「だつて今日は久々に彼女が俺の家に泊まるんですよおー。これじゃテンション上げるなつて方が無理じゃないですかあー」

「分かつたからその話し方やめろー。つうか、あっちのテーブルの皿下げこいー！」

「はーい」

俺は喜んでと言わんばかりに言われた通りの仕事をした。

最近、ナツと俺の都合が合わなくて、全然会えてなかつた。

電話かメールは毎日してるけど、それだけだ。

先週末は、ナツが用事があつて会えなかつた。先々週末は、俺がバイトをぎりぎり入れられて、会えなかつた。

それに加えて、セックスはもう三週間近くしてない。

三週間前、ナツの家に泊まつたけど、その時はナツが生理になつてできなかつた。

だから、もう俺はナツ切れでヤバい。

バイトが終わる時間さえも、もどかしくてしょうがなかつた。

「お疲れでしたー！」

バイトが終わると、俺は速攻で家に向かう。

今日は日曜日。
だから、ナツは俺のバイトが終わって家に帰るぐらいの時間に来る。

いつもは、次の日が休みじゃないと泊まりはダメっていうナツだけど、今日は久々だからといって言つてくれた。

あまりに嬉しそぎて、自然と足が速くなる。

「あ

家の近くに来た時、見覚えのある後ろ姿を見つけた。

あの髪、あの歩き方、自然と出でるフロロモン……

十数メートル前を歩いていたけど、俺にはあれが間違いなくナツだといふことが分かつた。

俺は走つてナツのすぐ後ろまでついた。

それでもナツは気付かない。

何だか面白くなつて、そのままナツに抱きついた。

「ナツー！」

「きやあ！？」

ビクツとナツの体が震えた。

「しゅっ甸ー？」

「うん！ ナツー会いたかった」

後ろから抱きしめたまま、ナツに頬ずりする。

久々のナツの匂いだ。

香水とかはつけてないらしいのに、ナツからする甘くてこじ匂い

「ちょっと……ちょっと、匂つ……ここ外だからっ！」
ナツが俺の腕の中でパタパタと暴れる。

それが小動物みたいで可愛い。

「もうつ……驚かせないでよねー！
ナツが俺の腕を抜け出て怒る。

「へへっ」

ナツに怒られてても、自然に笑ってしまう。
ナツの全ては俺を骨抜きにしてしまうんだ。

「もう……」

ナツは、呆れた風に言つて、笑つた。

本当に、ナツは見てるだけでも飽きないなあ。

「あ、それ持つよ。晩飯の材料？」

ナツの手には、スーパーの袋があつた。
俺はそれをナツの手から取つた。

「あ、ありがとっ」

「いいよっ。今日は何？」

俺は、袋の中身を見てみる。
ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ……

「今日はカレーにしてみた」と思つて

あ、そうか。カレーの材料だ。

「やつた！俺、ナツのカレー好きなんだ」

「そりゃよかつた

ナツの笑顔に、俺はメロメロだった。

「じゃ、行こー。」

マンションままで、「三分の距離だつたけど、俺達は手を繋いで帰つた。

いつも、ナツと歩く時に手を繋ぐのは当たり前になつていた。たつたそれだけのことでも、俺は幸せだった。

「もつひ……ひさみ。何よ、これ

部屋に上がると同時に、ナツが言った。

「ん~……自然現象かなあ

「ど~」が自然なのよ！ 旬しかいないでしょー。」

部屋に来てすぐにナツに怒られる。

でも、嫌ではない。

いや別にMなわけではないけど。（むしろMだし）
だって、怒ってるナツも可愛いから。怒ってるところが可愛いなんて、そういうなーいぞ。

「もー匂い！ もうちょっとひきゃんとしてよねー！」

そうやつて言いながらも、ナツはいつも片付けをしてくれる。

ナツは可愛い俺の若奥さん。

「しゅーんー！ 見てないでちょいとは手伝つて！」

俺もちよつと手伝つて（ついでか俺の部屋だけど）掃除をした。

その後ナツがカレーを作つてくれてそれを一人で食べた。

そして、風呂に入つてから、久々にナツとセックスした。

久々のナツの中は、すごく、気持ちよかつた。

腕の中のナツを抱きしめると、ナツの体が、俺の体に隙間なくく

つづく。

「この瞬間、俺は生きてよかつたと、心から思つ。

「ナツ……好きだよ

俺は、この言葉を、ナツに向けて何回でも言える。

何回言つても同じことになります。

「「うそ……」

俺が話つと、ナツはいつも頷いて、俺のことをいつも抱きしめてくれる。

もう言えれば、俺はナツに好きつて言つてもういたつけてくれる。

ふとそつぽつて、思い出してみる。

……ないような気がする。

俺は、二つもメールとか電話ででも言つ。

それに対してもナツは、今みたいに頷いたり、『何言つてんの』って言つたり、はっきり返してくれる「ではない気がする。メールでさえそうだ。

ナツは、そういうの恥ずかしがつて言わないだけだひつねじ、聞いてみたいなあ……

ナツのことを見てみると、ナツは二つの間にか、俺の腕の中で小さく寝息をたてていた。

……可愛い。

「ひして無防備に俺のそばで寝られること、なんていふて、ナツの俺に対する気持ちなんて、聞くまでもないよな。」

ナツはこうやって俺の腕の中にいるの、これ以上、贅沢なこといつたらダメだな。

俺は、ナツのことを改めて抱きしめて眠った。

翌朝、目が覚めるともうすでにナツはいなかつた。

時間を見てもみると、もう九時を過ぎている。

テーブルの上に、メモが置いてあった。

「よく寝てるみたいだから、先に出ます。朝ご飯作っておいたから食べてね。旬もバイトに遅れないようにな。……なつみ」

ナツのきれいな字で、そう書かれている。

行っちゃったかあ……
起こしてもよかつたのに……

メモを見ながら俺は少し凹んだ。

ナツは朝起きるのがいつも俺より早い。だから泊まりの翌朝はいつも俺より早く起きて、『『飯を作ってくれている。
本当の奥さんみたいに……

それは十分嬉しいけど、朝一番にナツの顔見たいっていつ気持ちもあるわけで……泊まりなら尚更……

なんか本当に贅沢になつてゐるな、俺……

ナツにそんなにたくさんのこと、求めてもつもつはないのになあ……

今日のバイトは畠からだけど、俺はもう起きる気にはない」とした。

ベッドから降りて、服を出そつと収納ケースをあらぬ。

「……ん?」

ケースの奥に赤い何かを見つけた。

明らかに服ではないだろうという、光沢がある。

俺はそれを引っ張り出してみた。

「あれ?」

出てきたのは、赤いジャケットの、洋楽のじやだった。
しかも、俺のじやない。

これは確か……田中の……

田中は、同じ高校の奴で、高二の時に同じクラスだった。このCDもその時に借りた。

俺、返してなかつたのか……？ 引っ越しの時にも出てこなかつたのに……何で今更？

まあそれはいいや。

見つかつたから返した方がいいか。

俺は、携帯を開いて、田中にメールを送った。

約十分後、田中からメールが返ってきた。

『ないと思つたらやつぱりお前か。

早く返せよな』

そんな内容だつた。

『じゃあ今から俺んち来る？』

俺は、そつやつてメールを返した。

約三十分後。

ピンポン……

インター ホンが鳴り俺は玄関へ向かった。

玄関を開けると、田中がそこに立っている。

「おー久しぶりー。一年ぶりだなあ」

「久しぶりーじゃねえよ。つたぐ、お前いい加減のはかわんねえな。つうか普通借りた方が返しに来るだろ。何で俺がわざわざ来ないといけないんだよ」

久々なのに、いきなり文句を言われた。

「まあそつ言いながらも田中なら来ると思つたからさ」

「当たり前だろ。これ以上返つてくるのが先延ばしになつてたまるか」

「ハハツ。まあ上がれよ」

「えつ……」

田中はあからさまに嫌そうな顔をする。

「何だよ?」

「……俺さあ、旬が一人暮らししてゐて聞いてかなり驚いたんだけども、お前のことだから絶対汚いんだろうと思ひながら来たんだよ」

なかなか失礼なこと言つた、田中め。当たつてるけど。

「別に散らかつてないって。ほり」

「えー……あ」

部屋の中を覗いた田中が固まつた。

「何だよ。散らかつてねえじゃん。つづか、綺麗じゃん」
田中は、目を丸くして失礼なぐりこむ驚いてくるやつだ。

「だから言つただろー」

「何、お前にまめに掃除とかしてんのか?」

そう言つながら田中は部屋に上がつた。

「いや、俺の彼女がしてくれた」

「彼女? も前、彼女できたのか?」

さつあせびじょなにけど、田中はまた驚いていた。

「おひー もう一年になるんだ」

「一年ついで……ミキと別れたのもそれぐらい前じゃなかつたか?」

「まあ……ふつかまけミキと別れてすぐ後だつたからな」

「へーえ。それで、誰? 同じバイトの?とか?」

「いいや、〇さん」

「はー? 〇? 一年こいつだよ?」

「今二十一歳で、今年で二十四五」

「トト」とは四つ上か……そんな年上の〇〇トビリビリ知つ合つたんだよ?」「

「えー……?」

田中に言われて、俺は思い出す。

初めてナツに会つた日の、俺がナツを好きになつた、そのきっかけの出来事を……

「んなの勿体なくて言えるかよ~」

誰よりも、綺麗で可愛かつたナツのことは、いくらダチでも言えるわけがない。

あの時のナツは、俺だけのものだから。勿論、今もナツは俺だけのものだけ。

「お前……キモいぐらいいトトレトレしゃがつて……どうせまた巨乳なんだろ?」「

呆れたように田中は叫ぶ。

「そうそうー、俺の推定で、上から90・59・86のEカップなんだけどな、おっぱいすげーの一、あのおっぱいはマジです!」
「神様の芸術品……いや、つつかれ自体が神様……おっぱいの神様そのものだつて!」

「お前なあ……そんなこおっぱいおつぱい連呼するなよ
田中はため息まじりに叫ぶた。

頭の中にナツのやれを浮かべると、思わず興奮してしまった。でも、ナツのおっぱいの素晴らしさは、こんなもんじゃない。語りたいと思えばまだ語れる。

「まあ、お前らしげしげやあお前らしげけどなあ。どうせまたそこだけ見て選んだんだな」

「何だよ、失礼な。俺は今も昔もそこだけで彼女選んだりしねえよ。人聞きの悪いことを言ひ田中に対し、俺は口を尖らせた。

「つづか、最高なのはおっぱいだけじゃないんだって！ 頭だってかなり美人で可愛いし、料理できるし掃除できるし、何でも出来るあんなにいい彼女は他にいないって！」

「ふーん。お前がそこまで絶賛するのも珍しいな。……写メとかねえの？」

「あー撮るうとしたら嫌がるからいいんだよなー」

俺的には、ナツの写メを待ち受けとか着信とか発信とか、全部の設定画面にしたいくらいなのに、ナツは物凄い勢いで嫌がる。代わりに俺の写メを撮つていいくつて言つたら、いらないつて言われた。

さすがにそれはちょっとショックだった。

「ふーん……つうかわ、口つけて忙しくねえの？ しちゅう会えるもんか？」

「ん……まあ都合が合わなかつたら会えなかつたりするけど……でも家近いから会おうと思えばすぐ会えるし

「へーえ。そんなもんなのか

「おひひ。井、それよりも俺と彼女はいつも心で繋がってるからさ」

「うわっ。何だよそのデパート真似。なんかもひ、こいつそムカツくわ」

田中には、ちょっと冷めた顔で見られた。

「へへひ

それでも、ナツのことを想つと、俺の顔は緩みっぽくなってしまった。

ナツと付き合って一年。
やっと一年とも想つて、もう一年とも想つて、まだ一年とも想つ。
一年と二年の間、長いみたいで、実はずとも短い。

そんなことにも気づかず、俺は、このたった一年で、ナツとは本当にいつも心でしっかりと繋がっている、何も言わなくともナツのことは何でも分かる、勝手にそう想っていた。

16 ハプニング

一日後……

「はあ……」

今日も俺はカフェでバイト。

今日の俺は、切ない。ため息ばっかり出る。

「おい、沖田。今日何度目だよ。そのウザい態度やめや！」

休憩中、大川先輩に言われた。今日も大川さんと同じシフトだ。

「すみません……でも、今日はちょっと……」

「何だ？ また彼女絡みか？ あ、とつとう彼女と別れたか」

「違いますよ！ しかも何でちょっと嬉しそうなんすか！」

失礼な大川先輩に俺は思わず大きな声を出してしまった。

「おい。客もいるんだから静かにしろよ。……つたく。お前が彼女と別れたらもうウザいぐらいのノロケ話聞く必要もなくなるからな

「なんだ。ひがみですか」

「おつ前……」

先輩のこめかみが引きつった。

「彼女いるやつのやうごう台詞が一番ムカつくんだよ……」
最小限の声で言いながら、先輩は俺の頬を思いつきりつねった。

「いててててつ！ すんません！ すんません！」
あまりの痛さに俺は必死に謝った。

ちなみに、大川先輩は、ここ暫く彼女と長く続いてないらしい。
そして、今はフリーだ。

「何か言つたか？」

「言つてませんで！」

心の声まで聞こえたのか……恐ろしい。

「で、何があつてそんなため息ついてんだよ」

ようやく俺の頬を離した先輩が言つた。

「いや……その、彼女に会いたくて……」
俺はまたため息をついた。

「……は!? お前何言つてんの？ つい一昨日『レデレレ』しながら
彼女が家に泊まりに来るとかどうとか言ってたばっかりだろ？」
先輩は手を丸くして言つた。

「やつですけども……」

「何だよ。結局彼女来なかつたのか？」

「来ましたよ。それはちゃんと来ました。こつものよひでひやんとラブライブでした」

「……こちこちウザ这种事情、鬱陶しい。……それで何でそりなつてんだよ」

「何でつて……特に理由はあつませんけど……」

本当にどうしたのか……

一昨日会つたはずなのに、なぜか俺はもうナシ切れ状態だ。

その前なんか一週間も会えてなかつたはずなのに、今回はたつた一日だ。

なんか燃費が悪いみたいだ。

「そんなにしようつむつ会いたいもんか?」

意外なことを先輩は言つた。

「当たり前ですよー ホントなら毎日でも一緒に居たいくらいなんですからー」

「ふーん。俺はそういうの無理だから。想手にもよるけど、絶対しつぶくなる」

「俺は会えない方が無理です……」

「……俺がもし女だったら絶つ対お前とは会わないな。今も会つてるとは思わねえけど」

「俺もそう思います。……はあ……」
俺は再びため息をついてしまった。

本当に今日は気分が乗らない。

「……んなため息ばつかつくんだつたら彼女に会えぱいいじゃねえ
かよ」

先輩の方が呆れたため息をついて言った。

「……いいんすかね？」

「お前の彼女のことなんて俺が知るかよ。自分でだけ」

そりゃそうだ。

ナツにはメールで連絡がつぐ。会えるかどうかなんて、それで聞
けばすぐに分かる。

するだけでもしてみようかな……もしだめならダメで諦めよう。

そう思いながら、俺はナツにメールを送つた。

『今日会いたい。会えない?』

今の時間帯なら、ナツは毎の休憩時間のはず。ちょっとしたら返
事が返つてくるだろ?。

……と、十分弱くらこでナツの着うたが鳴つた。

メールを開いてみると、

『ちょっとだけなら……会うだけね?』

そう書かれていた。

「先輩！ 会えます！ 会えますってー！」

俺は感激で思わず先輩に報告した。

「ああそっかい。よかつたな。俺には全然関係ないけどな」
先輩はめんべくせうにそう言った。

ナツに会えると思つただけで、俺のテンションは急上昇した。
これだけ俺のテンションを変えることができるのば、ナツしかい
ない。

ナツはいつも俺が会いたいと言つと、都合が合ひ限り会つてくれ
る。で、大体お泊りコースになる。

ナツは平日にお泊りは嫌らしい。

まあ、確かに次の日に仕事だとしんどいのだりうなび……

でも、俺は我慢できない。だって我慢できないお年頃なんだもの。
特にナツに対してだと、理性がきかなくなる。

そんな俺を、ナツはいつも受け入れてくれる。

ナツは、俺の期待を裏切らない。そこもナツの魅力的なところだ。

今日は四時でバイトが上がりで、俺はすぐて家に向かった。

ナツが帰つてくれまだまだ時間がある。

小腹がすいた俺は、途中でコンビニに寄つた。

軽く食べるものを買おうと思つたけど、俺の用意したのはペーパーバッグだった。

田に入ると、無性に飲みたくなつた。

今日はテンション高いから、飲んじゃえ！

そう思つて、俺は缶ビール一本と、つまみを買つて家に帰つた。

そして、約一時間後……

「ちよつと……何よこれえ！？」

部屋にやつてきたナツの第一声はそれだ。

こつもと回じ、ナツの声……

「あ、ナツ~」

ほん酔いで部屋に寝転がっていた俺は、ナツに向かつて持つているビールの缶を手の代わりに振った。

「ちょっと匂！ 何でこんなに散らかってるのよ？ 一昨日片付けたばっかでしょ！？」

ナツは怒った声で言いながら、ゴミ袋片手に俺の部屋のゴミ箱を片づけていく。

一日前にも同じこと言われた。それは、俺の部屋が一日前と同じ状態だからだろ？。

俺は別に散らかしてるつもりはない。本当にそうだ。なのに、部屋は自然と散らかっていく。不思議なもんだ。

「もーっ！ なんでゴミはゴミ箱に入れないのよ！ いつも言つてるでしょ~」

そう言しながらナツは次々とゴミ箱にいいく。

そんなナツを俺は下から見上げていた。

「全くもつひとつくこな所に寝てられるわね~」

見上げていると、ナツのスカートがヒラヒラとゆれて、チラチラと太股が見える。

もう少しでパンツが見えるのに、そこからだとなかなか見えない。

俺は、ナツに気付かれないようにナツの後ろに近付いていった。

あとちょっと……見えた！

「あ、今日のナツ、パンツ黒～」

しかもレースで超セクシーだ。

「やだつ……ちよつと、もうつー匂ー！」

ナツは慌てた様子でスカートを押さえて俺から離れた。

「ナツってばやらしー。あ、そのパンツって俺のため?
ちよつとからかうつもりで俺は笑つて言つた。

「知らない！」

ナツは俺に背中を向けた。

耳まで真っ赤になつてるのが俺には分かつた。

本当にもう。可愛いんだから。

「ナツちゃん」

たまらず俺は後ろからナツに抱きついた。

「きやつ……!? 何、匂!」

ナツが驚いて反応する。

「しょ?」

俺はナツの耳元で言った。

何を、なんて、言わなくたってナツには分かるはずだ。

「えつ……」

分かってるから」ソ、ナツせんな反応を見せる。

「や……今日は余つだけでしょう！ 明日、会社だってあるんだし……」

予想通りのことをナツは言つ。

でも、ナツは俺の期待を裏切らないはずだ。

「匂つ……放して。今、掃除してるんだから」

ナツは俺の腕を解こうとするけど、そうさせない。

「ナツのパンツ見たら発情しちつた」

俺は腕にそつと力を入れてぴつたりとナツにくつついた。

「一回だけ……」

俺は、ナツの首筋にキスをして、ナツのおっぱいを掴んだ。

「ダメだつてば……あつ」

『ダメ』といながら、ナツはいつもの、俺しか聞けない声を出した。

「ナツ……」

ナツにキスをして、俺はそのままいつものようにナツに埋もれていた。

気付いたらもう朝だった。

「……あれ。ナツ、もう起きたの？」

田を覚ましてみると、ナツはもうすでに服を着て、化粧をしていた。

「だつてもう七時よ。旬も起きなくていいの？」

ナツは鏡に顔を近付けながら言った。

七時か……

「ん……今日バイト昼からだし、まだいい。だるいし」

俺はまだ少し眠くて枕に顔を埋めた。

「……そう

まだ寝る時間あるのに、早くに田が覚めてしまつと、なんだか損した気分になる。

あ、でも今朝は早く起きないとナツに会えないとひりだつたからよかつた。

「あれ……ナツ、掃除したの？」

部屋を見てみると、昨日ナツが途中で掃除をやめた（俺がやめさせたんだけど）はずなのに、なぜかきれいになつていた。

「うん

ナツは頷いた。

「あ、朝ごはん作ったから、食べたかつたら食べて」
続けてナツがそう言った。

一体ナツはいつ起きてるんだろう。

いつも俺が早いつもりで起きても、絶対にナツの方が早いし、
今日なんて掃除と朝ごはんを作る時間があつたなんて。

「ちやんとラップはゴミ箱に捨てるのよ？ 分かった？」

「うん」

ナツに言われたこと、俺は頷いた。

ナツは、鏡の方をじっと見て、口紅を塗っている。
俺はそれをじっと見た。

「何？」

ナツがチラシッと二の眸を見た。

「ん……女人が口紅塗るとこうして色っぽくなつて思つて。
でもナツのは他の人の三倍キレイ」

俺は思った感想を言った。

「もう……何言ってんの」

ナツはそう言つて軽く笑つた。

女の人が口紅を塗る仕草は、その人の女らしさが強調されると思う。特にナツの仕草なんて、女人のセクシーさを凝縮したような感じだから、ものすごくいい。

それに、唇に意識が集中するせいなのか、すぐそこがセクシーに思えて、すぐくキスをしたくなる。

勿論、ナツとならいつでもどこででもしたいのは当たり前だけど。

「あ。ナツ、今田、チューしてなによ」

俺はちゅうど思こ出して、ナツに向つた。

俺としたことが、肝心なことを忘れるといひだつた。

「チューしよっ」

俺はベッドから下りてナツのそばに寄つた。

「もつ……ロップ塗つてから言わないで

「一回だけ一回だけ」

そう言って、俺はナツの唇にキスをした。

もつべつべつべつ時間をかけて、ナツを味わつていぐ。ナツはもう歯磨きをすませていたらしく、ミントの歯磨き粉の味がした。

「もつ……ロップ塗り直さなきや

唇を離すと、ナツはクールに言つて鏡の方を向いた。

「ナツ~

俺はほんの悪ふざけのつもりで後ろからナツに抱きついた。

「あやひー。

ナツは予想通りの可愛い反応をした。

「匂い離してつ。リップ塗れないでしょ！……やだ、ちょっと
！　どこ触つてんの！？」

太股と腰に触つただけで、ナツは敏感に体を震わせる。

「ダメ！　あたし今から仕事なんだから…」

「触るだけ〜」

俺はナツのおっぱいを掴んだ。

「やだつ……あつ

「ナツのエッチ〜。感度いいんだからなあ
そこがナツの最高なところだけど。

「もうつ！　ふざけないで！」

真っ赤になつたナツが、腕を振り上げた。その手には、口紅があつた。

そしてナツが腕を上げた拍子に、それがナツの手から落ちていいく。
そのあとのことは、いくらバカな俺でも予想できた。

「あ……！」

ナツの口紅は、落ちた衝撃で一つに折れてしまった。

その瞬間、さつと頭の血が引くのが分かつた。

「ナツ」めん！ 本ひ『』めん！

俺は謝りひとつ意識する前に謝っていた。

となんでもなことをしてしまった。まさか『』であるつもりなかつたのに……

「もういいよ

ナツは静かにそう言った。

そして黙つてティッシュで折れた口紅を拾つて床を拭いてくる。

いつものナツと違う。

いつもなら、いつもいつももつと怒るのこ
もしかして、本気で怒らせた……？

「『』めん……」

どうしていいか分からなくて、俺は下を向いて謝るしかできなかつた。

「別に怒つてないから……もうこいよ？ 私も注意してなかつたしさつきよりは優しくナツの声が聞こえて、俺はナツの両手に顔を挟まれて顔を上げた。

ティッシュで、軽く顔を擦られる。その後のティッシュがピンク色になつていて、俺の顔にナツの口紅がついていたようだ。

「じゃあ、行ってくるね

コシンとおでこ回しで当たつて、ナツが言った。

「うん……行ってらっしゃい

俺はただそう言って、ナツを見送るだけだった。

「はあ……」

ナツが出て行つて玄関のドアが閉まつたあと、俺はため息をついた。

ナツは怒つてないって言つたけど……あれつて怒つてるかもだよな？ つうか、呆れられたかも……

いや、いつもナツは俺に対して呆れた風な態度見せるけど……でもいつものはもっと『しようがないな』って雰囲気だし……今回のは流石にそれではすまないことしちゃつたし……

「はあ……」

下を向いてまたため息をつくと、俺の裸の下半身も同じようじよぼくれていた。

シャワー浴びて服着よう……

今の格好が情けなくなつて、俺は立ち上がって風呂場に行つた。

シャワーを浴びたあと、ナツが作ってくれた朝ごはんを食べようとした台所に行つた。

ナツは、サンドイッチをラップに包んで置いてしてくれた。

ああ、だから『ラップはちやんと舐てるのよ』か。
今更になつてナツが言つていたことの意味が分かつた。

ラップを開けて、サンドイッチを一つ取つて食べた。
中身は俺が好きなハムとチーズだった。

ナツは、いつも俺が好きなものを用意していつてくれる。しかも、
それは全部おいしい。

どんなものでも、ナツが作ってくれたものなら、他のものと比べ
ものにならぬいくらいおいしくなる。

それはもううん、今日のサンドイッチも同じだった。

おこしかつたけど、俺の口から出るのは、ため息だけだった。

「はあ……」

ナツ、どうしたら許してくれるんだろう……

「おはよー。沖田鷲」

今日は十一時からカフュの方でのバイトだ。つよつと早めに起き
控え室にこもると、煙をかけられた。

「あ……なるちゃん。おはよ」

声をかけてきたのは、今日同じシフトのなるちゃん（本名・鳴海美奈子ちゃん。俺と同じ年）だった。

なるちゃんは、小さくて、可愛くて、バイト仲間の中で人気がある。でも、俺は知っている。一見Dカップのそのおっぱいは、パットでできているところを……

俺には服の上からでもそれが本物か偽物か（それか寄せた上げできたものか）がわかる。これはちょっとした特技だ。

「どうしたの？ 元気ない？」

なるちゃんが俺の正面の椅子に座り、首を傾げて聞いてくる。

「…………」

あ、なるちゃんに相談してみようかな。なるちゃんなら真剣に考えてくれそう。（大川先輩と違つて）

「なあ、なるちゃん。ちょっと相談なんだけど…………」

俺はなるちゃんに今朝あつたことを簡単に話した。

「…………そつか…………それで元気ないんだ。沖田君、彼女さんのこと大好きだもんね」

なるちゃんは頷きながら聞いてくれた。（やっぱり大川先輩と違つて）

「それで、どうしたら許してくれると思つ？ なるちゃんなり、ど

「わざわざお詫びを思つへ。」

なるちやんには彼氏がいる。だからそれを聞いたり参考になるかと思つてきいた。

「……うーん。あたしなら……謝られたんなら別に何もつじこけどなあ」

腕を組みながらなるちやんは言つた。

「まあ、物に因るけど、口紅ぐらーなら……よっぽど大事にしてたとか、高価なものじゃないなら別にいいかな。それに、謝られてるのに怒るのって結構気が引けるし……」

「……そういうもんなの？」

でも、ナツは結構怒る。いや、可愛い怒り方だけど……。

あ、でも、ナツが怒るのって、俺がふざけた時だよな。俺は遊んでるつもりだからちやんと謝つたりはしないし……

それになんかで謝つた時はだいたい『いいよ』って言つてくれるし……

引越しの時にバカやつたのも、かなり謝つて許してくれたんだよな。

なんだ。特に難しく考える必要ないのか？

「それにもか、沖田君の彼女さんもあんまり些細なことで喧嘩とかしあくないと思うよ。あたしだつてそうだもん」

なるちやんが、俺の背中を押してくれることを言つてくれた。

「……はとりあえず、いつも通りにして大丈夫だと思つよ。逆に沖田君が変に意識してたら、彼女さんは嫌なんじゃないかな？」

「……そつか」

俺は時計を見た。

今ならナツは休憩中のはず。

「俺、彼女にメールしてみる」

ポケットから携帯を取り出して、俺は操作する。

「うん。頑張れ」

なるちやんが笑顔で応援してくれた。

『ナツ』

今昼休み？俺は今からバイト

朝はホントごめんな？

サンドイッチめちゃくちゃウマかつたよー…さすがナツだな ありがとな！』

いつも通りのノリで、それでも一応朝のことほんつ一度謝つておく。

それで俺はナツにメールを送信した。

すると、五分後ぐらいにナツからの返信があった。

『どういたしまして

朝のことは本当にもう怒ってないよ
バイト頑張つてね。ちやんとしてくれるんだよ?』

ナツからのメールも、可愛い絵文字が使ってあって、こつもと回
じだった。

思わず、こやけてしまった。

「彼女さんか?」

「うふ!」

なるちやんに返事をしながら、俺はナツに返信した。

『うふ!ナツ最高!...愛してる』

ハートマークの絵文字をたくさん使った。

それでも、今の俺の気持ちだけではなくおそれないうへ
らいだ。

でも、これならなるちやんの言つもあり、大丈夫そりだ。
やつぱつナツは優しいな。やつぱつ、俺に比べると……

「どうしたの? 急に無表情になつたけど……
なるちやんがこつて、俺は自分の表情に気付いた。

思ったことが表情に出てしまつたようだ。

「いや……俺の彼女、俺より年上だから……当たり前だけど、考え方とか俺より大人で……だからこうじう時も、彼女がすんなり許してくれるから、喧嘩にならずにすんでるっていうか……」

これは、ずっと不安に思つてきたことだ。

「俺、ただでさえ年下だからさ、彼氏として恰好つかないのなんて
ショッちゅうだし、今回みたいに彼女がいって言つてくれなかつ
たら收まりがつかないし……彼女のために結局何もしてないし、で
きないから……情けないよな」

俺は自分で言つてため息をついてしまつた。

本当に、情けない……

俺がナツのためにできる」とつて、なんなんだろ……

「あ、そうだ」

なるちゅんが思い出したよつと声をあげた。

「ちよつと待つてて」

なるちゅんは、そつと椅子から立ち上がりて控え室を出て行
つた。

一分もしないぐらいでなるちゅんは戻つてきた。

その手には、女人向けのファッショソ雑誌があつた。

「何、それ？」

なんでいきなり雑誌なのか分からず、俺は首を傾げた。

「えつとね……確か……」

なるちゅんは雑誌を開いてページを捲つていぐ。

「あ、あつた。……これ！」

開かれたページを、俺に見せる。

そのページには、『この冬一押しの口スメ』と大きく書かれている。

これを見せられても、俺には何のことかわからなかつた。

「ここー、ここ見て！」

なるちやんは雑誌の左ページを指さした。

そこには色々な口紅の写真が載つている。

「沖田君、彼女さんのリップ折っちゃつたんでしょ？だから、新しいのをプレゼントしたらどうかな？日頃のお詫びとかも込めてなるちやんが言つて、やつと理解できた。

「なるほどー、いいな、それ！」

俺は雑誌で口紅を見てみる。

色んな種類があるんだな……

口紅一本でこんなにあるということを、俺は初めて知った。

あ、これナツが持つてたのと似てる。ていつか、多分これだ。

見覚えがあるのを見つけて、俺はその横の文字を読む。なにな

……

『色んなシチュエーションで使えるカラーが揃つたナントカ（多分

ブランド名。ブランド名が英語だから読めない）は、超人気。特に一番人気のローズピンクはお店で売り切れのことが多いんだとか』

……へえー……そ、うなんだ。

あ、値段も書いてある。

「え！？」

俺はそれを見て、目が飛び出すかと思つた。

「く……口紅つてこんなに高いもんなの！？」

ナツが持つっていた、俺が今朝折つてしまつた口紅の値段は、三十五円もした。

「……ああ、これ？ でも、こんなもんだよ。ブランドでも安いのだと千円しないものもあるけど。でもいいやつは大体それぐらいしちゃうかなー」

なるちゃんがそう教えてくれた。

……知らなかつた。

だつて口紅つて消耗品だろ？ それに百均でも売つてるの見たことあるし、絶対こんなにはしないと思つてた。

こんなに高いのを、俺は折つちやつたんだ。

「はあ……」

「はい、元気出して！ 選ぶんでしよう！」

あ、そうだった。落ち込んでる場合じゃない。なるひさんに励まされて俺は雑誌に手を戻す。

「これ、彼女が持つてると同じなんだ」「俺はそれを指さしてなるひさんと言った。

「あ、そうなんだ。じゃあ、これにするの?..」

「……うーん

俺は雑誌を置いて悩んだ。

「向こうに悩んでるの?..」

「いやせ、俺、実は彼女にみせんとしたプレゼントするのって初めてだから!」

「え? そうなの?」

なるひさんは驚いた顔で俺を見る。

「今まで誕生日プレゼントとかどうしたの?..」

「その時は……俺が金ないの彼女も知ってるから……『旬が祝ってくれるんならプレゼントなんかなくても嬉しいよ』って言われて、逆にプレゼントはいらないみたいな雰囲気だ。でも、何もあげないわけにはいかないから、こここのケーキ、店長にちょっと安くしてもらつて買ったのをあげたんだ。それで十分喜んでくれたかい!」

それ以来、イベント事の俺からのプレゼントは、いつもケーキになってしまった。しかも、ホールは流石に高いからカットされたや

つ。

でもまあ、うちのケーキは結構評判いいし、選ぶのも考えて季節限定物とか、新商品とかにしてるから、ナツは喜んでくれるけど。

「だからさ、初めてのちゃんとしたプレゼントだから、もひちよつと選びたいってこいつか……」

「やつかあ」

確かに、俺が折ったのと同じのを選んだ方が、ナツ好みにはずれることはないだろうけど……でもやつすると、ただの弁償だし、プレゼントっぽくない。

せめてもうちょっと考えてから決めないと。

「……でも、どれがいいかってイマイチわかんないんだよなー……」

問題はそこだ。

化粧品のことなんて全く分からない俺には、なるちゃんが貸してくれた雑誌のものはどうがどう違うのか、違いが分からない。

「うーん……でも、それに載ってるやつは全部モノはこいよ。あとは好みの問題だから、沖田君が彼女さんに合つと思つたやつでいいんじゃない？」

なるちゃんも雑誌を覗きながら考えててくれてこる。

ナツに合つそつなか。簡単なよつで難しいな……

ていうか、これつて、俺のセンスが試されるんじや……あと、俺

がどんなだけナツのことを分かつてゐるか……

ナツの好みを知つてゐるかどうかはまだ自信なくはないけど……それで選んだやつがナツの好みじゃなかつたらマジでショックだし……

そう考へるとプレッシャーだ……

俺は、間違いのなこように、一つずつじっくりと見る。

……これは形が絶対ナツの好みじゃないし。これは俺的に微妙だな。

あ、でも、化粧品は見た目ってあんまり関係ないよな。使つたら一緒なんだし。

ナツってどうこう基準で化粧品選んでるんだ？

案外俺はナツのことを分かつてないのかもしね。でも、こんなことまで普通は知らないよな？

ちょっと不安になつた。

『CIMでも話題の新商品』

ふとその文字に田がいつた。

「あ」

その口紅を見た瞬間、ピンときた。

これなら、ナツは好きかもしね。

細くて、黒に金色の模様がはいつている。

「いいのあった？」

「うん。これ」

俺はなるちやんにそれを指さして教えた。

「あ、これ？　これでやつてるよね」

「やつの？」

「え、見たことない？」

「いやー？　あんのかなあ」

雑誌にも書いてるけど、俺は普段口紅のじMなんて特に気にして見ないから、見たことがあっても思いつかなかつた。

「これって、落ちにくくっていいんだって。友達が使ってるんだけど、『飯の後も塗り直しかなくともいいから楽だ』って言つてたよ

「へえ……やうなんだ」

塗り直ししなくていいのか。

そう言えば、今朝、キスした後にナツ、塗り直そつとしてたつけ。

それで俺がふざけたから……

「決めた！ これにする！」

俺がこれをあげて、ナツがこれを氣に入ってくれたら、もう回りようなことにならないですむだろうから。ナツを嫌な思いにさせることも少なくなるだらうから。だからこれにする。

「うん。いいんじゃないかな。じゃ、このページあげるね」なるちゃんは俺が選んだ口紅が載つてあるページをビロビロと破していく。

「え？ いいの？」

「うん。いいよ。もうこのページは見ないから。はい」なるちゃんは破いたページを俺に渡してくれた。

「ありがと。なるちゃん」

「どういたしまして。頑張ってね、沖田君」

なるちゃんは笑顔で応援してくれてる。うん。頑張らなことなー。

「お疲れでしたー」

五時にバイトを上がつて、俺はカフェを後にした。

今日は、これからまだ居酒屋の方でバイトがある。六時からだか

り、このままゆっくり行つても十分間に合つ。

居酒屋に向かいながら、俺は悩んでいた。

さつき気付いたけど、俺がナツにあげようと決めた口紅も、そこそこ高い値段だった。ていうか、正直ナツが持つてたやつよりも高かつた。

どうすっかなあ……給料日、まだ先だから金ないし……すぐに買えないぞ。

いや、急ぐ必要はないのか。別に誕生日とかのプレゼントってわけではないし、こいつまでにって決まってるわけじゃないもんな。暫くちゅうりゅうと金貯めて……

いやいや、んなこと言ひてたら、絶対、今更? って時期になるよな。それじゃあ、意味ないだろ。

じゃあ、いつにしよう。ナツの誕生日はまだまだ先だしなあ……

俺は色々考へて、頭の中にカレンダーを思い浮かべる。

……あ。三月十四日。ホワイトデー。

やうだ！ その日だ！ 今月のバレンタインにナツからチョコもかう（予定）だし、そのお返しだつたらなんの違和感もなく渡せるし、来月までには何とか金貯められるだらう。

決めた！ ホワイトデーだ！ それまでこいつもよつは多田にバ

イト入つて……うん！　いける！

ナツのために、いつもろくに働かせない頭を働かせる。それはすぐ楽しいから、全然苦じゃない。

頭の中がナツでいっぱいだと、すぐ幸せ。ていつか、いつも俺の頭の中はナツで一杯だけ。

あ。

人^レみの中で、『いいもの』を見つけた。それに向かって俺は走つた。

「ナーツちゃんつ」

俺はすぐに『いいもの』に抱きついた。

それは、勿論、ナツだ。俺の少し前を歩いてるのを見つけたから、追いかけてきた。

「匂！？」

ナツはすぐに俺の名前を呼んだ。

「当たり～」

すぐに俺と分かってくれるのが、すごく嬉しい。

まあ、こんなことしていいのも、できるのも俺だけだけど。

「 もう少しちゃー！」

ナツは顔だけをこっちに向けていつもの様子だ。

よかつた。今朝のことと同じにしてないみたいで。
俺は無意識に顔を緩めて笑つた。

「 ナーッシ～。こんなところで会つとか嬉し～」

俺はその嬉しさを表現してナツのことをもつと抱き締めた。

「 もう少しちゃー。恥ずかしいから離して」

ナツは恥ずかしがって俺の腕を解く。

「 旬……誰か確認しないでいきなり飛び付くのはやめてってこいつも
言つてゐるでしょ。間違つてたら変質者になるじゃなない

ああ、やつぱりこつこつ怒つた風な顔は可愛いなあ……

「 俺がナツのこと間違えるわけないじゃーん」

なぜなら、ナツは輝いているから。だから、人ごみの中でも、後
姿でも分かるんだ。

「 ナツ、何してんの？ 帰るといひや～。」

「 うん。旬は？」

「 俺はバイト。途中まで一緒に行くわ！」

俺は手を繋いでナツの手に触った。

「うわっ。ナツ、手え冷た！」

予想外にひやっとして俺はビックリした。

そういえば、ナツはこの時期、手足がすぐ冷えるって言つてたつ
け。

「じゃあ……」

俺はいつものようにナツの指に俺の指を絡めて繋いで、俺が着て
いるダウンのポケットの中に入れた。
ナツの手は小さいから、すっぽりと収まつた。

「これでよし！ あつたかい？」

俺が聞くと、

「うん……あつたかい」

ナツはそう頷いた。うん！ よかつた！

俺は多分、ナツがいないとダメなんだろうな。ナツがいなかつたら、幸せになれないんだ。

ナツと手を繋ぐ、たつたこれだけでも、幸せになれるんだから。

「旬、今からビビのバイト？」

「居酒屋だよ」

聞いてきたナツに俺は答える。

「……居酒屋つて、あの？」

ナツの表情がちょっと微妙なものになつた。

「そう。あの」

ナツが考えたことはすぐに分かつたから、俺は思わず笑った。

ナツが思い出しているのは、きっと俺達が出会った時のことだ。

「まだ続けてたの？」

「うん。あそこ時給わりといいし。店長も氣前いいし。あ、ナツのこと今度連れてこいつて言つてたよ。ナツ、全然行つてないんでしょ？」

俺がバイトの時は勿論、それ以外でもナツは全然店に顔を出してない。

俺は知らなかつたけど、店にわりとショッチャう店に来ていたらしい。なのになれ以来来なくなつたって、店長が言つてた。

「当たり前でしょ！ 恥ずかしくて行けるわけないじやない！」

ナツは少し顔を赤くしていた。そしてすぐに真顔に戻つて、

「ていうか、店長、あたしたちのこと知つてるの？」

「うん。だつて俺、言つたし」

「もー……言わなくていいのに」

そう言つてまた顔を赤くした。

「口口口表情変わつて……本当に可愛いなあ……

「あ。そーだ。今度行つたらさ、また帰りホテル行く？」

ちよつとかりかうつもつで、俺は笑つて言つた。

「もつー、何言つてんのー、あたしは行かないからねー、ていうか、あの時のことは忘れてってば」「必死なナツが可愛い。」

「普通彼女との初めてのHツチのこと忘れられるわけないじゃーん？ ナツは忘れてるみたいだナゾアア」

「もうー、匂ー。」

ナツは顔をリン、「みたいに真っ赤にして俺をキッと睨む。でも、それすらも可愛い。」

「本当、あん時のナツ可愛いかったなあ」

勿論、思に出すのはその時のこと。

あの時のナツは、ビリの誰よりも可愛くて、綺麗だった。

「あ、今もめぢやくぢや可愛いけど。つか、ナツはこいつで何しても可愛い」

ビリの誰よりも可愛いと、綺麗なのは、今も変わらない。ナツはそんなナツのまま、変わらない。

「ビリが？」

突然、ナツが真剣な顔になつて聞いてきた。

「具体的に、ビリが？」

そうやって聞かれて、頭に浮かんだのは、やっぱナツの全てだつた。ナツの一つ一つの表情に、行動に、言葉に……

「え……そんな恥ずかしくて言えなって、それを言ひのは、流石の俺も恥ずかしかった。

「いいじゃん。何でもー、何がにしろ、俺がナツのこと好きなのは変わんねえもん」

顔が熱いのが分かった。今の俺、多分顔が赤いんだろうな。

ナツの顔も赤くなつていて、俺とナツはお揃いなんだろうと思つた。

些細なことがあつても、すぐにつつも通りになれた。

これからも、ちょっとやそっとのことじや、俺とナツの関係は崩れることなんてないだろ？と、俺らの関係はそんなにヤフじやないと、この時の俺はそう信じていた。

1-8 バレンタイン前

「ナッシー。『ハーフでもダメ?』」

「ダメ」

「ビーおじても?」

「ダメ」

「……と、思わせといで?」

「ダメだつてば」

れつきから電話で『ねばつか。ナッシは全くこいつてこいつてくれない。』

「何でダメなんだよう」

「だから、言つてるだじょ。平田だから

「……せっかくのバレンタインなにー」

そう。間近に迫ったバレンタインに、余裕ひととは決まつてゐるから、俺はナッシに泊まつでいいよな? と聞いたら、

『平田だからダメ』

と、あつやつと言われてしまつたのだ。

それでは、これから泊まりにしてもらおうと粘りこむのだから、ナツの意見は全く変わらない。

「旬。ちやんとチョコはあげるから。あ、ケーキの方がいい？ チョコレートケーキ」

ナツの手作りチョコレートケーキ……

いやいやいや。振り動かされるな俺！

俺はその日ケーキよりナツが食いたいんだ！

つうか、普通さ？ バレンタインなんだから、平日でもその日は特別じゃん。ナツの方から泊まりがいいとか思わないもんなのか？ そりゃ、ナツはイベントとか、必要最低限のことすればいいみたいだけどさ？

「旬ー？ ケーキいらぬの？」

そんな……こぐらケーキだからって、こぐらナツの手作りだからって、心動かされるわけが……

「いるー！」

ありますけど。思いつきました。

「クリームたっぷりにしてくれなー…………あと、次の休みは絶対泊まりなー？」

悪あがきでそれだけ条件をついた。

「うん。 分かった」
とりあえず、ナツがそう言ってくれたから、IJIは我慢する」と
にする。

でも……泊まりがよかつたなあ……

翌日。

今日はカフュで七時までバイトだった俺は、更衣室で携帯をチヒ
ックする。

ナツにメールをしようとしたら、すでにナツからメールが来て
いた。

珍しい。ナツの方からメールくれるなんて。それでも嬉しくて俺
はすぐそのメールを開いた。

『今日、これから友達と買い物行くの。
だから、帰ってきたら電話するね』

こんな内容だった。

なんだ……ナツ、買い物かあ。
ちょっとテンションが下がった。

でも、電話くれるんだ。それならいいかも！
そう思つだけですぐにテンションは上がる。

ナツから電話！ ナツから電話！ ナツから電話！ ナツから…

こんな調子で、俺は家に帰つて、メシを食つて、風呂に入つて、
その間一度も携帯を手放さなかつた。

そして今は、ベッドの上に寝転がつて、携帯とじりめつゝ状態だ。

来ねえなあ、ナツからの電話……

時間はもう九時を過ぎるくらいだ。

買い物に行つた友達とメシも食つてるのかな？

だとしても、そんなに遅くならなければ……そろそろくるかな？

そう思つた次の瞬間。

携帯のサブ画面が光つて『着信』の文字が出る。その相手は……
もちろんナツ！

「もしもし、ナツ？」

着信音が鳴るか鳴らないかで俺は電話に出た。

「うん。……相変わらず出るの早いわね。今何してたの？」

「ナツの電話待ってた」

俺はそのままを答えた。ナツの声が聞けただけで、すっごく嬉しい。

「そう……」

でも、なんとなく、違和感があった。

「ナツ、何かあった？」

気になつて、俺はナツに聞いた。

「え……何で？」

今の答え方も、ちょっと戸惑つた感じがした気がする。

「んー……何か声が元気ない。いつもと違う。『気のせい』？」

全体的にそんな感じがする。いつもは、もつと明るいと思つ。

「ううん。何もないよ。ちょっと友達と飲みすぎたからかな」

「えつ……ナツ飲んだの？ 大丈夫？」

今までと違う意味で心配になつて、俺は聞いた。

「どうして？」

「だつてナツ、酔つたら荒れるじゃん」

うん、一年前はすぐかつた。

「なつ……荒れないわよー。あの時は特別だったのー。ナツはムキになつた様子で言つた。電話の向こうでは、歯を尖らせて、ちよつとむくれた可愛い顔になつてゐるはずだ。」

「へへひ。やつか」

想像して、俺は笑つた。

「……ねえ、匂。……匂は、何であたしなかと付き合つてゐの? いきなりナツがそんなことを言つてきた。」

え、何で……?

「何でつて……そこにナツがいるから?」

頭に浮かんだことを、まんま言つたら、こんな言葉になつた。どうかできいたな、こんな台詞。

「……」

ナツは黙つてしまつた。

「何か違つ?」

「うそ」

「え~……つうか、何でいきなり?」

ナツがこんなこと聞くなんて珍しい。

「別に……今思つたから、何となく……だつて普通引くでしょ？酔つ払いの女とか。ていうか、旬がホテルに誘つたのつて下心？」

……ちょっと痛いところを突かれた。

「ん……まあ、ぶつちやけ？」

ここで否定するのも白々しい気がしたから、俺は本当にことを答えた。

「だつて、目の前でオッパイのおつきいお姉さんが『帰りたくない』つていうもんだからさ？ それできょっと、まあ……うん」これつてフォローになつてんのか？ なつてねえよな、多分。つうか、むしろ墓穴？

「こんな言い方したら、俺、ただのおっぱい好きの軽いヤツみたいだ。（おっぱい好きはそつだけど）

「でもさ、俺、それがナツでよかつたと思つてんだ」

たしかにきつかけは下心だつたけど、今ではそつ思つてこるのは確かだ。

「え……」

「ナツのこと、知れば知るほど好きになるから。じつこの、ナツが初めてなんだ」

今まで俺が付き合つてきた彼女のことも、付き合つている時は本気で好きだつたし、他の誰よりも大好きだと思っていた。

でもその大きさは、ずっと変わらないまま俺はそれが普通だと思っていたけど、ナツとは違う。

「……そんな恥ずかしい」と言わないで
ナツは落ち着いた声で言った。

「うん。自分で言つてちょっと恥ずかった」
流石の俺も、こんなこと言つたのは初めてで、言つてみると照れ臭いもんなんだなと思つた。

「ねえ、匂。十四日のことだナビ……」
いきなりナツが話を変えた。

「うん、何?」

「……匂がうちこ来るなら、泊まりでもこいや」

あまりにいきなりで、一瞬ナツが何を言つたのか、分からなかつた。

「え……いいの? 平田だからダメって言つたのに

口から出たのはそんな言葉だった。

でも、俺がいくら言つても泊まりはダメだっていつてたのは、つい昨日だ。なのに何でいきなり……

「うん……でもやっぱバレンタインだから、特別ね。……それに、ケーキ作るの時間がかかるし、匂がうちこ来るんだつたらもうくじめに作れるし……あと、朝もいつも通りにできるから」

ああ、そうか。確かにケーキ作るのは時間かかるよな。
俺はナツが言ったことに納得する。

「別に匂が嫌ならいいけど？」
ナツの言葉に、俺はほっとする。

「行く！ 絶対行く！」
俺はすぐにそう言った。

理由なんて、なんだっていい。ナツがせっかく泊まりでいって
言ってくれたんだ。それで嫌なんて言えるわけがない。

バレンタイン、すっごく楽しみだ！

19 掛け違い

今日はバレンタイン。平日だけじ、ナツの家に泊まりの日。

俺は今日が樂しみで樂しみで樂しみで……（略）しじうがなかつた。

なのに……

「はあー……」

俺は更衣室で制服に着替えながらため息をついた。

なんでこんな大事な日にバイト入ってるんだよ、俺。

今日はカフュのバイトが入つてゐる。

バレンタインだし、みんな用事データとかが入つてゐるみたいで、入りたくな
いって言つていた。勿論、それは俺も同じことだ。

だけど、誰も入らないこともできないから、ジャンケンで決めた。
で、俺はあっさりと負けてしまったのだ。

何でこんな口に限つて……

幸い、俺は昼過ぎから夕方の時間で、六時には上がる。どうせ
ナツが仕事終わるのも五時頃だから、ちょうどいいって言えばちょ
うどいい。

どうせバイト入つてなかつたらすることなんてなかつたし、時間
つぶしだと思えばいいんだ。

俺は携帯で時間を確認した。そろそろ入らないと……

「あ」

携帯の画面の端の電池の表示が、あと一つになっていた。この状態だったら、もし誰かからメールがきたり、電話が来たりしたらすぐ切れてしまうかもしれない。

バイト中は電源切つておこうかな。ナツからは多分来ないだろうし。

そう思つて、俺は携帯の電源を切つて、ロッカーの中に携帯を置いていった。

「いらっしゃいませ。一名様ですか？」

「はい」

「では一ひとつのお席にどうぞ」

今日はこのやつとりが多い。

しかも『一名様』というのは、男と女の組み合わせ、つまりカップルだ。

今日は、店長がバレンタインの特別キャンペーンをやると言つて、カップルの客は一人で二五百引きという『バレンタイン割引』をしている。

そのせいでもより客が多い。それも、カップルの。

つか、何、この忙しさ！？

客を席に案内して、オーダーとつて、ケーキ運んで、会計して、空いた席片づけて……

いつもはわりとゆつたりできる仕事も、今日は急いでやらないと
いけない。

次から次へと客、客、客……しかもみんなカップル。

「ねーえ？ まーは何にするの？」

「んー？ ゆんは何にしたあ？」

「あたしはあ、ショートケーキとフルーツタルトどっちにしようっかなーつて迷っちゃってえー」

「やうかあ。じゃあ、二つ頼んで半分口ある？」

「あ、それいいかもー！ そうしょー！ そうしょー！」

「じゃ、ショートケーキとフルーツタルト一つずつ。あと、ホットティーとホットコーヒーで」

「……かしこまつました。少々お待ち下さい」
カップルのオーダーを聞いて、俺はすぐにその場を離れた。

…………ちくしょうひ……田の前で堂々とベタベタしゃがつて……

すつ……げー羨ましいっての！

俺もバイトさえ入つてなかつたらナツと来たかつたつての！

あーあ……早く終わんないかなあ……

そう思つていたら、なんだかんだで忙しくて、すぐに時間は経つていた。もう上がりの時間の六時だ。

やつと終わる……そう思いながら俺は下げた皿を厨房の方へ返しにきた。

「あ、沖田君ー。」

呼ばれた方を向いたら、店長が急いだ様子で俺の近くへやつてきた。

「『めんー』終わりの時間だけど、もう少し入つてくれないかな？」
店長が手を合わせて俺に言つた。

「きなり意味が分からず俺は首を傾げた。

「実は、夜からの島崎君、インフルエンザで来れないって連絡入つて……」

俺は思わず大声を上げた。

「ええ！？」

「どうしたんですか？」

なるちゃんが俺達のそばにやつてきた。

「あ、鳴海さん！ 鳴海さんももう少し入れないかな？」

店長はなるちゃんの方にもそう言った。

「え？ 何ですか？ 何かあったんですか？」

「島崎君がインフルエンザで来れなくなっちゃって……それで大川君に連絡してみたら、今、別のバイトが入ってるから、それが終わつたらすぐ来てくれるつて言つてくれたんだ。でもそれまでまだ時間かかるみたいだし、今日予想以上にお客様が入ってるから、ちょっともたなそつだから……せめて大川君が来るまでいいかい……」

一十六歳で氣弱の店長は、泣き出しそうな顔になつている。

「……分かりました。少しでいいなら入ります」

なるちゃんはため息をついて言つた。

これは、俺も残らないといけなさそだな……

「じゃあ、俺も入ります」

本当は早く帰りたい。早くナツに会いたい。

でも、今の店の状態だと本当に人手が足りなくなるのは、俺にだつて分かる。分かった上で、しかも女の子のなるちゃんが残るつていつのに、俺だけ帰るつて「う」とはできなかつた。

「あ、ありがとうございます！ 鳴海さん！ 沖田君！」

店長はわざわざ頭を下げてお礼を言ってくる。

「いいですよ。あ、でも、ちょっと連絡だけしていいですか？」人
と待ち合わせがあるので」

なるちゃんがそう言つてポケットから携帯を取り出す。

「うん！ それぐらい構わないよ！」

店長が大きく頷いた。

そうだ。俺もナツに連絡しておかないと。

「あの、俺も」

「すみません。会計お願いします」
レジの方から客の呼ぶ声が聞こえた。

「あ、はい！」

俺は急いでそっちの方に向かった。

その後も、忙しくて、ナツに連絡をする時間なんてなかつた。

ただでさえ忙しいのに、今日に限つて、携帯は更衣室のロッカー
に置いてしまった。取りにくく暇なんてない。
いつもはポケットに入れるのに、なんで今日に限つて……

しかも大川先輩はなかなか来ない。もうとっくに七時を過ぎてしまつた。

やばこやばこやばこやばこやばこ……

「沖田君、鳴海さん！ 大川君来てくれたから、もう上がるとい
うー。」

店長の声で、俺は物凄くほつとした。

「本当にごめんね！ 助かつたよ。あつがとう！」

「いえ、とんでもないです！ それじゃ、お先に失礼しますー。」

「お疲れ様！」

最後の方はバタバタで、俺は更衣室に戻った。

急がねえと……！ ナツに連絡……ああ！ 着替えが先だ！

俺はロッカーの中から携帯を取つたけど、そりすると着替えの手
が止まつてしまつ。着替えてからナツの家まで走りながら電話した
方が早い。携帯を置いて急いで制服から着替えをした。

今の俺は、とにかく、一秒でも早くナツに会いたかったんだ。

着替えを済ませて、俺は急いで店の裏の従業員用入り口から外に
出て、表の通りに出た。

「沖田君ー。」

丁度その時に前を呼ばれ、俺は振り返った。

なるちやんが俺の後から表に出てきた。

「なるちやん。お疲れ」

さつわざに損ねたから、なるちやんにひづけた。

「うふ。お疲れ。本当に難よね。一か月になると遅くなるなん
て」

「ホントだよなあ」

「沖田君、これから彼女さんのところへ」

「うふ。なるちやんも？ テーマ？」

「うふ。一応ね。待ち合わせの時間遅くしたんだナビ……もう待つ
てるかな」

なるちやんは腕時計を見ながら言った。

「あ、それでね……はー。これ」

なるちやんは鞄の中から小さな袋を取り出して俺に差し出した。

「義理チヨコ。つい言つてもクッキーだけどね。皆に渡したんだけど
ど、沖田君には渡す暇なかつたから。彼氏に焼いた分の余りで、形
もあんまつよくなつたけど、よかつたら貰つて」

「マジで？ ありがとー」

俺はなるちやんの義理をありがたく受け取った。

「あ、行かない。じゃあね、沖田君」

「うん。バイバイ」

手を振って、なるちやんと別れて、俺はクッキーをダウンのポケットにしまって、携帯を取り出そうとした。

俺も急がないと。ナツにも電話しないといけないし。

そう思つた次の瞬間だった。

「あ！ ナツ！」

ふと向いた方向に、ナツがいた。俺は日があつたと同時にナツの方に走つた。

「ナツ！ 何でここにいんの？ もしかして迎えに来てくれた？」
ナツがここにいるなんて思いもしなくて、俺は驚いて聞いた。

「……うん」

「あ、「めんな？ 今日、夜からの奴がインフルエンザで急に来れなくなつたらしくてさ、バイトの時間延びたんだ」

俺はとりあえず遅くなつた理由を話した。

「そりなんだ」

「でも嬉しい。ナツがわざわざ迎えに来てくれるなんてさ」

本当に、嬉しい。ナツがここまでできてくれたなんて。

ナツも、早く俺に会いたいって思つてくれてたのかな。

「んじゃ帰ろ」

俺はいつもの通りにナツを手を繋いで手を伸ばした。ナツが俺の手を握つてくれて、俺達は歩き始めた。

「今日バレンタイン割引つけてやつてさあ

俺は今日あつたことを話そうとした。

「うん。書いてあつたね。200円引きだっけ

ナツは店の前の看板を見たらしく、そんな相槌が返つてきた。

「そつ。だからいつも以上に人居てすっげー忙しかったんだ。しかも皆カツプルだし。……あーあ。せつかくのバレンタインなのにとんだ災難だよ」

そんな風に、いつものよつとナツに愚痴つていた。

「……しじうがないでしょ。そういう仕事なんだから

また違和感があつた。この間の電話の時と同じだ。

「……ナツ、何かあつた?」

俺はナツの様子を見ながら聞いた。

「え……」

「「」の間電話した時も思つたけど……やつぱり元気ないっぽいし

「そんなことないわよ。確かにちょっと仕事の疲れが溜つてるかも
しないけど、別に大したことないから」

「仕事きついの?」

ナツが仕事を口にするなんて、珍しい。よつぽど疲れてる
のかな?

「大丈夫。やらないといけないこともちゃんと片付いたし、あとは
いつも通りだから」

ナツはそう言って、軽く微笑んでいた。

そつか。ナツが大丈夫って言つなら、大丈夫だよな。

「そついえは……旬。携帯、電源切つてたの?」

ナツがいきなりそのことを口にした。

「あつうん。そうだ、俺充電切れかけだつたから切つてたんだ。あ
もしかしてナツ、電話くれてた?」

ナツに言われて俺はやつと携帯のことを思い出した。

「……うん。メールもしたんだけど」

「マジで!?『ごめん、まだ見てなかつた』

それならやつぱり電源入れてバイト中も持つておけばよかつた。
そう思いながら俺はダウンのポケットから携帯を取り出した。

「……普通、それが先じゃない？」

「え……？」

ナツがこきなり言つたことの意味が、俺には分からなかつた。

「女の子と話す暇はあつても、あたしに連絡しようとは思わなかつたの？」

「女の子……？　あ、見てた？　あれ、同じバイトの子だよ。一緒にとぼっちり受けたんだ」
多分ナツはなるちやんのことを言つてゐる。変に誤解されないためこ、俺はそりゃ言つた。

「ああこいつ子、旬の好きそうなタイプよね」

「えー？　まあ、顔は可愛いことは思つけど、別にタイプではないって」

確かに、なるちやんは可愛い。でも、おっぱいはバットだし……
どうひじじり、俺はそこだけを見てるわけじゃない。

「でも、バレンタインの……チョコか何か貰つてたじゃない？」

「貰つたけど……でもあれは義理だから貰つただけだよ。彼氏に作つたクッキーが余つたからつて。皆さんも配つてるし、あんまり形もよくないやつだけどつて言つてたから貰つたんだ」

もし、本命でくれてたんなら、俺は貰つたりなんかしない。本命のはナツからのしか欲しくないから。

でも、ナツは何でいきなりこんなこと言つただろう。

「あ、もしかしてナツ、ヤキモチ?」

「……………別にそんなんじゃないから

ナツの反応はつれなかつた。

「……………でも、このナツの反応は、きつとそうだ。

「ナツ、心配しなくても俺にはナツだけだつて。ナツが居れば、俺
は生きていくから

俺はナツを安心させよつと、笑いながら言つた。勿論、この言葉
に嘘はない。

でも、じつこいつに方したら、ナツはきっと照れるんだうな。
そう思つていた。

でも、ナツの反応はなかつた。そして、後ろで引つ張られるよう
な感覚がした。

「ナツ?」

急にナツが立ち止まつた。俺はナツの方に振り返る。

「何へラへラしてんの…………?」

呟くよつな声でナツが言つた。

「え…………?」

いきなりで、俺は何のことか、全く分からなかつた。

「少しほ悪にとか……申し訳なさそうな態度はとれないとの?」

今度は大きな声で、怒鳴るようにナツが言った。

「あたし……不安だつたんだから。旬が……いつも時間通りにな
のに連絡もなく一時間以上も遅れて……電話しても繋がらないし…
…心配したんだから!」

こんなナツは初めてだった。

「あたしが……そういうの思わないとでも思ったの？ 旬が何時間
遅れても、平氣な顔して、簡単に許すとでも思つてんの！？」

「んな街中で、こんなに大きな声で、俺に対して、こんなことを
言つナツは初めてだつた。

「そんなことないっ！ „めんつ……俺、そこまで考えられて
……でも連絡できなかつたのは、客が多かつたから時間なくて……
終わつてから、ナツの家まで走りながら電話しようと思つたから…
その前に呼び止められて……」

俺はただ焦つて、必死に連絡できなかつたわけを話した。

「もういい！」

俺のそんな言葉は、ナツに簡単に遮られてしまった。

でも、どんなに言おうと、それが今更ただの言い訳じみてしまう
のは、自分でも分かついた。

「何が『ナツがいれば生きていける』よ。そつ言えば機嫌とれると
でも思つてるの！？ どうせ旬はあたしが身の回りのことをやつて
くれるから、あたしがいないとダメなんでしょう！？ そんなの別に
あたしなんかじゃなくてもいいじゃない！」

「ナツ……違つよ……」

そんなこと思つてない。思つたことなんて、ないよ。

「何であたしがこんな思いしないといけないの！？」

俺の言葉は、ナツに全く届かない。

「旬の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがやつてくれて当た
り前つて思つてんの！？ あたしは旬の母親じゃないのよ！…

そこまで言われて、俺は何も言えなくなってしまった。

ナツからしてみたら、全部、本当のことだ。
俺は、ナツに今までそう思われてもじょうがないことをしてたんだ。

「ナツ……『めん』『めんな』……」

バカな俺は、じつやつて謝ること以外、何もできなかつた。

「もう嫌……。これじゃあ、あたしづっかりが旬のこと好きなだけ
みたい……」

「え……？」

ナツ……今何で……

俺が固まつてしまつた瞬間に、ナツの手が振りほどかれて、ナツ
は走つて行つてしまつ。

「ナツ……！」

俺は必死にナツを呼んだ。

「ナツ！ 待つて！」

どんどん遠ざかっていくナツを、俺は追いかけた。

俺にはナツしか見えてなくて、そのせいで周りの人気が見えなくて、たくさんぶつかって、なかなかナツに近づけなかつた。それどころか、俺とナツの距離は、どんどん離れていつた。

ナツの「一ポまできて、俺は階段を駆け上つた。

三階のナツの部屋まで行き、ドアノブに手をかけた。

「ナツー！」

ドアノブを回そうとしても、動かない。鍵をかけられたみたいだつた。

「ナツ……！」めん……

ドアの向こうにいるはずのナツに、俺は言った。

「俺……ナツがそういう風に思つてたとか、全然考えてなくて……走つて息が上がつてゐるせいでの、上手く言葉が出なかつた。

「ねえナツ……開けて……入れてよ」

とにかく、ナツの顔を見て、ちゃんと謝って、許してほしかった。

「……帰つて」「すぐそばでナツの声が聞こえた。

「ナツ……」

「帰つて。旬の顔……見たくない」

ナツのその一言に、俺の頭は真っ白になつた。

「帰つて……」

その後、俺はどうしたのか、はつきり覚えていない。

でも気付いたら、俺は自分の家に帰つてきていた。

玄関で靴を履いたまましゃがみ込んで、ナツに言われたことが頭の中で繰り返された。

『旬の顔…見たくない』

ナツに拒絶された。初めて……

今まで俺がどんなバカなことしようと、ナツは優しく許してくれた。
なのに、今日は、そういうわけにはいかなかつた。

俺はダウンのポケットから携帯を出して、電源を入れた。そして、メールの問い合わせをする。

すぐに着メロが鳴つて、メールがきていたことを知らされた。それは間違いなく、ナツからの着信音だつた。

そのメールを開いてみると、

『まだバイト？何かあつた？
今から迎えに行くからね。』

そう表示された。

それを見たらすぐに、電池が切れてその画面が消えてしまった。

……バカだ、俺。

『ナツ！ 何でここにいんの？ もしかして迎えに来ててくれた？』

そんなの、このメール見てたらすぐに分かつたことなのに…… そんなの、言つことじやなかつたのに……

普通に考えたら分かることじやん。一時間以上連絡しなかつたら、メールぐらいは来てるだろ？！ことぐらい。

あの時、一分一秒でも着替えるのが遅くなつて、ナツに会うのが遅くなつたつて、電話の一本でもかけておけば、ナツは怒ることなんてなかつたんじやん。

俺は、俺のことしか考えてなかつたんだ。

ナツがどんな気持ちになつていたかなんて、考えもしてなかつたし、気付もしなかつたんだ。

それなら、ナツが俺のこと、嫌になつたつて……

そう考えたら、田の前がぼやけた。

泣くことなんてめつたことなの……俺は泣いてしまつっていた。

「ナツ……」

嫌だよ、ナツ。

俺のこと、嫌いにならないで……

俺から、離れていかないで……

20 別れたくない

俺とナツの関係は、ナツ次第なんだ。

俺は、ナツのいうことにムカついたり、イライラすることなんてないから、俺から喧嘩になるようなことは言わないし、当たり前だけど別れようなんて思わない。

もし、喧嘩になつたり、別れ話が出るようなことがあれば、それは全部ナツからというわけで、もし本当にナツからそんなことを言われてしまつたら、俺達は終わりなんだ。

ふと目が覚めた。

俺は携帯を握りしめたまま、いつの間にか眠つていたようだ。

携帯は充電器に差しつぱなしで、開いたままだった。充電は、とつぶに終わつてる。

あれから、俺は何度も何度もナツに電話して、メールした。

でも、ナツは電話に出てくれなかつたし、メールも何の返信もない。

念のため今見てみても、寝ている間に電話もメールもなかつたようだ。

当たり前か。もしナツからだつたら、寝てもすぐ分かるから。

時間を見てみると、九時を過ぎた頃だった。

今日は十時からまたカフェの方でバイトを入ってる。

全然そんな気分じゃないけど、休めない。一応、バイトに生活がかかつてるとだ。

俺はしようがなく、昨日から着っぱなしだった服を脱いで、違う服に着替えた。

「いつて……！」

部屋の中を歩いたら、何かに躓いた。そして、その拍子にローテーブルにスネをぶつけた。

「いつてえー……」

俺はしゃがみこんでぶつけたスネをさすった。

改めて部屋を見てみて、汚いと思った。何に躓いたのかも、分からぬくらいだ。

いつもは大して気にしないけど、今朝はひどいと思つた。

『旬の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがやつてくれて当た
り前つて思つてんの！？ あたしは旬の母親じゃないのよ…』

ナツの言ったことを思い出して、俺はため息をついて、部屋を出た。

当たり前だけど、別に、ナツのことを母親だと想つたことは、一度もない。

でも、ナツが俺してくれていたことは、俺がナツにさせていたことは、母親とそんなに変わらなかつたのかもしれない。少なくとも、ナツにそう思わせてしまつことだった。

とにかく、俺がナツに甘えていたことは、確かだつたんだ。

ナツは優しいから。俺と違つて、大人だから。

「おい、沖田

「はい?」

バイト中、今日もまた同じシフトの大川先輩が俺に話しかけてくる。

「お前なあ、死んだ顔やめろよ。今はまだ客少ないけど、もう少ししたらピークなんだからな。客の前でまで、んな顔すんなよ」

「はあ……はい」

注意を受けて、俺は頷いた。

でも、こんなこと言つたらだめだけど、やる気になれない。笑うなんて、したくない気分だ。

「何だよ、落ち込んでんのか？」

俺の様子を見て流石に氣付いたのか、先輩が呟つた。

「はあ……まあ」

落ち込んでるなんてもんじゃないけど、俺は曖昧に濁した。

「 Bieberお前のことだから、また彼女絡みのことで落ち込んでるんだ。何なんだよ、今度は。つか、昨日は彼女のところに泊まるとかどうとか散々言つてたんじやねえのか」

その言葉で、俺は昨日までのことを思い出した。

昨日は本当に楽しみで、嬉しくてしょうがない日だった。そして、すこく幸せになれる日のはずだった。

なのに実際は、ナツを傷つけ、ナツに拒絶されて……

俺の口からは大きなため息が出た。

「はあー……」

「みんなはずじやなかつたのに……

「何だ、別れ話でもされたのか？」

「ちがいま……」

『す』と言いかけて、俺は口をつぐんだ。

まだ、別れるとはつきり言われたわけじゃない。一応、まだ俺達は付き合っていることになつていてははずだ。でも、ナツの方からその話を切り出されるのも、時間の問題かもしれない。

「図星か？」

先輩はズバズバと痛いことを突いてくる。

「ていうか！ 先輩も悪いんですよ！ 先輩が昨日……」

『もつと早く来てくれてたら、俺とナツはあんなことにならなかつたのかもしれないのに！』

思わず言いそうになつて、やめた。

大川先輩は悪くない。先輩は本当は入つてなかつたのに、無理して入つて、閉店までいたらしい。それで今日も開店からのシフトだ。キツイに決まってる。さつきからあぐびをかみ殺してゐるのを何度も見た。

それに、先輩が早く来て『よう』が、変わらなかつたと思う。俺が最低限しないといけないことをしてなかつたんだから。俺が今までナツに辛い思いをさせてたんだから。

一番悪いのは俺なんだから。

「はあー……」

先輩のせいにしてしまった。そうになつて、俺は自分が嫌になつた。

「……なんだよ。俺、言っちゃいけないとまで言つたのか？ そ
れなら謝るからそこまで落ち込むなよ」

俺の様子ははたから見たらよっぽどうらしい。先輩はいつもと違つ
て心配しているような顔で言つてきた。

「先輩……」

先輩は、俺と違つて大人だ。確かに俺より一つ年上だけど……そ
れよりも、考え方が大人な気がする。

自分が悪いのを、人のせいにしようとした子供の俺と違つて。

「俺、先輩が羨ましいです」

「……はあ？」

俺が言うと、先輩に思いつきり変な顔で見られた。

どうしたらいいんだろう。どうしたら、ナツは許してくれる？

「うわー、へっせー、これ、こいつのだ?」

バイトが終わつたあと、俺は帰つてきた。

そして、散らかつた部屋の片づけを始めた。

自分からこんなことをしたのは、初めてだつた。いつもは気がしないし、やつてくれるのはナシだつたから。

でも、こつもナシは早くやつてしまつのに、俺がやるとなかなか進まなかつた。

皿ひっくり返つて、皿を皿箱に入れたあつとこいつ聞こえ。皿箱は満杯になつてしまつた。しかも、捨てても捨てても「皿せ玉」で、いつのつか分からないうコンビニ弁当の空の容器が臭つていた。

俺、こつもこんなのをナシに片付けさせてたんだ……

やつ思つたら、自分が情けなくなつた。

ナツは一度も、やんなこと言つたことなんてなかつた。こんな部屋なのが、この片づけしてくれてたんだ。

でも、これからは、ナツにそんなことをやない。俺がちゃんと部屋の片付けをするよ」といふ。

「えーっと……これは燃えんのか?」

俺は鼻を押さえながらコンビニ弁当の袋を見て悩んだ。

ナツは、いつもゴミを分別している。俺もちゃんとそうして部屋を綺麗にすることができたから、ナツは俺のことを見直してくれるかもしれない。

多分、これはプラスチックだよな？ プラスチックって燃えんのか？ 燃えなさそりだけど……あ、もしかしてリサイクル？ ……っぽいよな。材質がペットボトルに似てるし。

俺はゴミ袋にそれを入れた。

……ん？ でも普通、リサイクルってペットボトルだけか？ ゴンベニのゴミ箱はペットボトルだけだった気が……

「あー！ わつかんねー！」

考えてるうちに分からなくなつて、俺はゴミ袋を放棄した。

したこともないことをしようとしても、俺の性格上、こんなことできるわけない。

あ、そうだ！ ナツに聞けばいいんだ！

思いついて携帯を手に取つたけど、それはダメなことに気が付いた。

ナツに頼つてたら、意味ないじゃん。大体……ナツに連絡しても、返つてくるかも分からぬのに……

「はあ……」

握りしめた携帯を見て、俺はため息をついた。

それから一日しても……ナツとは全く連絡とれないままだった。

昨日も一昨日も、何回も何回も電話して、メールしたのに、ナツからの返事はない。

今日なんか、電話も通じなくなってしまった。

着信拒否までされてしまったのだろうか。……いや、でもナツの携帯にかけて聞こえたのはその時のアナウンスじゃなかつた。だから多分大丈夫だ。少なくとも、メールは届いてるはず。ナツが見てるかは分からぬけど……

これも初めてだ。ナツと連絡しない日が続くなんて。

今まで、一回だけナツと連絡したことのない日なんてなかつた。俺が連絡すれば、ナツはいつも出てくれた。それが、なくなつている。

でも、ナツから連絡があるのが怖いとも思ってる自分がいる。だって、次ナツから連絡がくるのは、別れたいという話かもしれないから……

本当に、真っ白だ。ナツとつまくいってないってだけで、見える

世界がちがう。全部が真っ白で、全部が味気なくて、全部がつまらない。

ナツがいるだけで、俺の世界は変わつて、ナツがいなくなつただけでも、世界は変わる。

ナツに出会つ前までは、そんなことなかつたのに……

きっと、ナツに出会つて、知つたからだ。居心地のいい、充実した世界を……

だから、俺はもう、ナツなしではだめなんだ。

会いたい。会いたい会いたい会いたい。

『ナツに会いたいよ』

ずっと、ナツには謝りと、連絡ほしいってメールだけ送つていた。

ここで初めて、俺は一番の気持ちをメールで送つた。

ナツに会いたい。

会つて、顔を見て、ちゃんと謝りたい。そしてできるなら、許してほしい。

もうナツに嫌な思いさせないよう約束するから。

だから、別れるなんて言わないで。

こんな気持ちでもちやんとバイトをしてる自分は偉いと思ひ。でも、俺が何もしなくなつたら、今度こそ本当にナツガになくなつてしまいそうだから……それだけが怖くて、俺はやらないといけないこじだけはしていた。

「はあー……」

今日のバイトを終えた俺は、着替えをしながらもため息をついた。一応、バイトに顔を出して仕事はしてるものの、身が入らなくて、自分でも分かるぐりいたくさんため息をついていた。

携帯を見てみても、ナツからはメールも着信もない。それを確認しただけで、俺のテンションはどんどん下がっていく。
もうダメなのかな……

流石の俺にも、そんな考えが浮かんでしまつ。

その時、俺のロッカーからヒラリと紙が落ちた。俺はそれに気付いて拾つた。

それは、前になるちやんからもひつた、雑誌の切り抜きだつた。

金を貯めて、ナツにあげようつと想つて、口紅の……

俺はそれを見て、すぐ更衣室を飛び出した。

「店長!」

厨房の入り口へ行き、ケーキを作つてこる店長を呼んだ。

「沖田君……どうしたの? 今日までもう上がつたんじゃあ……
店長は驚いた顔で俺の方を見た。

「あの、頼みがあるんですけど」

「え、何? どうかしたの?」

「給料、前借りしたいんですけど、ダメですか?」

「え?」

店長は田舎を丸くしている。そりゃそりだらう。

「前借りって……給料田、明日だよ?」

やつ。カフフのバイトの給料日は一度明日だ。でも……

「急ぎなんです。少しだけでもいいですから……」

明日までなんて待つていられない。今じやないとダメなんだ。

「うーん……」

考えこんでいる店長を、俺は祈るよつと見ていた。

「じゃあ……今回だけ、特別ね」

「あ、ありがとうございます……」

俺はまっとして店長に深く頭を下づいた。

「ここがよ。沖田君この前、無理に残つてもらつたから。
そのお礼だよ。じゃあちょっと待つてて
店長はそう言つて、厨房から出て行った。

よかつた……これで買える。

2.1 プレゼント

カフェを後にし、俺はデパートに来た。

案内版を見て、目的地を探す。

あ、あつた。四階か。

俺はそれを見つけると、エレベーターで四階へと向かった。

店長は、給料を二万円前貸ししてくれた。十分すぎぬぐらいで貰えてよかつた。給料日前日だったから、金なんてなかつた。

ナツに渡したいものを買うための……

ローン

『四階です』

機械のアナウンスが聞こえて、エレベーターの扉が開く。俺はそこで降りた。そこで一緒に降りる人はみんな女人だった。

そりやそりや。ここは、化粧品売り場だから。

そこに出でみて、俺は緊張した。女人だらけで、雰囲気が……。男が入りにくい感じだし……。というか、こんなところに男一人じゃ浮くよな。

いやダメだ。こんな雰囲気だけでビビッてたら向にもなんねえじやん。堂々としてたら大丈夫だつて！

心中で葛藤を繰り返して、俺はその空間に足を踏み入れた。

でも、足を踏み入れたはいいものの、俺には右も左も分からない。雑誌の切り抜きだけを持つていても、それがどこにあるか分からないし、じつこいつてどうこいつ風に店においてあるのかも分からぬ。

俺にはまるで迷路だった。

「何かお探しですか？」

後ろから声をかけられた。振り向くと、店員のお姉さんが営業スマイルを浮かべてそこに立っていた。

「あ……あの、口紅……なんですか？」えーっと、これ……これです

俺は何となく怯えながら答えて、店員のお姉さんに切り抜きの口紅を見せた。

「これでしたら、こちらになります」

店員のお姉さんはすぐに分かつたらしく、俺を案内してくれた。

何だ。最初から店員さんに聞けばよかつた。

「いらっしゃります」

店員のお姉さんは棚の前に立つて教えてくれた。そこには、お田当てのものが並んでいた。

「お色が、全部で十一種類ありますが、どれになさいますか？」

十一種類……そんなんにあるのか。

「えーっと……どれがいいとかあるんですかね？」

なるちゃんに雑誌を見せてもらつてた時と同じで俺には全く分からぬい。

「そうですねえ……どれを使うかはお客様のお好みですし……彼女さんへのプレゼントですか？」

「はい。まあ……」

改めて言われると、ちょっと照れ臭かつた。

「ピンク系とオレンジ、ベージュは女性に人気ですが……その中から選んでみますか？」

「あ、はい」

俺は言われた通りにすることにした。

店員のお姉さんが見せてくれた色は五色での中でもピンクだけで三つあった。濃い色と、薄い色と、ラメっぽい色だ。

そういうえば、ナツが持つてたのは、ピンクだつたはずだ。ナツはやつぱり、その色が一番似合つと思つ。

「……じゃあ、これこじまく」

俺はナツが持っていたのと同じ色を選んで、店員のお姉さんに言った。

「はい。包装はいかがなさいましたか。プレゼント用でよいですか？」

「はい。それでお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

ポケットの中からプレゼント用の袋に入れられた口紅を、俺はダウンのポケットにいた。

そして、携帯を取り出した。

今、五時三十三分。

多分、ナツの仕事は終わってるはずだ。

俺はナツにメールを打った。

『今からナツの家に行くよ』

そして、そのメールの通りに、俺はナツの所へと向かった。

ピンポン……

ナツの部屋のインターホンを鳴らしても、何の反応もなかった。

まだ帰っていないみたいだ。もつすぐ帰つてくれるのかな？

俺はドアにもたれかかって、ナツを待つことにした。

それから暫くしても、ナツが帰つてくる気配はなかつた。

寒い……

俺は冷たくなつてしまつた手をすりあわせた。足が疲れてきたからここに座りこんだ。

さすがに遅いな……

もしかして帰る途中でなんかあつたとか……？

どうしよう……！　ナツにもしものことがあつたら……俺……

『あたし……不安だつたんだから』

ふとナツが言つたことを思い出した。

あ……そつか……

ナツもあの時、こんな気持ちだったのかな？　連絡しなかつた俺を、こんな気持ちで待つてくれたのかな？

……不安に思つてくれた。ナツが、俺のことを見た。

こんな時にこんなこと思つてゐる場合ぢやないけど……でも、嬉しい。

初めて、ナツに言われた。俺のことに対する不安だつたとか、心配してたとか……

『これじゃあ、あたしばかりが匂のことで好きなだけみたい

俺のこと好きだつてことも。

初めてそういう言われたのにこんな状況なんて、いいわけないけどさ

俺は携帯を取り出して、ナツにメールを打つた。

『俺、ナツが帰つてくるまでずっと待つてるよ

ナツはあの日、ずっと待つてたんだ。だから、今日は俺がナツのことを待つ。

ナツが来るまで、ずっと……

「ふえっくしー！」

さつきから、くしゃみが出始めた。

今日は寒いな。

俺は手をこすりあわせて、ダウンのファスナーを上まで上げて、俺は小さく丸まっていた。

ナツはまだまだ帰つてこない。

本当にどうしたんだろう……

何かあつたからなのかな？

あ、もしかして、俺が送つたメール見て、俺に会いたくないって思つたとか？ ずっと待つてるとか送つたから、ウザかつたとか？ ……有りえるかもしれない。

今日は帰つてこないのかな？

まさか、他の男の人との間に行つてたり……

嫌だ！ それだけは嫌だ！

「ふえっくしー！」

嫌な考えが浮かんで、それはくしゃみと同時に吹つ飛んでいく。

……大丈夫。ナツはそんなことしない。大丈夫。

俺は、去年ナツがデートで選んでくれたダウンの腕を握りしめた。

「ふえっふしつ！」

またくしゃみが出た。

そうだ。ナツが帰つてきても、ナツとちゃんと話して、許しても
らえるまで、ヘラヘラしないようにしないと。ちゃんと、真剣な顔
しどかないと……

その時だった。

「……………」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

小さかつたけど…………」の声は……

俺は声の方を向いた。

そこには、大好きな人が、一番会いたかった人が……ナツがいた。

2.1 プレゼンター（後書き）

次回、サイドストーリー最終回です！

22 必要な人

「ナツ！」

俺は立ち上がりてナツに近付いていった。

「お帰り、ナツ！」

よかつた。ナツに何もなかつたみたいで……

寒さでこわばっていた顔が、ほつとしたのもあつてこいつものよう
に緩むのが自分でも分かった。

……て、だめじやん！ ヘラヘラしないって決めたばっかだった
のに……

「ただいま……」

ナツが小さな声で、俺に言った。

よかつた……返事してくれた。

さらにほつとして、また顔が緩んでしまう。

「旬……本当に、ずっと待つてたの？」

すぐに帰つて、とか言われると思つたから、少し安心した。

「うん」

「こんなに寒いのに……風邪ひいても知らないわよ」
そう言つナツは、いつものナツだった。

「大丈夫だつて。俺、バカだから今まで一回も風邪ひいたことねえ
もん」

よかつた。ちゃんと話してくれてる。ほつとして俺は笑っていた。

「ふえつぶしょん！」

何の前触れもなくくしゃみが出てしまった。

「やつぱぱちゅうと寒いな」

かつこわる……大丈夫って言つたばつかだつたのに。

思いつきり鼻から息を吸うと、ズルルッと鼻水が音をたてた。

「匂、鼻水出でる」

ちよつとはにかんだよつた顔でナツが言つた。

「え……マジで！？」

ダサツ！俺、ダサツ！こんな場面で鼻水なんて出すもんじや
ないだろ！

俺は手の甲で鼻の下をこすつた。

「ほら、ちゃんとかんで」

ナツがティッシュを俺の鼻にもつてきて言つた。

俺は言われた通りに鼻をかんだ。

ジユルルツと自分で思つた以上の鼻水が出た。

「うわっ。大量」

予想以上で俺は驚いて言つた。

そしたら、ナツが笑った。

「へへっ」

ナツが笑ってくれた。それが嬉しくて、俺も笑った。

「寒かったよね……早く中、入ろ」

いつも通りに優しくナツが言ってくれた。

「うん」

俺は更に嬉しくて頷いた。

「匂、こたつ入ってて」

ナツは部屋に入つてエアコンをつけてこたつの電源を入れて、コートを脱ぎながら俺に言った。

「うん」

部屋に入っただけでずいぶん温かく感じた。俺は言われた通りにすぐにおこたつに入った。

「匂、ココアでいい？」

台所からナツが聞いてきた。

「うん。ありがと、ナツ」

俺はナツの方を向いて答える。ココアといつ甘くて温かい響きに、顔は自然と笑顔になるのが分かる。

あつたけー……

だんだん温かくなることたつが気持ちいい。俺はすっかり和んでいた。

て、ダメじゃん！ 何和んでんだよ、俺！

ナツが優しいからうつかり忘れそうになつてた。
俺はナツに謝らないといけないんだ。

ナツのこの様子だと、もう気にしてないのかなとも思つ。何も言つてないけど、俺のことを許してくれたのかなとも思つ。

でも、俺はまだちゃんと謝つてない。許してくれるナツに甘えてたらダメだ。

俺はこたつから出て、ナツの方を向いて正座した。

「ナツ……」「めんな……」

俺はナツの背中に声をかけた。

「え……？」

ナツはこつちに振り向く。目を丸くして、驚いた顔をしていた。

俺は緊張しながら口を開いた。

「俺……本当に今までナツのことちゃんと考えてなかつたっていうか……いや、ナツのことは本当に大好きだし、すっげー大事に思つ

てるよ！……でも、知らないうちにナツに甘えてたのは、確かだと思つ……。ナツがどう思つとかは、やつぱり考えられてなかつた……

自分で言つて、情けなくなつて俺は下を向いた。

「これじゃあ、俺、ナツの彼氏つて言えないよな……」「本当にそうだ。

俺、ナツの彼氏として、ナツに向してたつていうんだる。

でも……

「でも、これからは気を付けるから……だから……別れるとか、考えないでほしいんだ！ 俺は、ナツが一番大切だから……ナツがいないとダメなんだ！」

ナツがいないとダメだと、この三田で思い知つた。ナツがいないことなんて、考えられないんだ。

「旬……違うの……」

ナツがいきなり声を上げて、俺はびっくりした。

「旬は全然悪くないの！ あの時は……あたしが勝手にイライラして……それで旬に当たるみたいになつちやつて……どうかしてたの。連絡も……何だか気まずくてできなくて……だから、旬のことを悪く思つたわけじゃないの……！」

ナツが一気に喋つたことに俺はただ驚いて、そして、ナツの言ったことを頭の中で繰り返す。

俺が思つてたほど、ナツは俺のことが嫌じやないつてこと……？

つて」とね……

「……じゃあ、別れようとか、思つてない？」
念のため、ナツにちやんと聞いて確認した。

「うん」

ナツはすぐに頷いた。

「じゃあ、これで仲直り？」

「うん」

ナツはまたすぐに頷いた。それだけでほつとした。

「よかつた……」

本当によかつた。ナツが別れようと思つてなくて……ナツと仲直りてきて……

一度その時、ピーッと高い音がして、ナツは慌ててコンロの方に向いて火を止めていた。俺はそれを見て、こたつに戻った。

これで一安心だ。でも、これからは本当に火をつけるようになといとな。

そう思いながら、俺はダ・ウンのポケットに手を突っ込んだ。

あ……

ポケットの中に入れてた小さな袋に手が当たった。うつかり忘れるところだった。

ナツに渡さないといけないんだ。

ナツがカップに入ったココアを持ってきて、俺の前に置いてくれた。

「あ、ありがと、ナツ」

俺が笑つてナツに言つて、ナツも微笑んで俺のそばに座つた。

それを見ながら俺はココアを一口飲んだ。温かさと甘さが、俺の体の中もじわりと染み渡つていく感じがした。

よし……！

「ナツ。これ……」

俺はポケットからナツへのプレゼントを取り出して、こたつの上に置いた。

「何？ これ……」

ナツはそれを見て首を傾げている。

「開けてみて」

ナツに対してもこんな台詞を言つたのは初めてだった。ちょっと照れる。

ナツは袋を丁寧に開けて、手の上に中身を出した。

「匂……これって……」

ナツはまた驚いた顔をして俺を見た。

「うふ。この前、俺のせいで折っちゃったから……本当は来用に渡そうと思つてたんだけど、その……色々、ナツに嫌な思いもさせるから、そのお詫びっていうか、わ。あっ、でも別にこれでチャラにして貰おうとか、そういうことじゃないから……何での？俺なりの誠意っていうか……」

言いたいことがうまくまとまらない。言つてて自分でも何なのか分からなくなってきた。

「同じバイトの人聞いたり、雑誌借りたりしてさ、人気あるしいのにしたんだ。色とか、ナツに合いそうな選んだんだけど……」
「そう言ってみても恥ずかしい。プレゼントするつてこんな恥ずかしいことなんだ。何か色々とむず痒い。」

「でも、口紅つて高いんだなー。俺、びっくりしたよ。女人って大変なんだなって改めて思つた」「それを誤魔化そうとして俺はそつと言つた。」

「こんな場面で言つことじゃないかな？」

「…………ありがとう」「でもナツは、その口紅を大事そうに握りしめてそつと言つてくれた。
よかつた……気にいつてくれたみたいだ。」

俺はほつとしながら「アアを飲んだ。

「俺さあ……あの時、ぶっちゃけ嬉しかったんだ。ナツが俺のこと心配してくれてたこととか……ナツが言つたこと」

『……これじゃあ、あたしばかりが匂のこと好きなだけみたい……』

「え……？」

「何か……初めてだったからさ。ナツがはつきり俺のこと心配してたとか、好きだって言ってくれたの」

ほつとしたついでに、俺は本音を口にした。

「俺……ちょっと不安だったから……。いつも、俺だけがナツのこと好きだつて言つて、俺だけがナツのこと好きなんだと思ってた……。ナツが俺のことどう思つてるか、自信なかつたんだ。付き合い始めたのも、何だかんだ言つて、俺が無理矢理つてどこもあつたし……ナツは優しいから、別れようとか言えなかつたりしたのかなって思つたり？……だつたから、嬉しかつたんだ」

今回のことでの、初めてナツからそんなことが聞けた。だからよかつた。

「あ！ でも別にナツに言われたのに懲りてないわけじゃないから！ 後でメチャクチャ後悔したし！」

こんな言い方をしてナツに誤解されたら嫌だから、俺は慌ててフオローした。

そしてふとナツのことを見てみると……ナツの目から涙が零れていた。

「え……ナツ？」

俺が驚いて声をかけると、ナツは下を向いてしまった。

ポタポタとナツの涙が落ちている。

「ナツ？『ごめん！』俺、また変なこと言つた？」

物凄く焦った。俺は気付かないうちにナツを傷つけるようなことを言つてしまつたんだろうか……

俺は下を向くナツの顔を覗き込もうとした。

その時、いきなりナツが動いて、俺に抱きついてきた。勢いが良くて、俺は慌てて後ろに手をついて体を支えた。

「ナツ……？」

ちやんとナツを受け止めたものの、何がおきたのか全く分からなかつた。

「ナツ……どうした？」

俺はとりあえずナツの背中に手を回した。

抱きついてきたってことは、多分俺が変なこと言つたってわけじゃないと思つ。

でも、何でいきなりナツは泣いて、俺に抱きついてきたんだろう？

……？

「匂……ごめん。『ごめんね……』

俺の耳元で、涙声のナツがそう言つた。

何の「ごめん」なのか、俺には分からぬ。

ナツに更に抱き合はれると抱き締められて、ナツの髪が俺の鼻にあたる。いつもナツの匂いだ。ナツのいい匂いは、シャンプーか何かだったことを、俺はこの時初めて知った。

「ふええ……しゃつ、匂……ごめ……」「めんなさ、い……」「めんなさい……」「

ナツの涙声は更にひどくなつて、ナツはまた謝つてきた。そして、そのまま泣いている。

こんなナツ、初めてだ。

「ナツ？ 何でナツが謝つてんの？ つうか、何でそんなに泣いてんの？」

俺は、何をしていいのか分からなくて、でもとりあえずナツが早く落ち着くように背中を撫でた。

「あ、あたし……何でつ……匂が……あたし、と付き合つてつ……る涙声のまま、ナツが言つた。

「あ、あたし……何でつ……匂が……あたし、と付き合つてつ……るのか、分かんなく……て……あたしはつ……匂、より……四つも上つ、だし……匂は……む、胸のおつきい人……好き、だから……それだけしか、見てない、のかもつて……思つ……たり、それに……ほ、本当に、匂は、あたしが、匂の身の回りのこと…全部してくれるからつて、付き合つてるんじや……ないかつて、本当に、思つたの……匂は、あたしじゃなくても……いいんじや、ないかつて……あたしの代わりは、他にもいるんじやないかつて……そう思つたら、すくべ……嫌

だつた「

ナツが言つことを、俺は黙つて聞いていた。

「そうか……ナツは、そういう風に思つてたんだ。ナツはナツで、ずっと不安だつたんだ。」

「ナツ……」

俺は片方の手で、ナツの頭を撫でた。

「前にも言つたかもだけど、俺は……ナツだから、好きなんだよ。もし他に、ナツみたいにおっぱいでかい人がいても、家事全般ができるような人がいても、それがナツじゃないなら、絶対好きになんかならないよ」

これが、俺のそのまんまの気持ちだ。

俺が好きなのはナツだけで、ナツのまるごとが大好きで、ナツだからこそこんな気持ちになる。

ナツのほっぺたが俺のとくついた。その感触も、すく好きだ。

「ナツ……大好きだよ。俺はナツの全部が好き。ぎゅっとすると柔らかくていい匂いがして、しつかり者で優しくて、たまに怒つたり、照れたり、笑つたり……今初めて見たけど、泣いてることも。ナツの全部は、俺の中の一部なんだ。だから、俺はナツがないとダメなんだ」

今回のことでの、それをはつきりと思い知った。ナツは俺にとって必要な人なんだ。

ナツがないと、俺は心から笑うことができないから。

幸せになんて、なれないから。

「匂……あたしも」

その言葉と同時に、ナツの腕にまた力が入った。

「あたしも……匂のこと、大好きだよ……大好きだからね……」
はつきりと、ナツが言った。初めてだつた。

「匂は……だらしなくて、いつも部屋行くと汚いし、エッチなことばつかしてくるし……本当は、あたしの理想とは全く違つけど……」

え、そいつなの？ 思わずそいつ言こやうになつた。

「でも……それでも匂だから……匂だから好きだよ！ 匂じゃなかつたら、一緒に居たいつて……離れたくないつて、思わないからつ……」

ナツは、初めてちゃんと伝えてくれた。俺は、ナツの気持ちを、初めてちゃんとした形で聞いた。

それは、どんな告白の台詞よりも、甘くて、優しくて、幸せな言葉だった。

「よかつた……」

俺はナツのことを抱きしめ返した。

「よかつた……ナツが、俺のこと嫌いじゃなくて……」

本当によかつた。ナツの、本当の気持ちも聞けて……

「…………？」

俺の腕の中で、またナツが泣き始めた。

「えつ…………？ 何でそこで泣くの！？」

何でまたこのタイミングで……俺、特に何も言つてないのに……

「ナツ～、泣きやめ～？」

俺は、腕を緩めて、両手でナツの顔を挟んだ。

俺がナツのほっぺたを撫でても、ナツは下を向いたまま泣いている。

「ナツ。俺、ナツは笑ってる時の方が好きだよ？だから、笑って？」

俺はちよつと無理矢理ナツの顔を上げた。

ナツは、目を真っ赤にしていて、その周りの化粧が落ちて、黒くなっていた。

「…………やっぱ泣いてるとこもめちゃくちゃ可愛い」
思わず笑いながら言つてしまつた。

でも本当のことだ。ナツは泣き顔まで可愛い。

そしたら、ナツが吹き出した。

「もうい……何言つてんの」

ナツはいつも通りにそう言つた。

「あ、やっぱナツはそういうじゃないとな」「まだ少し泣いていたけど、でも、ちゃんとといつも通りのナツに戻つてゐる。

「メイク、落とさないと」

指で目元を擦つて、ナツが言った。

そして俺の腕の中から抜けていつて、俺に背中を向けて、ティッシュで拭いでいる。

これで、もう今まで通り。いや、今までよつナツとのハグラブ度が増したかな？

そう思つて氣を抜いた瞬間だった。

ぐるぐるぐるぐる……

いきなり俺の腹が主張を始めた。

俺は慌てて腹を押さえた。

ナツが俺の方を振り返る。

「ハハッ……そう言えれば俺、まだ晩飯食べてなかつた。氣が抜けたらつい鳴つけました」

そう言つて誤魔化そうとしたものの、物凄く恥ずかしかつた。
何でこのタイミングで鳴るんだよ、俺の腹……

ナツにも少し笑われてしまつた。

「……匂、何食べたい？ 出来るものなりすべ作るかい
ナツは俺の方に向き直りながらさりとててくれた。

「ん……じゃあ……」

何を食べたいか、それを考えながらナツを見ていたら、ほんのい
たずら心がうずいた。

「ナツ食べたいな……」

もちろん、それも嘘じやないけど。でも、軽い冗談のつもりだっ
た。

「ひと言つたら、きっとナツは真っ赤になつて『わつ……何言つて
んの』って言つだらう。」

そう思つていた。

「……なーんて。……え？」

ナツが、笑つた俺の顔を触つてゐる。まさか、こいつなるなんて、
全く思つてなかつた。

「ナ……ナツ？」

俺はただ驚くだけで、何もできなかつた。

ナツの顔が、どんどん俺の顔に近付いてくる。

「いいよ。食べても……」

ナツの息がかかつたと思った瞬間、俺の頬は、ナツの頬に塞がれ
てしまつた。

「一度目だった。ナツからキスをされたのは……」

ナツに初めて会って、ナツと初めてセックスした、あの夜以来で……俺は今回もあの時と同じように、目を閉じることを忘れて、俺の口の中に忍びこんだナツの舌に、されるがままになってしまった。

唇が離れてからも、俺は動けないままだった。

情けないことに、ただ動搖してどうしたらいいか分からなかつた。気持ちとしては、見てはいけないものを見てしまった感じだつた。

前にキスされた時のナツは大胆だったけど、それは酔つてたからだと思ってた。普段のナツは、そんなことしないから。でも、今はシラフのはずのナツも、同じようなことをした。

「ど、ど……どういふことだ？ どっちが本当のナツなんだ？」

「な、なんてねつ」

ナツは少し顔を赤くして、明るく言つた。

「じめん、なんかあるものすごく作るね」

慌てた様子で、そつと置いて、ナツが立ち上がつた。

俺はほとんど無意識で、ナツの手を掴んでいた。

「え……匂？」

ナツは目を丸くしながら俺を見下ろしていた。

「ナツを食べる」

そのままナツを引っ張ると、俺の腕の中にすっぽりと入った。

「 いただきます」
ちゃんと行儀よくそう言ってから、俺は美味しいナツをいただいた。

どつちが本当のナツなのか。それは多分ないんだ。大胆なナツも、ナツであることは変わりなくて、そして、俺がそんなナツのことも好きなんだということにも変わりはない。

とにかく、ナツに出会ってから、ナツ中毒になってしまった俺は、どんな時でも、ナツがないとダメなんだ。

22 必要な人（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございましたー感想を
いただけたと嬉しいです。

ダメ男依存症候群の続編を連載中です。よろしければそちらも是非
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9186b/>

ダメ男依存症候群～俺は彼女に中毒症状～

2011年10月3日12時53分発行